

Title	心が活きる教育のための国際的拠点：平成20年度活動報告書
Author(s)	子安, 増生
Citation	(2009)
Issue Date	2009-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/142949
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

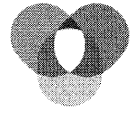


平成19年度文部科学省「グローバルCOEプログラム」研究拠点形成費補助金
(京都大学 機関番号14301 拠点番号D-07)

心が活きる教育のための国際的拠点
Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

平成20年度活動報告書

2009年7月



平成19年度文部科学省「グローバルCOEプログラム」研究拠点形成費補助金
(京都大学 機関番号14301 拠点番号D-07)

心が活きる教育のための国際的拠点
Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

平成20年度活動報告書

2009年7月

研究拠点の名称

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

(京都大学 機関番号14301 拠点番号 D-07)

研究拠点形成費

平成20年度 直接経費111,900千円 間接経費33,570千円

学内関連部局

教育学研究科 (教育科学専攻、臨床教育学専攻)

高等教育研究開発推進センター (高等教育教授システム研究開発部門)

文学研究科 (行動文化学専攻・心理学専修)

人間・環境学研究科 (共生人間学専攻・社会行動論講座、認知科学講座、行動制御学講座)、

こころの未来研究センター

*霊長類研究所 (思考言語分野)

注) * は協力部局である

研究組織

- ユニットA 「基礎過程：心が活きるとは？」
- ユニットB 「システム：社会システムの設計」
- ユニットC 「サポート：個人と関係のサポート」
- ユニットD 「開発評価：ユニットの評価尺度開発」

構成メンバー

	職階		氏名	所属ユニット	専門分野
人間・環境学研究科	教授	○	岡田敬司	A	教育人間学
	教授		小山静子	A	教育史学
	教授	○	杉万俊夫	B	社会心理学
	教授	○	齋木 潤	A	認知科学
	教授		松村道一	C	認知神経科学
	准教授		永田素彦	B	社会心理学
	助教		山本洋紀	A	視覚心理学
	助教		久代恵介	A	認知神経科学
文学研究科	教授	○	苧阪直行	A	知覚心理学
	教授	◎	藤田和生	A	比較認知科学
	教授	○	櫻井芳雄	A	認知神経科学
	准教授		板倉昭二	A	発達認知科学
	准教授		蘆田 宏	A	認知心理学
教育学研究科	教授	○	辻本雅史	A	教育史学
	教授	◎	鈴木晶子	D	教育哲学
	教授	○	山田洋子	C	生涯発達心理学
	教授		田中耕治	B	教育方法学
	教授	◎	子安増生	D	発達心理学
	教授	○	楠見 孝	B	認知心理学
	教授		岩井八郎	B	教育社会学
	教授		稲垣恭子	B	教育社会学
	教授		川崎良孝	B	図書館情報学
	教授		前平泰志	B	生涯教育学
	教授		高見 茂	B	教育行政学
	教授	◎	杉本 均	B	比較教育学
	教授		矢野智司	C	教育人間学
	教授		西平 直	A	教育人間学
	教授		桑原知子	C	心理臨床学
	教授		伊藤良子	C	臨床心理実践学
	教授		皆藤 章	C	臨床教育学
	教授	○	角野善宏	C	臨床心理実践学
	准教授		駒込 武	B	教育史学
	准教授		西岡加名恵	B	教育方法学
	准教授		齊藤 智	A	認知心理学
	准教授		渡邊洋子	B	生涯教育学
	准教授	○	佐藤卓己	B	メディア社会学
	准教授		金子 勉	B	教育行政学
	准教授	○	齋藤直子	C	教育人間学
	准教授		田中康裕	C	心理臨床学
	准教授		明和政子	C	比較認知発達科学
	准教授		大山泰宏	D	臨床教育学
	准教授		南部広孝	B	比較教育学
	助教		中池竜一	B	認知科学
	助教		安川由貴子	B	生涯教育学
	助教		石井英真	B	教育方法学
助教		片畑真由美	C	臨床心理実践学	

教育学研究科	助教		竹中菜苗	C	心理臨床学
	助教		高嶋雄介	C	心理臨床学
	助教		赤沢真世	B	教育方法学
	助教		井谷信彦	A	教育人間学
	助教		モイセス・キルク	D	教育心理学
	助教		浅田剛正	C	臨床実践指導学
高等教育研究開発センター	教授	○	田中每実	D	人間形成論
	教授		大塚雄作	D	教育心理学
	教授	○	松下佳代	D	教育方法学
	准教授		溝上慎一	D	青年心理学
	准教授		デビッド・ダルスキー	D	社会心理学
	准教授		田口真奈	D	教育工学
	特定准教授		酒井博之	D	音響心理学
	助教		河崎美保	D	教育心理学
	特定助教		石川裕之	D	比較教育学
	特定助教		及川恵	D	教育心理学
こころの未来研究センター	教授	○	吉川左紀子	A	認知心理学
	教授		船橋新太郎	A	認知神経科学
	教授		カール・ベッカー	D	倫理学、宗教学
	教授	◎	河合俊雄	C	心理臨床学
	教授		鎌田東二	A	宗教哲学、民俗学
	助教		久保南海子	A	認知発達心理学
	助教		番 浩志	A	認知神経科学
	助教		内田由紀子	A	社会心理学
助教		平石 界	A	認知心理学	
霊長類研究所	教授		松沢哲郎	A	比較認知科学
	准教授		友永雅己	A	比較認知科学
	准教授		佐藤 弥	A	認知心理学
	助教		林 美里	A	比較認知科学
	助教		足立幾磨	A	比較認知科学
野生動物研究センター	准教授		田中正之	A	比較認知科学
グローバルCOE	COE助教		大塚結喜	A	認知心理学
	COE助教		楠山 研	B	比較教育学
	COE助教		ルプレヒト・マツティク	D	教育学
	COE助教		小野文生	D	教育哲学
	COE研究員		小島隆次	B	認知心理学
	COE研究員		櫻井里穂	D	比較教育学
	COE研究員		廣瀬信之	A	実験心理学
	COE研究員		清水亜紀子	C	心理臨床学

所属・職階は平成21年3月末時点のものを示している。

◎はリーダー職、○はリーダー以外の事業推進担当者を示す。

目次

はじめに	1
拠点形成の目的	4
各ユニットの成果の概要	11
講演会、シンポジウム、ワークショップの開催記録	31
若手研究者養成プログラム及び研究開発コロキウム	55
修士論文及び博士論文	63
業績	71
資料	113
添付論文	CD-R (非添付)

ユニットA 「基礎過程：心が活きるとは？」

- Fujita, K. (in press). Metamemory in tufted capuchin monkeys. *Animal Cognition*.
- Kano, F., Tanaka, M., & Tomonaga, M. (2008). Enhanced recognition of emotional stimuli in the chimpanzee (*Pan troglodytes*). *Animal Cognition*, 11, 517-524.
- Kuriki, I., Ashida, H., Murakami, I., & Kitaoka, A. (2008). Functional brain imaging of the Rotating Snakes illusion by fMRI. *Journal of Vision*, 8, 1-10.
- Kushiro, K., Bai, R. S., Kitajima, N., Sugita-Kitajima, A., & Uchino, Y. (2008). Properties and axonal trajectories of posterior semicircular canal nerve-activated vestibulospinal neurons. *Experimental Brain Research*, 191, 257-264.
- 岡田敬司 (2009). 情動共同体から対話共同体へ. 岡田敬司, 『人間形成にとって共同体とは何か』. ミネルヴァ書房. pp. 1-7.
- Otsuka, Y., Osaka, N., & Osaka, M., (2008). Functional asymmetry of superior parietal lobule for working memory in elderly, *NeuroReport*, 19, 1355-1359.
- Saiki, J. (2008). Stimulus-driven mechanisms underlying visual search asymmetry revealed by classification image analyses. *Journal of Vision*, 8, 1-19.
- Saito, S., Jarrold, C., & Riby, D. M. (2009). Exploring the forgetting mechanisms in working memory: Evidence from a reasoning span test. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 62, 1401-1419.
- Sakurai, Y., & Takahashi, S. (2008). Dynamic Synchrony of Local Cell Assembly. *Reviews in the Neurosciences*, 19, 425-440.

- Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S. (2008). Time course of superior temporal sulcus activity in response to eye gaze: a combined fMRI and MEG study. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, **3**, 224-232.
- Tsubomi, H., Ikeda, T., Hanakawa, T., Hirose, N., Fukuyama, H., & Osaka, N. (2009). Connectivity and signal intensity in the parieto-occipital cortex predicts top-down attentional effect in visual masking: An fMRI study based on individual differences. *Neuroimage*, **45**, 587-597.
- Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B. (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **34**, 741-754.

ユニットB 「システム：社会システムの設計」

- Komeda, H., Kawasaki, M., Tsunemi, K., & Kusumi, T. (2009). The differences between estimating protagonists' and evaluating readers' Emotion in narrative comprehension. *Cognition and Emotion*, **23**, 135-151.
- 佐藤卓巳 (2008). はじめに—通信教育のメディア幻想を超えて. 佐藤卓巳・井上義和 (編), 『ラーニングアロン』. 新曜社. pp. 9-18.
- 杉万俊夫 (2008). 地域活性化のアクションリサーチ. サトウ タツヤ・南 博文 (編), 『質的心理学講座 3 社会と場所の経験』. 東京大学出版会. pp.155-181.
- Sugimori, E. & Kusumi, T. (2009). Limiting Attentional Resources Influences Performance and Output Monitoring of an Event-Based Prospective Memory Task. *European Journal of Cognitive Psychology*, **21**, 112-128.
- 田中耕治 (2008). 「目標に準拠した評価」をめぐる現状と課題. 教育目標・評価学会紀要, **18**, 1-7.
- 田中耕治 (2008). 学力調査と教育評価研究. 教育学研究, **75**, 146-156.

ユニットC 「サポート：個人と関係のサポート」

- 矢野智司 (2008). 贈与と交換の教育人間学』という問題圏 近代教育フォーラム, **17**, 93-106.
- やまだようこ (2008). 多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル 質的心理学研究, **7**, 21-42.
- 高嶋雄介, 須藤春佳, 高木綾, 村林真夢, 久保明子, 畑中千紘, 重田智, 田中史子, 西嶋雅樹, 桑原知子 (2008). 学校現場における事例の見方や関わり方にあらわれる専門的特徴. 心理臨床学研究, **26**, 204-217.

ユニットD 「開発評価：ユニットの評価尺度開発」

- Mattig, R. (2009). Einleitung, Rock und pop als ritual, transcript Verlag, Bielefeld.
- Suzuki, S. (2008). Takt als Medium. *Paragrana*, **17**, 145-167.
- 小川絢子・子安増生 (2008). 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性：ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に. 発達心理学研究, **19**, 171-182.

はじめに

京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」（拠点番号D-07）は、平成19年度文部科学省研究拠点形成費等補助金「グローバルCOEプログラム」に採択され、平成19年6月より活動を開始し、現在3年目を迎えている。本報告書は、その平成20年度の活動内容を報告するものである。

研究面では国際的研究拠点の形成を目標とし、A・B・C・Dの4つのユニットごと、およびユニットが適宜連携して行う研究が進展している。その成果公開の一つの姿として『心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学』（ナカニシヤ出版）を編集した。この本の刊行は、20年度中には間に合わず、2009年7月となったが、実質的には20年度の成果である。

平成20年度に本拠点が主催または共催して開催した行事は、講演会14回、シンポジウム8回、ワークショップ6回である。国際的拠点の形成という点で重要なシンポジウム・ワークショップを開催順にあげると、次のようなものを実施した。

- 第2回グローバルCOE共催ワークショップ「Workshop for Socratic dialogue and natural learning: On authenticity」（ユニットB：2008年4月2日）
- 第1回グローバルCOE共催シンポジウム「人生と病いの語り」（ユニットC：2008年6月8日）
- 第3回グローバルCOE共催ワークショップ「The 2nd international workshop on multi cultural studies: Research collaboration between the University of Vienna and Kyoto University」（ユニットC：2008年7月10日、於ウィーン大学心理学部）
- 第3回グローバルCOE共催シンポジウム「東アジアの教育伝統と近代教育(学)—日本・韓国・中国の場合—」（ユニットB：2008年8月10日）
- 第4回グローバルCOE主催ワークショップ「比較認知発達神経科学の挑戦」（ユニットA：2008年9月17日）
- 第4回グローバルCOE共催シンポジウム「病と臨床—病に生きる人間にみる臨床の知」（ユニットC：2008年11月17日）
- 第2回グローバルCOE主催シンポジウム；第2回京都大学・慶應義塾大学COE合同シンポジウム「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」（2009年1月11日）
- 第3回グローバルCOE共催国際シンポジウム「日本のFDの未来—Building the core in faculty development—」（ユニットD：2009年1月24日～25日）
- 第3回グローバルCOE主催国際シンポジウム「The self, the other & language II: Dialogue between philosophy and psychology」（ユニットC：2009年2月28日～3月1日）

国際的研究拠点の形成と並ぶグローバルCOEプログラムの重要な柱は、人材育成である。この点について、20年度も次の4つの人材養成プログラムを公募して実施した。

- 20代、30代助教を対象とする「若手教員支援研究費」を10人に助成。
- 博士課程大学院生対象の「海外留学資金」を9人に助成。
- 博士課程大学院生対象の「大学院養成プログラム研究費」を20人に助成。
- 博士課程大学院生が実施する課題探究型授業「研究開発コロキウム」経費を15人に助成。

なお、院生対象説明会を2回（2008年4月および2009年2月）開催し、上記の公募の趣旨と内容の周知に努めた。

平成20年度には、外国人講師が実施する外国語による授業科目として、教育学研究科に研究者養成コース共通科目「国際研究フロンティア」を新設し、「国際研究フロンティアA」（担当はニュージーランド・オークランド大学准教授）、「国際研究フロンティアB」（担当は、中国・中央教育科学研究所研究員2名）、「国際研究フロンティアC」（担当は、英国・ロンドン大学教育研究所教授）を開講した。

また、大学院修士課程1年生を主要対象に「EXラボ」（Exchanging Laboratory Program）を平成20年度より新たに開始した。20年度は下記の5プログラムを実施し、参加者は45人であった。そのうち、修士課程1年生は約7割にあたる38人が参加した。学生が参加に必要な経費は、拠点で負担している。

- 「大学院生のための教育実践講座2008」（高等教育研究開発推進センター、8月）。
- 「野殿・童仙房フィールド研究体験」（教育学研究科、9月）。
- 「視覚科学の実験体験ツアー」（人間・環境学研究科、9月）。
- 「藤田研究室見学～比較認知科学への招待～」（文学研究科、9月）。
- 「風景構成法と箱庭療法」（教育学研究科、9月）。

以上のような活動をもとに、6人の著名な心理学者・教育学者から外部評価を受けてその報告書を2009年3月に刊行した。この外部評価報告書の中では、たとえば次のような高い総合評価をいただくことができたので、このことを誇りにしてさらに研鑽を積んでいきたい。

「拠点形成の目的は明確であり、それに即した成果が内外の大学や学会等に提供され、研究の協働プロセスなどを通じた諸活動の状況で十分に実証されている。特に多様な方法論が問題の解明と理解と解決という3つの知の統合化としてまとめられていることが確認できた。・・・(中略)・・・プログラムが終了した5年後に期待される成果に関しては、本研究の成果をもってすれば、世界最高水準の教育・研究が、研究活動を通じて形成された人脈や英文ジャーナル他の媒体を通じて、広く普及するものと確信できる。また、本研究に従事した創造性豊かな若手の研究者の将来性は本研究の状況を鑑み、優れた人材として活躍をする可能性がきわめて高く、学会だけでなく、社会との多様な連携・協力の進展も期待できる」

最後になるが、2009年6月30日にはグローバルCOEプログラム委員会による中間評価を受けた（場所は独立行政法人日本学術振興会一番町事務室）。その評価結果の通知はまだ

受け取っていないが、拠点としてはこれまで精いっぱい努力を行ってきたつもりであり、そのことが正当に評価されることを願うものである。

なお、本報告書の刊行が遅れた理由は、この中間評価の実施と関わっている。中間評価を受けるために必要な報告書は、2008年12月末までのデータに基づき作成するように指示があったので、そのデータを拠点メンバー等から収集し整理した。しかし、20年度報告書は、それに加えて2009年1月から3月までのものを含めなければならず、その部分についてのデータを拠点メンバー等から再度収集し整理する作業が必要となった。

本報告書の作成にご協力いただいたすべての方に厚く御礼申し上げたい。

2009年7月
拠点リーダー・子安 増生

拠点形成の目的

20 世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痾というべき矛盾を克服することができず、21 世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレベルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定して考えても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問題を投げかけてきた。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の心が活きるものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。

人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身が何事かをなすことができるという「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得る。さらに、この2つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえた「達成感」というものが得られる。そこに、同時に「幸福感」というものを感じることができよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められており、本プログラムはそれに真正面から応えようとするものである。

拠点形成計画の概要

本プログラムは、21 世紀 COE「心の働きの総合的研究教育拠点」（平成 14 年度～18 年度）の多大な成果を基礎として、京都大学の心理学および教育学の研究者が有機的に連携しながら、国際的に活躍する有為な人材育成のための新たな拠点を形成するものである。具体的には、「心が活きる教育」とはどのようなものかを解明し、それをどのように理解し、あるいは実践していくかについて、教育学研究科（教育科学専攻、臨床教育学専攻）、高等教育研究開発推進センター（第一部門）、文学研究科（行動文化学専攻）、人間・環境学研究科（共生人間学専攻）、および、平成 19 年度に設置される「こころの未来研究センター」に所属する心理学および教育学の研究者が参加して研究拠点を形成し、拠点リーダーが全体を統括しながら、(A)「心が活きる」とはどのようなことか、逆に「心が生きていない」状態とはどのようなものかを研究する基礎過程、(B)「心が活きる」ために必要な制度設計と、それを社会に説明し実際に運用する仕組

みについて研究するシステム、(C)「心が活きる」ために有効な心理的サポートや教育的かかわりのあり方について研究ならびに実践を行うサポート、(D)以上の各ユニットが提案する理論・実践を「心が活きる」という観点から評価し、同時に国際共同研究として「幸福感の国際比較研究」を実施する開発評価、という4つの研究ユニットを中心に高度な水準のユニークな研究を進めていく。人材育成の面では、心が活きる教育ということについて心理学・教育学の観点から深く考えることのできる高度の専門性と幅広い視野を持ち、外国語による論文の投稿や国際学会での発表など、国際的に情報発信ができる人材を育成するために、心理学・教育学の大学院教育を拠点全体で担う教育体制を一層整備・充実すると共に、国際拠点形成の活動として、米ミシガン大学、英ランカスター大学、中国中央教育科学研究所、北京師範大学、独ベルリン自由大学、英ロンドン大学教育研究所などの世界的研究機関との間に築いてきた学術交流協定に基づく教育・研究活動をさらに展開し、京都大学を世界中の心理学・教育学の研究者が研究の発展を求めて集まる拠点としていく。また、広い視野から深く考え、心と教育に関する諸問題の解明・理解・実践に貢献しうる人材の進路が、大学等の研究機関のほか、官庁・企業等にも広がるよう、その支援体制を一層整備する。

博士課程学生を含む若手研究者のテニュア取得にいたるまでの支援としては、大学院生に対する競争的人材育成経費（海外留学資金、院生養成プログラム研究費、研究開発コロキウム）の支援、公募によるポストク研究員（4人）の採用、国際的公募による助教の採用（3人）、および、テニュア取得以前、あるいは、テニュア取得からまだ年数の浅い30歳代の若手教員に対する競争的研究費の支援などを行う。

以上のような活動を通じて、心理学と教育学が交差する新たな教育・研究領域の創成をはかり、京都大学の内部は言うにおよばず、学術全体における人文科学の発展に貢献し、社会の改革や改良に資する学術的情報を提供し、自らも有効かつ効果的な教育実践を行っていくものである。

心が活きる教育とは

20世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痾というべき矛盾を克服することができず、21世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレベルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定しても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問

題を投げかけてきた。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の「心が活きる」ものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。

心の問題は、さまざまなフィールドで取り上げられるべきものであるが、中でも教育というフィールドは最も重要なものの代表格である。ただし、高度に情報化された現代社会においては、教育が学校教育という狭いフィールドに限定されるのではなく、時間的空間的に拡張された、人間の生きる包括的な文脈での生涯学習あるいは生涯発達の視点が不可欠である。

人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身は何事かをなすことができるという「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得る。さらに、この2つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえたという「達成感」が得られる。そこに、同時に「幸福感」というものを感じることでもできよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。

心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められているのである。また、本拠点で育成される人材像として、大学等の研究機関で活躍できる者は言うまでもなく、少子高齢化社会において社会の活性化をはかるために期待されている新たな教育産業の創生に貢献できるような、ユニークな人材をも視野に入れている。

Purposes of Forming Our Project Basis

In the 20th century, despite the rapid progress that was achieved in science, technology and industry, conflicts relating to poverty, crime, terrorism, local conflicts, and wars, and environmental disruption became firmly entrenched as the major problems facing human beings. Unsolved tasks which are derived from the limitations of modern societies have been carried over to the societies of the 21st century at various levels, involving individuals, societies and the international community as a whole. In school settings, those who are involved in education, including parents and teachers have been suffering from such difficult challenges as bullying, violence and refusal of children to attend schools. These issues raise a serious question concerning the state of the human mind. Ideally, the human mind should be revitalized through social systems and organizations produced by human beings, but in reality, these social systems and organizations have sometimes tormented human beings and enfeebled our minds.

Through education and through the acquisitions of knowledge and skills, human beings obtain a sense of competence, and through connection with nature and society, we obtain a vital sense of life, or the feeling that we are living on earth. Further, when we direct these two senses to the same direction to the fullest amount, we obtain a sense of accomplishment that we have achieved something and in this, we can also feel a sense of happiness. Conversely, if a part of this interconnectedness does not function properly, various problems occur. In contemporary society, in which problems concerning the mind and education are prominent, it is urgently needed to envision an international research base that explores revitalizing education for dynamic hearts and minds from these perspectives and to foster researchers who are capable of addressing these challenging topics. Our project will challenge these goals.

An Outline of the Formation and Activities Plan for Our Project Basis

Based upon the results of the program, "Center for Excellence for Psychological Studies," the 21st Century COE program of 2002-2006, our Global COE project center is to be established through dynamic collaboration between researchers in psychology and educational studies for the purpose of

developing talented researchers who can demonstrate their achievements on a global scale. More specifically, in order to conduct research on what constitutes revitalizing education for dynamic hearts and minds and address the issue of how to advance practice in relevant fields, the Center will involve the participation of researchers in psychology and educational studies from the following departments: the Graduate School of Education (Departments of Education and Clinical Studies of Education), Institute for the Promotion of Excellence in Higher Education (Section I), the Graduate School of Letters (Department of Psychology), Graduate School of Human and Integrated Studies (Department of Human Coexistence), and the Kokoro Research Center, a center scheduled to be established in 2007. In a coordinated manner, we will promote high-quality research, centering on the following four research units: (A) Basic Processes Unit, which conducts research on the vital state of the mind, and conversely, the non-vital state of the mind; (B) Systems Unit, which conducts research into the design of the system necessary for revitalizing education for dynamic hearts and minds, and the scheme through which it is explained and applied to society; (C) Support Unit, which conducts research on the psychological support and educational commitments that are effective for revitalizing education for dynamic hearts and minds, and that puts them into practice; and (D) Development and Evaluation Unit, which conducts evaluation on the theory and practice proposed by each unit, and which has the task of implementing a project on "Cross-Cultural Research on the Sense of Happiness."

We aim to develop researchers in psychology and educational studies who can think deeply, with high-level expertise and a broad perspective, about revitalizing education for dynamic hearts and minds; and who can publish in international, high quality academic journals and present papers at international conferences. To accomplish this task, an educational system will be developed that will enable graduate education programs in psychology and educational studies to be provided by the Center as a whole. At the same time the Center will reinforce its position as an international center for research and education through official academic exchange agreements with high-level research institutions abroad, including the University of Michigan, Lancaster University, the China National Institute for Educational Research, Beijing Normal University, the Free University of Berlin, and the Institute of Education at London University. The aim is to

create at Kyoto University a meeting place for scholars in psychology and educational studies from all over the world.

The Center will also promote further support system for the career development of researchers, attracting especially those who can think deeply and broadly, who can contribute to the analysis and understanding of problems concerning revitalizing education for dynamic hearts and minds, and who can put solutions into practice, so that their career paths can be extended not only to universities and other research institutions but also to governmental organizations and business corporations.

The Center will encourage young researchers including doctoral students to get tenure through the following measures: financial support for graduate students through a competitive research fund; the employment of 4 post-doctoral researchers recruited through public advertisement; the employment of 3 assistant professors by world-wide general advertisement, and we will also offer research funding for young professors in their thirties who have not yet or only recently received tenure.

Through these activities the Center aims to create a new research and education field in which psychology and educational studies are integrated. Through this integration, it is hoped that (a) significant developments in the humanities discipline will be achieved within Kyoto University and in academia as a whole; (b) scholarly information and understanding will be promoted, which in turn will promote social reform and innovation; and (c) wider engagement in effective and fruitful educational practice will be facilitated.

What is Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds?

In the 20th century, despite the rapid progress that was achieved in science, technology and industry, conflicts relating to poverty, crime, terrorism, local conflicts and wars, and environmental disruption became firmly entrenched as the major problems facing human beings. Unsolved tasks which are derived from the limitations of modern societies have been carried over to the societies of the 21st century at various levels, involving individuals, societies and the international community as a whole. In school settings, those who are involved in education, including parents and teachers have been suffering from such difficult challenges as bullying, violence and refusal of children to attend schools. These issues raise

serious questions concerning the state of the human mind. Ideally, the human mind should be revitalized through social systems and organizations produced by human beings, but in reality, these social systems and organizations have instead sometimes tormented human beings and enfeebled our minds.

The problems of minds should be explored by various disciplines; we believe that education should be the area that is most essential to the study of the state of the human mind. However, in a contemporary, highly information-oriented society, it is critical to remember that education should not represent a limited concept such as schooling, but rather education should be understood in a larger, more comprehensive context. This perspective should incorporate the perspectives of lifelong learning and lifelong development in the comprehensive context of how human beings live.

Through education and through the acquisition of knowledge and skills, human beings obtain a sense of competence, and through connection with nature and society, we obtain a vital sense of life, or the feeling that we are living on earth. Further, when we direct these two senses in the same direction to the fullest amount, we obtain a sense of achievement and in this, we can also feel a sense of happiness. Conversely, if a part of this interconnectedness does not function properly, various problems may occur.

Recently, the problem of minds and education has been a heated topic and, therefore, it is from this framework that we have formed the basis for the Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds project, incorporating international perspectives to foster human resources to solve the problems of minds and education. In addition, we plan to foster not only the human resources that will play an active role at academic institutions, but also the diverse personnel who will contribute to other educational industries and will be invaluable in activating those education fields vital to activating the aging society.

各ユニットの成果の概要

平成 20 年度 UnitA 成果報告

19 年度に引き続き、Unit A では、計画課題と 6 件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。(敬称略)

計画課題「幸福感に関する基礎的研究－幸福感の科学をめざして」(代表：藤田和生)

本研究計画においては、感情の総合的研究である「感情科学 Affective Science」を一層発展させ、「心が活きる」とはどういうことか、有能感、達成感、生命感から構成される幸福感を達成するためにはどのような条件が必要なのかを明らかにするための基礎資料を、以下の 5 サブプロジェクトを推進することにより収集した。

1) 幸福感の発生 (○藤田、子安、板倉)

幸福感を達成するための大きなカギの 1 つである感情の進化と発達を明らかにするための基礎的研究を継続した。フサオマキザルが、同種他個体の感情の原因を推理して行動を調節しているかどうかを、動物園の飼育群と野生群の観察から検討した。まだ十分な資料を得るには至っていない。また 2 頭が対面した実験場面においては、他者の労力の寄与を考慮した食物分配が見られることを示した。乳児における公正感の萌芽としての公平な分配に関する知覚を検討するため、運動しているボールが、出口の数の異なる箱から出てくる事象を刺激とした確率学習場面の視線を計測した。まだ十分な資料を得るには至っていない。

2) 達成感に関する基礎的研究 (○苧阪、櫻井、蘆田、齊藤)

本課題では、学習と記憶、知覚、思考、動機づけとその神経基盤を、認知科学的、神経科学的に分析している。本年度は、ワーキングメモリ (WM) について検討を行なった。高齢者を対象に WM 課題成績と関連している脳領域を重回帰分析で検討したところ、上頭頂小葉と WM 課題成績の関連が明らかになった。また WM の耐久性を測定する目的で開発した日本語版リーディングピリオド課題 (reading period task) の課題特性を検討した。課題の困難度が一定のレベルと超えると、耐久性よりも長期記憶からの検索機能が測定される可能性が高いことが示された。

3) 生命観に関する基礎的研究 (○吉川、楠見、桑原、岡田、平石、内田、小島)

計画班 C では (1) 看護師－患者間のコミュニケーション、および (2) 青年期における不適応感、コミュニケーション不全に関する研究等を実施した。(1) に関しては感染症治療におけるマスクの常時着用がコミュニケーションに及ぼす影響について感染症治療専門病院で調査研究を行った。関連する実験研究として、マスク着用を模擬した表情認知の実験を行い、伝わりにくい感情は何かを明らかにした。(2) に関しては青年期および成人

社会人における対人関係・自己に対する認知および幸福感・適応感などの感情状態について調査を実施した。調査は現在継続実施中であり、アメリカのデータとも比較を行い、教育・臨床現場へのフィードバックを目指している。

4) 有能感に関する基礎的研究 (○齋木、船橋、角野、山本洋紀、番浩志)

本課題では、視覚性ワーキングメモリの脳内表現、視覚的注意の基礎過程の機能的脳イメージング実験を進めた。このために大型計算機センターの計算資源を利用した解析システムの構築を行ない、大規模な解析が短時間で実施可能になった。注意機能の個人差については、行動実験の予備実験及び課題の検討と選定、分子遺伝学的解析の準備作業を進め、来年度以降本実験に着手できる状況になった。

5) 幸福感の文化史・教育史 (○辻本、小山)

「幸福感の国際比較の調査」を主目的に、2008年10月25日～11月4日まで、杉本教授、齋藤直子准教授、櫻井里穂助教の調査隊により、ブータン、インドの調査に入った。ブータン、インドではいくつかの学校を訪問し、幸福度質問紙調査を実施するとともに、教員研修施設、職業訓練所、唯一の大学の他、国営放送メディア局と仏教聖地を訪れた。インドでは、学校の他とくに仏教とヒンズー教の宗教施設を訪れ、宗教的世界における幸福感に関する聞き取りを行った。成果の一部は、櫻井助教によって国際学会(アメリカ)で発表された。

公募1 (継続): 動物観と幸福感—日独におけるヒトと動物の関係の分析を通じて (○藤田、鈴木)

宗教的・文化的背景を著しく異にするが、自然への愛着という面では共通した傾向を示す日独において、動物とヒトとの関わり方と幸福感の関連性を探る試みであり、ベルリン自由大学との共同研究である。20年度はベルリン自由大学と京都において、イヌの行動調査をおこなうとともに、調査に参加したイヌの飼い主に同じ質問紙調査を実施した。これにより、両国における動物観ならびに動物との接し方の差違と、それらに帰因するイヌの知性や感情の差違を明らかにしようとしている。資料はまだ十分ではないので、本年度も同様の研究を継続する予定である。

公募2 (継続): 知覚、認知、行為に対する文化の影響: 実験心理学的アプローチ (○齋木、吉川、内田、*Kitayama、*Meyer、*Rensink、*Leaman、*Miyamoto)

本年度は、ブリティッシュコロンビア大学の Rensink 教授との共同研究を進めた。昨年度検討した「注意の解像度」に注目した文化比較実験を具体的にデザインし、両国で共通する実験環境を構築し、予備的なデータの収集を開始した。これと並行して、過去に実施した視覚探索の文化比較実験のデータを「注意の解像度」という観点から再分析を進め、

その結果についても Rensink 教授のグループと議論を行なった。

公募3 (継続) : ワーキングメモリと注意に及ぼす情動脳の影響 (○芋阪、大塚、廣瀬)

本研究では、認知的側面を強調されてきたワーキングメモリと情動脳の関係を検討するために、情動脳として想定されている前部帯状回(anterior cingulate cortex: ACC)を含む辺縁系(limbic system: LS)がワーキングメモリの実行系機能を利用する際にどのように関わっているかを、高齢者を対象に機能的磁気共鳴画像法(fMRI)によって検討し、その結果、高齢者は課題の負荷が大きく実行系機能を用いなければならない状況では情動に関連してACCを駆動している可能性が示された。

公募4 (継続) : 注意のメカニズムとその障害の特徴に関する研究 (○船橋、齋木、山本、番、角野)

ADHD 児など注意機能に障害を示す児童で観察される障害の特徴や問題点を明らかにすると同時に、その改善や評価のための方法を考える目的で、「発達障害とその支援」というテーマで研究会を開催した。河村暁氏のワーキングメモリに配慮した学習障害児への教育的支援の実例報告、船曳康子氏が考案した行動チャートによる発達障害児のもつ行動上の問題点の解明方法の例示をもとに、京都市教育委員会の小松晃子氏、親の会の茶木敬子氏、臨床心理学者の角野善宏氏を交えて、その有効性や問題点、改良すべき点などを検討した。

公募5 (継続) : Collaborative executive control に関する探索的研究 (○齊藤、*Towse、*Cheshire)

本研究では、複数の個人が協同して認知制御を試みる collaborative executive control について、探索的な検討を行った。認知制御の機能を測定すると考えられている乱数生成課題を、個人、あるいはペアに求め、生成された数字系列のランダムさを、種々の指標によって評価した。自分自身の反応に続いて再度自分自身が数字を生成する場合よりも、他者の反応に続いて数字を生成する場合に、adjacency 得点で評価したランダムさが高くなることが示され、ステレオタイプの反応を抑制するメカニズムに他者の影響が認められた。

公募6 (新規) : シンポジウム "Frontiers of comparative cognitive developmental neuroscience" (○板倉、友永、明和、*開)

「比較認知発達神経科学」という新たな研究領域の開拓を目指すことを目的として、平成20年9月17日に、京都大学芝蘭会館別館において6名の講演者をまねいて開催した。学内外から約35名(うち外国人2名)の参加者があり「社会的認知に関わる脳内メカニズムの解明」「社会的認知の生物学的基盤」「社会的認知の個体発生」の3つのテーマに沿って最新の研究報告と活発な討論がおこなわれた。詳細はシンポジウム報告参照。

平成20年度の成果（ユニットB）

平成20年度、ユニットBでは、企画課題と4件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。（敬称略）

企画課題「幸福感の国際比較」（BD 合同企画）（代表：B 杉本均・D 鈴木晶子）

○ブータン王国幸福感調査（杉本・鈴木・辻本・櫻井）

本調査はユニット合同チームにおける歴史・文化班およびシステム班を中心として、幸福感や生活満足度に関する、日本との比較のうえで興味深い国・フィールドについて調査を行う企画である。2008年度は昨年度の準備調査に基づいて、10月25日から11月2日（参加者ごと合流日程は異なる）にかけてブータン王国およびインドの一部において具体的な学校・教育施設訪問および質問紙調査を実施した。調査参加者は辻本雅史、杉本均、斉藤直子、櫻井里穂である。なおインドにおいては現地でインド留学中の小原優貴（院生）が調査に合流した。

ブータンでの調査はティンプー(Thimphu)とパロ(Paro)において行った。ティンプーではディチェンチョリン(Dechencholing MSS)中級中等学校を訪問し、教員・生徒へのインタビューと2クラスにおいて質問紙調査を行った。そのほか国立伝統技芸院(National Institution for Zorig Chuzon)、2006年より全国テレビ放送を開始したブータン国営放送(Bhutan Broadcasting Service)などを訪問し、関係者からインタビュー、資料収集を行った。また高等教育機関としては2003年に設立されたブータン王立大学(Royal University of Bhutan)を訪問し、学長のペマ・ティンレイ(Pema Thinley)教授と面談を行った。

後半はパロに移動して、ブータン教育省カリキュラム支援局(CAPPS)のワンゴ・テンジン(Wangpo Tenzin)氏と面談し、別の日程で同局局長のプブ・リンチェン(Phub Rinchen)氏とも面談を行い、近年のブータンの教育改革の動向について調査した。またブータン王立大学を構成するパロ教育カレッジ(Teachers Training College)を訪問し、クザン・シェラブ(Kezang Sherab)氏、タシ・プンツォ(Tashi Phuntsho)氏と面談を行った。最後にパロにおいて、ガウペル下級中等学校(Gaupel Lower Secondary School)とシャリ高校(Shari Higher School)を訪問し、前者において1クラスの質問紙調査とインタビューを行った。

インドにおいては、同じく仏教の聖地であるガヤ(ボーダガヤ)を訪問し、ナボダヤ・ビドゥアラヤ・ジャティアン・ガヤ学校(Jawahar Navodaya Vidyalaya Jatian Gaya)を訪問し、ティヤガラジャン(S. Thiyagarajan)校長と面談を行い、デリーにおいてはアルワチン国際学校(Arwachin International School)の経営者アルン・シャルマ氏と面談を行った。

現在調査結果は集計処理の途中であるが、ブータンの生徒における高い幸福感は特に、文化的側面や精神的(愛情や信仰的)側面において高いことがわかり、経済的・学業的な面では必ずしもそうとはいえない結果がでており、グローバル化による市場経済の浸透、教育の国際化による学力重視および標準試験、資格試験への圧力の影響が推察される。国策

として国民総幸福(GNH)の追求を憲法にも盛り込み、国際的調査でも国民の高い幸福感を示したブータン王国であるが、その推進において教育システムの果たす役割について、より精緻な分析が望まれる。なお本プロジェクトの成果の一部は「ブータンに学ぶ幸福感と教育—近代と伝統の衝突」『心が活きる教育——リスク社会と幸福感』(ナカニシヤ出版)において公開された。

公募課題1) 「e-learning と学習者間インタラクションを通じた高次リテラシーの育成」
(○楠見、大塚、吉川、田口、中池、久保、小島)

本課題では、e-learningと学習者間インタラクションを通じた高次リテラシーの育成について、その認知的基盤と教授手法について検討を行うために3つのプロジェクトを進めた。第1に、専門科目の認知心理学概論IIの授業において、心理学リテラシーの育成のために、e-learningシステムmoodleを活用して、学生による話題提供、問題提起、指定討論、リンク集の作成などの学習者間インタラクション活動を促進し、学生の学習活動と事前-事後の変化について明らかにした。第2に、コンピュータマイクロワールドの題材の一つとして、Web-based教育用プロダクションシステムの構築と評価実験を行った。Webアプリケーションとしてプロダクションシステムを実装することで、授業中のみならず自宅でも同じ環境で継続的に学習できるようになる。また、入力したプロダクションルールが発火するかどうか、仮に発火しないならその理由を詳細に報告するヒント機能を加えることで、学習者の自発的な学習を支援した。評価実験を行いそのプロセスを詳細に分析することで、ヒント機能によって無闇な試行錯誤が減少し、学習に役立つことがわかった。第3に、前年度から開発を継続していたVR空間による英語・独語の前置詞用CALL教材について、その学習効果やユーザビリティなどの改善のための実験・調査を実施し、呈示刺激やインターフェイスの変更などを行った。その結果、以前のものと比較してより使い易い効果的な教材が完成した。

公募課題2) 「算数・数学学習におけるつまずきの克服に関する国際的比較研究」
(○田中耕治・杉本均・楠見孝・櫻井里穂)

本研究は、子どもの算数・数学学習における「つまずき」に学び、「つまずき」を生かす(活かす)という観点から、複数の国の子どもたちの算数・数学の学びの風土を比較し、授業における「つまずき」への教師の指導のありようについて、国際的な類似点と相違点、そしてその結果としての学びの達成の違いについて分析しようとするものである。

2008年度には、7月9日から15日にかけて、国際学力調査PISAにおいて読解力と科学的リテラシーなどの領域において世界最高水準の成績を達成してきたフィンランドの学校や教育機関を訪問して、インタビュー調査、資料収集、質問紙調査などを行った。参加者は杉本均、楠見孝、櫻井里穂にくわえて、院生からの公募により、隼瀬悠里、トイボネン・トゥーカ(フィンランド留学生)が加わった。(調査への参加期間は各人ごとに異なる)

調査としてはまず、シイカランタ夏期高校(Siikaranta Summer High School)を訪問し、教員や夏季高校協会会長(Lasse Hoffman)に面談し、生徒にインタビュー、質問紙調査を行った。続いて、ヘルシンキ大学教育学部を訪問し、応用科学教育部部長のヒュトイネン(Juhani Hytönen)教授より、フィンランドの教育の特徴について講義を受けた。

続いて、ハンコ(Hanko)市において、ヘルシンキ大学教育評価機構、ハウタマキ(Jarkko Hautamäki)教授により、フィンランドの教育評価の問題点についてレクチャーを受けた。最後に中部ユバスキュラを訪問し、ユバスキュラ大学教育学部を訪問するとともに、コスキ(Erkki Koski)名誉教授より、フィンランドの職業指導や批判的思考力の育成に関する教育の状況について講義を受けた。

調査のかなで、フィンランドの教育システムにおいて、教員養成のシステムが研究志向であり、またその職業としての人気も高く、優秀な教員が育成されているという特徴が明らかになった。教員や研究者の見解としても教員養成コースの充実、国内学校格差の少なさ、教員に対する評価を行わないことなどが多く指摘された。また子どもの自発的思考を伸長させる教育方針や基礎学校課程における批判的思考の教育実践についても基礎教育法や教育基本法において規定があることなど、インタビューと資料収集から明らかになった。

公募課題3)「過疎リスクのマネジメント」

(〇杉万俊夫、前平泰志、渡邊洋子、山田洋子)

本研究は、過疎リスクをマネジメントする方途を、過疎地域に住む当事者との協同的実践を通じて模索しようとするものである。過疎地域の中には、過疎リスクを直視し、果敢な試行錯誤のチャレンジを行っている地域もある。そのチャレンジには、他の過疎地域のみならず、都市部のコミュニティにとっても、多くの学ぶべき教訓が含まれている。

本研究では、すでに研究者が当事者とともに推進してきた過疎地域活性化の運動を、過疎リスクマネジメントの視点から分析・検討し、過疎リスクを克服する社会システムの創造に向けた、さらなる協同的実践を推進した。研究フィールドごとの研究成果は以下のとおり。

①鳥取県智頭町

集落(最小地域ユニット)ごとに住民自治システムを構築してきた10年間の運動を受けて、地区(昭和の大合併以前の旧村)単位の自治システム構築を開始した。現在、6地区のうち、2地区で先行的にスタートしている。2地区のうち山形地区では、①住民参加型の高齢者福祉、②多種多様な外来者を巻き込む「共育」空間の創造を目標に運動を立ち上げている。また、もう一つの山郷地区では、地域防災をキーコンセプトにして運動を立ち上げつつある。このようなボトムアップの「旧村復興」は、全国的にも例がないので、貴重な事例として、今後とも研究者が関与しつつ追尾していく。

②京都市花脊地域

全国の人口が減少する今後のプロセスでは、伝統的な地域ユニットの再編成が避けて通ることのできない重要課題となる。しかし、地域ユニット再編成の必要性は理解しても、長い歴史と伝統をもつ地域ユニットを消すことには大きな抵抗が存在する。本研究では、児童減少に伴い小中学校の統合を実現した京都市花背地域（別所、花脊、広河原の伝統的3地区から成る）において、3地区のさらなる共同を推進しつつ、その障害を克服する方途を模索している。とくに、本年度は、年中行事として格別の存在である運動会（3地区別々に実施）に注目し、3地区での合同開催を阻む要因、また、その根底にあるコミットメント関係を検討した。

③京都府南山城村野殿・童仙房地区

京都府下唯一の村のなかに位置するこれらの地域は、例外にもれず、過疎と高齢化に悩んでいたが、小学校の廃校を契機に本学教育学研究科と協定を結び、生涯学習の実践を行っている。同時に、Iターン組と呼ばれる地域外からの移住者を積極的に受け入れ、地域活性化を図ろうとしてきた。また、「アルファコープ大阪」や「積水ハウス」など生活協同組合や企業との協働で、新しい製品の開発や、豊かな自然を活かした子どもとおとなの「共育」空間の創造を目指している。茶と公共事業に全面的に依存してきたこの地域が、これらの外部からのインパクトと内部からの革新によって、どのような変貌を遂げるか、また、そのような地域の開発を支える住民の意識の変容のダイナミズムはいかなる過程を経て行われるかを検討したい。本年は、この地域—大学—企業・NPOの三者の共同枠組みを、聞き取りの中で確認した。

公募課題4)「東アジアの教育伝統と近代教育—日本・韓国・中国の場合—」

(○杉本均、辻本雅史、斉藤直子)

本企画は、2008年8月9日から12日にかけて京都大学において行われた国際教育哲学会(International Network of the Philosophers of Education (INPE))の第11回大会の開催校企画のひとつとして、COEとの共催において、中国および韓国からのスピーカーを招いて、「東アジアの教育伝統と近代教育—日本・韓国・中国の場合—」と題するシンポジウムを企画したものである。

19世紀半ばには、それまで一定の秩序を維持してきた東アジア諸国も、欧米近代国家主導の世界秩序に、何らかの形で組み込まれ、国家として「近代化」に向き合わざるを得なかった。国家の近代化戦略に、教育は欠かせない柱の一つであった。それまで、東アジアにはそれぞれ一定の教育のシステムとそれを支える思想が、比較的豊かに蓄積されてきた。

(この3つの地域は、漢字文化圏、儒教文化圏としては共通していたが、社会構成原理は同じではなく、教育面では差異も大きい)。こうした伝統的な教育のシステムとそれを支える思想は、大きく原理を異にした欧米近代教育と教育思想、及び教育学にいかに向き合い、いかなる展開を見せたのか。日本、中国、韓国のそれぞれの教育学研究者により展開事例のポイントが報告され、今日の「教育」や「教育学」に示唆する問題について議論が行わ

れた。発表の要旨は以下のとおり。なお司会およびコメンテーターは加藤守通（東北大学）教授であった。

(1) 「日本の儒学思想と近代教育」 辻本雅史（京都大学）

日本の近代教育がそれ以前の前近代社会の教育と断絶している点を逆にとらえて、日本の前近代（江戸時代）から近代を見る視点を提起した。儒学における漢文（原文）の訓読すなわち「素読」は、それによって意味理解とは別に音の響きや抑揚によってリズムが刻印・体得される〈テキストの身体化〉が行われていた。こうした儒学思想の身体化された知識は、財政危機や対外危機に直面した武士において、いかに高度な判断力の養成手段となっていたかを指摘した。またその「実践の知」が言葉によって一義的に定義される近代の学問、科学の登場によって、いかに失われ忘れられていったかについて論述した。

(2) 「中国の伝統儒教文化と豊かな創造的人材の養成」 石中英（北京師範大学）

中国の伝統儒教文化も人類の想像力の表現とその表象のひとつであり、想像豊かな人材の育成を抑圧するものという見方は危険かつ有害である。中国の伝統儒教文化が有する革新への追求精神や「貴中尚和」の独特の思惟方法、「民惟邦本」、「居仁由義」、「知恥自省」などの価値観および自主的人格と懐疑精神の尊重は、創造性豊かな人材の成長を助け、創造的で正しい価値原則を賦与するものである。新時代における中国においては、人材養成におけるこれまでの文化的劣等感を克服し、伝統儒教文化のもつ創造力育成の特性を冷静に認識し、古きものを新しきに生かし、革新することによって社会と人文環境の新たな挑戦と要求に適応しなければならない。

(3) 「近代教育と韓国の教育熱」 韓龍震（高麗大学）

韓国における儒教思想は、大家族主義や科挙による試験志向とともに、教育による優越的な地位の獲得という一元化された社会的上昇の手段になることによって、その教育熱の上昇に大きな影響を与えてきた。近代において教育は個人および国家の競争力であり、未来社会の比較的優位を示す指標であると考えられ、教育熱がさらに高まった。21世紀の韓国教育学のあり方は、このような近代的教育熱を克服し、古代韓国の建国理念である「弘益人間」、すなわち主体的人間実存のための学習を基礎とした、調和的人間養成、人間啓発、真理探求の姿勢への回帰が求められている。

平成20年度の成果 (UnitC)

平成20年度、Unit C では、7件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。

計画課題1. 「個の成長と幸福のための教育：教育学と心理学の学際的国際交流プロジェクト」(代表：齊藤直子)

以下の国際シンポジウムが主たる成果である。

The 2nd International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University, and the Institute of Education, University of London

“The Self, the Other and Language II: Dialogue between philosophy and psychology”

企画：齊藤直子

日時：2009年2月28日(土)午前9時～3月1日(日)午後6時

場所：京大会館

成果：ロンドン大学教育研究所の教員、大学院生合計8名を招聘して、「自己・他者・言語 II：哲学と心理学の対話」という大枠の中で、教育哲学、教育人間学、比較教育学などの教育学研究、および、教育認知心理学や心の理論研究に携わる日英の教員、研究者、学生が、さらに交流の輪を広げて、学際的・国際的な対話交流に従事した。基調講演は、ポール・スタンディッシュ教授(教育哲学)と奈良女子大学の西村拓生准教授(教育哲学)による「京都学派の思想についての東西対話」、ロンドン大学教育研究所ジャン・デリー准教授(心の理論研究)による「発達心理学における哲学的影響：ヴィゴツキー、ピアジェ、規範性の問題」、京都大学教育学研究科、楠見孝教授(教育認知心理学)による「がん患者のためのバーチャルスペースを用いたサポートグループ」、西平直教授(教育人間学)による「世阿弥の実践と技の哲学」であった。また、学生の発表についての国際交流がはかられた。

研究課題2. 「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」(代表者：山田洋子)

このプロジェクトでは、グローバルCOEの課題である「心が活きる教育」を、次の3つの新しい観点「ポリフォニック・フィールド」「クロノ・トポス」「協働の対話的学び」から国際的・地域的に多フィールドで実践研究し、多様な人々が生き生きと暮らせるための国際教育、地域教育、生涯発達を支援する、サポートとシステムづくりのモデルを提案してきた。

2008年度の主な成果としては、下記のワークショップとシンポジウムが行われた。

映像ナラティブ・ワークショップ

企 画：やまだようこ

日 時：2008年6月25日（水）13時00分～18時00分

場 所：京都大学芝蘭会館 研修室

発表者：高橋正実（ノースイースタン イリノイ大学）

成 果：このワークショップでは、質的研究における映像という手法に着目し、「質的研究」と「ドキュメンタリー制作」の相違点について、具体例をあげ実習を交えながら、討論された。映像作品の鑑賞や作成などの実習を中心とした、極めて刺激的なワークショップとなった。

企 画：やまだようこ

日 時：2009年1月19日（月）13時00分～15時00分

場 所：京都大学芝蘭会館 研修室

講演者：内藤亮（ロンドン大学）

講演題目：英国大学院（認知心理学+免疫学、臨床教育学）の経験から考察した学術的思考の基盤としての言語としての英語（日本語との対比より）—医療現場でのコミュニケーションスキルやナラティブ・アプローチの考察とともに

成 果：この講演会では、英語と日本語の違いに焦点をあてつつ、また、ナラティブ・アプローチの前提に触れながら、学術的な思考の基盤としての英語に関する考察が発表された。

研究課題3. 「臨床における物語ることの意味」（代表者：皆藤章）

「物語」というテーマに関して、それが心理臨床の学として位置づく在りようを、ナラティブセラピーも含めて広く心理臨床の実践をサーベイしながら、今年度は特に身体疾患を持つ人の物語ることに焦点を当てた。

2008年11月16日～22日、アメリカ合衆国ボストンにある「ジョスリン糖尿病センター」副所長の Alan Jacobson 博士を招聘して、シンポジウム、事例研究などが行われた。下記のシンポジウムが主たる成果である。

病と臨床—病に生きる人間にみる臨床の知

企 画：代表 皆藤章

日 時：2008年11月17日

場 所：京都大学百周年時計台記念館 百周年ホール

成 果：近年、医学的には完治することのない病に心理臨床家に関わるが増えてきており、そうした病に対する「臨床の知」が求められている。このシンポジウムは、重篤な病を生きる人間に、心理臨床はいかに関わっていくのかを大きなテーマとして行われた。今回は、話題提供者として、糖尿病治療における世界最先端水準にある Joslin 糖尿病セン

ター副所長・ハーバード大学医学部教授の Alan Jacobson 氏を招聘し、そこに河合俊雄氏（こころの未来研究センター）、清水亜紀子氏（グローバル COE 研究員）が加わり、それぞれ、"Depression Among Patients with Diabetes: What We Know and What We Can Do About it."、「甲状腺疾患患者の語り：病の自己性と他者性」、「筋ジストロフィー患者の生きる体験世界に学ぶ「臨床の知」」と題した話題提供がなされた。それに対し、教育人間学の立場から西平直氏、精神医学の立場から野間俊一氏による指定討論が行われた。

研究課題 4. 「学校臨床における教育モデルと臨床モデルの違いと国際比較」（代表者：大山泰宏）

日本とスイスにおける、教師とカウンセラーに対して行った調査のデータ分析を行い、*Psychologia* に投稿し、採択された。

T. Kuwabara, H. Sudo, C. Hatanaka, M. Nishijima, K. Morita, C. Hasegawa, & Y. Oyama (2009) A Study on the New Paradigm in Collaborations Between Teachers and School Counselors. *Psychologia*, 51, 267-279.

3月にスイスのチューリッヒ教育大学を訪れ、今後の調査の打ち合わせを行った。

研究課題 5. 「特殊環境における心理的サポート —南極越冬隊員の心理に関する研究—」（代表者：桑原知子）

現代においては多様なフィールドでヒトが活動することが求められるようになった。南極や宇宙ステーションなどの閉鎖環境もその一つである。これらは地上とは異なる特殊環境である。本研究においては、閉鎖環境におけるヒトの心理的状态を適切に評価する手法を提言するとともに、閉鎖環境で活動するヒトが危機的状況に陥らずにすむための予防的「サポート」、あるいは、実際に破綻してしまったときにはそれを回復させる緊急「サポート」の方法を確立しようとするものである。

平成 20 年度においては、第 49 次南極越冬隊への質問紙調査に加え、バウムテストなどの心理検査も含めた組織的かつ効率的な調査を行った。ロシアのペテルスブルグにて 7 月に開催される南極研究集会 (SCAR) (<http://www.scariasc-ipy2008.org/>) にて研究成果を発表した。

その成果は、『心が生きる教育』にまとめられた。

研究課題 6. 「発達障害への心理臨床的アプローチ」（代表者：河合俊雄）

発達障害に関しては、近年脳科学による研究が進み、またそれに伴い、薬物療法と訓練教育が中心的な対応になりつつある。心理療法は二次障害に主に関わると考えられてきて、副次的なものになりつつある。しかしながら、京都大学の心理教育相談室を中心とした心理療法では、子ども・大人の発達障害に対して、心理療法が行われ、成果をあげている。

それと同時に、この事実や知識が、事例研究を中心としているために、一般にあまり伝えられていないということになっている。

そこでこのプロジェクトでは、事例検討会から、発達障害に対しての心理療法のエッセンスを把握し、専門家・一般の両方に向けて発信することを目指している。

今年度においては、外部の講師（佛教大学・黒川嘉子、東京大学・山森路子、吉水はるな）を招いて、事例検討会を行い、研究メンバーの田中康裕、竹中菜苗も発表を行った。

対外的には、6月13～15日の韓国箱庭療法学会のシンポジウムで、畑中千紘が発達障害の事例を発表し、河合俊雄がコメントをした。

研究成果としては、伊藤良子他編（2009）『発達障害と心理臨床』創元社のなかに、いくつか論文が発表された。

竹中菜苗（2009）「児童期自閉症児の心理療法における融合と分離」pp. 93-102

畑中千紘（2009）「自閉的世界への他者の現れーアスペルガー症候群の老年期男性事例より」pp. 174-183.

田中康裕（2009）「成人の発達障害の心理療法」pp. 184-200.

研究課題7. 「発達臨床からみた心理臨床の対象関係理論の再検討」（代表者：大山泰宏）

心理臨床において、言語化される以前の心的領域での対象関係については、乳幼児の発達の観点からモデル化されることが多い。しかし、そこで顧慮されているのはもっぱら社会性の発達であり、対象世界の現れに大きな影響を与えているはずの、認知・運動領域での発達に関しては、素朴な理解にとどまっている例が多い。

本研究では、心理臨床の言説構成に使われることの多い、対象関係理論および間主観性理論を、①母子の相互交流の経時的な臨床的観察、②子どもの認知機能を含めた全般的発達経過のフォロー、③発達障害事例の継続的な検討、等に突き合わせる形で再検討を行った。

平成20年度の成果（ユニットD）

ユニットDは大きくわけて、幸福感の学際的国際比較研究の企画実施と、FD・教育改善におけるオルタナティブ・モデルの構想の一貫として「心が活きる教育」のためのFD・教育改善とその評価の実施という二つの研究課題を有する。ユニットDの特徴は、「心が活きる教育」プロジェクトの特に幸福感に関わる調査・研究の企画・運営・実施において、その要として機能しつつ、他のユニットA、B、Cの間の連携や調整を行う点にある。（敬称略）

1) -1 **幸福感の国際比較研究に向けた予備研究**（○子安増生、藤田和生、鈴木晶子、楠見孝、カール・ベッカー、大山泰宏、デイヴィッド・ダルスキー、内田由紀子、モイゼス・キルク、ループレヒト・マッティク、小島隆次、櫻井理穂）

2008年8月から2009年3月までのほぼ毎月、都合7回の会合を開催し、幸福感の国際比較調査に用いる尺度項目の選定、調査対象国および調査言語の確定、ならびに今後の調査の進め方について討議した。

幸福感の国際比較調査の尺度項目の選定については、幸福感、有能感、生命感、達成感、幸福感とそのメタ認知、満足感、自尊心などの下位尺度からなる88項目の日本語版と英語版調査用紙を作成した。同時に、調査項目に含めるべき回答者の属性（デモグラフィック要因）も決定した。調査用紙の作成にあたっては、先行研究で定評の定まっている項目を含めた上で、本研究のオリジナルな視点を生かせるような項目の選定を行った。

また、調査言語ならびに調査対象国は、以下のように設定した。

英語：イギリス、アメリカ、ニュージーランド

独語：ドイツ

西語：スペイン、メキシコ

ポルトガル語：ブラジル

フィンランド語：フィンランド

中国語：中国

今後の調査計画として、平成21年度前期に予備調査を日本語と英語で実施、後期には、アメリカ、イギリス、ドイツ、スペイン、中国、ニュージーランドを優先的調査対象国として、準備が整った国から順次調査を開始する。

1) -2 **日独の家庭、学校、企業における幸福感に関する質的フィールド調査**（○鈴木晶子、河合俊雄、岩井八郎、小野文生、竹中菜苗、ループレヒト・マッティク、院生・学生では高橋洋一、菊澤聖子、小木曾由桂、井上嘉孝、久保田昌子、西浦太郎、福井夕希子。学外からは家族研究の専門家の岩井紀子（大阪商業大学）。ドイツ側参加者は、Wulf,

Christoph(ベルリン自由大学)、Kellermann, Ingrid(ベルリン自由大学)、Zirfas, Joerg(エアランゲン大学)、およびベルリン自由大学・歴史人間学学際研究センターおよび文化パフォーマンス研究プロジェクトのポスドク、院生5名

・研究概要

昨年度には京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」において、ドイツからベルリン自由大学歴史人間学学際研究センターのクリストフ・ヴルフ教授をはじめとする4名の研究者を招聘し、国際シンポジウム「幸福とリスク」を開催した。そのなかで、日独での混成チームを組み、ドイツ、日本それぞれの家庭、学校における幸福感についての質的フィールド調査を実施することが提案された。そこで、調査方法、時期などについて日独間で詳細な打合せを重ね今年度、その調査を実施した。

日独混成チームにより、参与観察、聞き取り調査、映像記録による分析といった質的方法論による調査の企画打合せを行った。方法論としては、ベルリン自由大学・歴史人間学学際研究センターがこれまで行ってきた儀礼、パフォーマンス、ミメシスといった観点からの研究と、京都大学の臨床心理学、教育詩学のアプローチとを協働させていく方向を模索した。国際的かつ学際的なフィールド調査はこれまでほとんど例をみないものである。その意味で今回の調査研究の意義についても十分吟味を重ねた。研究の視角としては、①年中行事をそれぞれの家庭の文化がどのように受容し、それぞれの家庭の固有な文化として、また家庭内コミュニケーションへと反映させているか、②年中行事という時期がそれぞれの家庭がどのような意味づけに向かって相互の関係性をマネージメントしていくか、③家族構成員それぞれ、また夫婦、親子間のパフォーマンスを通して形成されていく「幸福な時空間」イメージはどのようなものか、という3点にまとめられる。

・調査のテーマと意義

今回の調査では「幸福感の演出としての〈儀礼〉」の役割に着目し、クリスマスや大晦日・正月などいわゆる祭礼的な年中行事に焦点を当て、日本およびドイツの家庭ならびに小学校をフィールドとして、日独の研究者、大学院生による参与観察および聞き取り調査を実施した。

〈儀礼〉とは、一般には祭礼や儀式にともなうものであり、いわゆる慣例やしきたりとして、時代とともに細密化したり、逆に簡略化したりといったように変遷はあるものの、文化や社会に深く根ざした、いわば公的存在であるといえる。しかしまた、それと同時に、学校や家庭、職場などもう少し親密な場所で、それぞれの持つ学校文化、家庭文化、職場文化とともに成立してきている〈儀礼的なもの〉も存在する。この〈儀礼的なもの〉とは、それぞれの場において、その場の構成員が儀礼的役割を担うことを通して発生してきた「演出的な」行動様式ということもできよう。この〈儀礼〉と〈儀礼的なもの〉は、しばしば一体となって機能しているが、それと同時に、相互に影響しあいながら、変容を繰り返しているともいえる。

クリスマスや大晦日・正月といった非日常的で特別な一日を子どもや大人がどのように関わりつつ過ごしているのか、その時期に陰陽さまざまなかたちで執り行われる〈儀礼〉や〈儀礼的なるもの〉が、子どもや子どもに関わる大人たちの経験をどのように作りあげているのか、そしてそのような〈儀礼〉や〈儀礼的なるもの〉が現代社会の家庭や学校においてどのように幸福感の育成に関与しているのか。こうした諸問題は、現代社会における、ひと育ての実態を把握し、これからの教育のあり方を展望するうえで、大変興味深くかつ重要なものである。今回実施した調査では、家庭や学校という場所で〈儀礼〉と〈儀礼的なるもの〉とがどのように相互作用あるいは相互変容しながら機能しているのか、子どもたちや親・教師など大人世代はどのように〈儀礼〉に関わり、どのような〈儀礼的なるもの〉という行動様式をとり、あるいは新たに生み出しているのか、そしてクリスマスや大晦日・正月において「幸福感」がいかに育まれているのかといった側面に着目しながら、日独それぞれの研究者が、双方のフィールドにおいてその儀礼をじかに体験することで、より生き生きとそれぞれの儀礼の特徴をつかみ、日独という異なる文化的背景をもつ社会における共通性、あるいは固有性を取り上げ、検討することが試みられた。

・調査の方法

2008年12月から2009年1月にかけて、京都大学、ベルリン自由大学それぞれの教授、研究者、大学院生が調査チームを作り、日独双方の家庭や学校でクリスマス、大晦日、正月といった〈儀礼〉が執り行われる様子を参与観察した。またインタビューによる聞き取り調査、「幸福感」についての質問紙調査も実施した。

*フィールド調査 I (ドイツにて)

①小学校調査 (2008年12月8日～11日)

ベルリン市内にあるペーター・ペーターゼン小学校 (Peter Petersen Grundschule) にて行なわれた。京都大学からは鈴木、河合俊雄教授 (臨床心理学、こころの未来研究センター)、小野文生助教、竹中菜苗助教、高橋洋一 (教育学、博士後期課程 3 回生)、小木曾由佳 (臨床心理学、修士課程 1 回生) が参加し、それぞれが 3 つのグループに分かれてドイツ側調査者とともに教室に入り、教室での教師や子どもたちの様子を観察した。

②家庭調査 (2008年12月23日～26日)

日本からは鈴木、岩井八郎教授 (教育社会学)、岩井紀子教授 (大阪商業大学総合経営学部)、小野文生助教、井上嘉孝 (臨床心理学、博士後期課程 3 回生)、菊澤聖子 (教育学、博士後期課程 2 回生) が参加し、ドイツ側調査者とともにベルリンの 3 つの家庭に入って、それぞれの家庭においてクリスマスという儀礼がいかに執り行われているのかを実地で調査した。

(1)、(2) いずれも調査に参加したメンバーが、適宜、調査の間に着目した出来事などについて議論を交わし、そこで生じた現象を多角的に理解し、あるいは自分自身の調査者としての視点をリフレクトするための場を設けた。また、上記調査期間内に調査対象者への「幸福」をテーマにした質問紙とインタビューによる調査も実施した。

*フィールド調査Ⅱ（日本にて）

日本でのフィールド調査に当たっては、ドイツからヴルフ教授、ツィルファス教授（エアランゲン—ニュルンベルク大学）、ケーラーマン女史（ベルリン自由大学）が来日され、以下の家庭調査および小学校調査に参加した。

①家庭調査（2008年12月31日～2009年1月1日）

滋賀県および大阪府にある3つの家庭から調査への協力を得、ドイツ側の調査者と京都大学の調査者がそれぞれグループを構成して、大晦日と元旦に家庭調査を行なった。京都大学からは鈴木、小野文生助教、竹中菜苗助教、マッテイク助教、菊澤聖子、井上嘉孝、高橋洋一、福井夕希子が参加した。

②小学校調査（2009年1月7日～8日）

京都大学教育学研究科教育実践コラボレーションセンターの連携先である寝屋川市立田井小学校の3年生（3クラス）を中心として、児童の登校時の様子に始まり、始業式や新学期に際しての係決めや大掃除といった行事ごと、また通常の授業を観察した。京都大学からは鈴木、河合俊雄教授、小野文生助教、竹中菜苗助教、マッテイク助教、高橋洋一、菊澤聖子、小木曾由佳、および、通訳として久保田昌子（臨床心理学、修士課程2回生）、西浦太郎（臨床心理学、修士課程2回生）が参加した。

日本での調査においても、ベルリンで実施した調査と同様に、適宜、議論を交わしながら、そこで捉えられた現象の理解が深められた。また、上記調査期間内に、調査対象者への「幸福」をテーマにした質問紙とインタビューによる調査も実施した。

③企業調査（2009年1月～2月）

企業については、京都、大阪、福井の企業のトップに幸福感とリスク・マネジメントに関して、日独混成チームによる聞き取り調査を8社に対して行った。ドイツの企業への聞き取りは、2009年、2010年に行うことで計画している。

・調査の成果および今後の展望

研究者がフィールドに参入する際、研究者はみずからの依って立つ学問的基盤、また、みずからの抱える文化的背景が問い直されることになる。今回の調査では教育学のみならず、臨床心理学、教育社会学を専門とする研究者をチームに迎えることで、より多角的に現象を理解し、またフィールド研究の手法それ自体についても実際のデータに基づいて対話をすることができた。研究者が異なる文化的背景をもつ他の研究者とともに、異なる文化的背景をもつフィールドに入ることは、そこで生じる事象を新たな視点から捉え、より深く、多層的に理解することを可能にすると同時に、研究者自身の対象へのかかわり方をよりクリアに浮き彫りにするものであった。これまで、自然科学の手法に則る実証的な方法による文化比較研究においては、研究者自身の文化的背景や研究者の存在がその場に与える影響は文化的「バイアス」として排除されるべきだとされてきたが、質的研究手法を用いる新たなフィールド研究においては、そのような文化的「バイアス」が、むしろそこでの現

象を理解するための重要な手掛かりになり得るという発想の転換がある。生身の人間が生きる教育学の現場においては、さまざまなものや個々の関係性が変数として存在し、相互に絡み合いながら一つの事象を形作っており、その場に参入する調査者もまた、その事象に関与している。すなわち、質的研究というアプローチに拠るフィールド研究においては、その状況を見立て、そこで生じる事象を切り取る際の調査者の文化的背景や、あるいは調査者の存在が調査対象者に与える影響が排除され得ないのであり、フィールドに参入する研究者という変数自体がもたらすものまでを調査の俎上に乗せ、研究の対象としていくことが必要である。研究者と調査対象者の間の関係性、相互性に着目し、フィールド自体の持つ躍動性を多層的に、臨床的に把握していくための研究法の開発は、今後のフィールド研究にとってますます重要になってくるであろう。今回の調査は、新たな手法による日独共同フィールド研究の実践、臨床心理学や教育社会学との対話の実現といった点で、非常に意義深いものであったといえる。

なお、今回の調査は「幸福感の国際比較研究」のためのパイロット調査としても位置づけており、今後、全国規模での展開、また、アメリカや中国、インドも視野に入れた比較研究を視野に入れている。また今回の調査に関わった教員を中心に、今年度の調査の成果を集約する形での書籍の出版に向けて、準備を進めている。まず、ドイツ語での出版を今年度中に予定しており、その後、英語、日本語での出版を視野に入れて進捗中である。

なお、家庭および学校に関する日独調査の視角や方法論については、ナカニシヤ出版から刊行される『心が活きる教育に向かって ―幸福感を紡ぐ心理学・教育学』所収の論文にまとめられている。

2) FD・教育改善におけるオルターナティブ・モデルの構想 ―「心が活きる教育」のためのFD・教育改善とその評価 (○田中每実、大塚雄作、松下佳代、溝上慎一、田口真奈、酒井博之、及川恵、石川裕之、河崎美保)

本プロジェクトにおいて、FD・教育改善におけるオルターナティブ・モデルの中核的概念と位置づけているのは、「相互研修型FD (mutual faculty development)」である。これは、固有の文脈に埋め込まれた生成的で自律的な教員・組織が、相互に影響し、協働しあいながら、教育する集団としての形成と充実をはかっていくという考え方であり、工学的経営学的モデルのもとでの「啓蒙的・操作的なFD」とは対比される。相互性(mutuality)の形態には、教員・学生間の相互性、教員間の相互性、組織(部局・大学)間の相互性がある。この三重の相互性が、オルターナティブ・モデルの中心となる。

本プロジェクトのメンバーはすべて高等教育研究開発推進センターに所属している。センターでは、平成20年度より5年計画で、特別教育研究経費事業「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成」を実施しており、学内・地域・全国・国際という4つのレベルでFDネットワーク形成を進めている。このうち、最も研究的性格の強いのは国際レベルの活動で

あり、その活動を通して本グローバル COE のプロジェクトを同時に遂行している。

平成 20 年度の主たる活動は、国際シンポジウム” The Future of Faculty Development in Japan: Building the Core in Faculty Development” の開催（平成 21 年 1 月 24～25 日。参加者 144 名）と、それを通じての国際連携の構築であった。このシンポジウムは、M. T. Huber 氏（カーネギー教育振興財団上級研究員）による基調講演「高等教育における Teaching Commons の構築」と 3 つのセッション（「FD ネットワークの構築」「テクノロジー利用による FD」「FD の推進主体を問う」）から構成され、海外からは、Huber 氏のほか、J. M. Robinson（インディアナ大学ブルーミントン校、ISSOTL 議長）、飯吉透（マサチューセッツ工科大学）、F. Prochaska（ノースカロライナ大学）の各氏を招聘した。海外ゲストの多くは、カーネギー財団が提唱している SOTL（Scholarship of Teaching and Learning: 教育と学習の学識）という考え方を大学教員の専門的発達の理念として共有し、その研究と実践の中核にいる人々である。シンポジウムでは、SOTL と相互研修型 FD との類似性と相違、FD ネットワーク形成におけるテクノロジー利用のあり方、FD における同僚モデルと専門家モデルの対比などをめぐって、刺激的な報告と活発な議論がかわされた。これらの活動の内容と成果は、『国際シンポジウム「日本の FD の未来」発表資料集』、および『京都大学高等教育叢書 27 大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 2008』（平成 21 年 3 月）にまとめられ、本センターの Web ページ上でも公開されている（http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/index_publication.html）。

講演会、シンポジウム、ワークショップの開催記録

■ 講演会

第9回主催講演会

「発達障害とその支援」

企画：船橋新太郎

主催：京都大学グローバル COE 「心が活きる教育のための国際的拠点」

ユニット A 「注意のメカニズムとその障害の特徴に関する研究」プロジェクト

共催：京都大学こころの未来研究センター連携プロジェクト「能動的注意に関わる脳内神経メカニズムの解明」

日時：2008年6月8日

場所：京都大学 大学院人間・環境学研究科 地下講義室 B23

講師：河村暁（「発達ルームそら」代表）

船曳康子（京都大学大学院医学研究科・日本学術振興会特別研究員）

成果：アスペルガー症候群、注意欠陥/多動性障害、高機能自閉症、学習障害など、一般に発達障害と称される問題をもつ子供が増えていると言われる。このような子供達が学校や社会や家庭で幸せに暮らせるようにするにはどうしたらいいのか。今回は、学習障害をもつ子供達にユニークな方法で学習指導をしている「発達ルーム そら」代表の河村暁氏、発達障害をもつ子供の行動特徴を一目でわかる共通のチャートで表示し、支援に役立てようと試みている京都大学医学部の医師である船曳康子氏の講演をもとに議論した。学習障害のある子どもは、記憶の機能に困難を示す場合があり、情報の一時的な保持および処理に関わるワーキングメモリの困難が見られることがある。したがって、効果的な教育的支援を行うためには、ワーキングメモリの観点を入れることが重要であると考えられる。河村暁氏は「学習障害（LD）児へのワーキングメモリに配慮した教育的支援」と題して、LD児におけるワーキングメモリの特性、ワーキングメモリと漢字の読み書き到達度等との関連、ワーキングメモリの特性を踏まえた漢字・語彙指導について説明され、LD児への具体的な支援方法を呈示した。一方、近年、社会的によく知られるようになってきた「発達障害」であるが、その理解や支援には課題が多く残されている。例えば、気付いてから受診まで長い期間を要することも多く、支援のための診断後も個々人に適切な支援まで試行錯誤の繰り返しが続く。これは、同じ診断名でも個人差が大きく、診断名から要支援項目を理解するのが簡単ではないことが原因と考えられる。そこで、船曳康子氏は「発達障害者の支援に関する課題」と題して、わかりやすい支援目的の特性チャートを提案し、どのような支援を必要としているのかが誰にでもわかる仕組みの必要性を強調した。最後に、講演者2名に、京都市教育委員会の小松晃子氏、京都 LD 親の会の茶木敬子氏、京都大学教育学研究科の角野善宏氏を加え、河村氏が実践している学習法の有効性や船曳氏が提案された特性チャートの項目について、活発な討論が続いた。学内外から200名近い参加者があり、参加者からも多くの質問や意見が出され、予定時間を大幅に越えて総合討論が続いた。

第10回主催講演会

「スピリチュアリティに関する講演会」

企画：やまだようこ

主催：京都大学グローバル COE 「心が活きる教育のための国際拠点」

ユニット C 「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」

共 催：科学研究費プロジェクト「多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発」

日 時：2008年6月26日（木）15時00分～17時00分

場 所：京都大学芝蘭会館 研修室

講 師：高橋正実（ノースイースタン イリノイ大学）

講演演題：スピリチュアリティに関する心理学的考察

成 果：この講演会では、現代の日本社会における昨今のスピリチュアリティブーム、心理学におけるスピリチュアリティの定義の不明確化をうけ、スピリチュアリティという概念に心理学が今後どのように対応していけばいいのかを、実証研究を交えながら考察することを目的としていた。講演は、スピリチュアリティの現状と課題、スピリチュアリティ研究の軌跡（データベースに基づく研究、日米三世代の暗黙理論に関する研究、暗黙理論の応用研究の3領域から）、まとめと今後の課題、という内容で構成されていた。学内外から、発達や臨床を専門とする研究者、スピリチュアリティを研究対象とする院生、宗教家などのべ約50名（うち外国人参加者約5名）の参加者があり、非常に活発な議論が行われた。

第11回主催講演会

“The Development of Perspective-Taking in Young Children”

企 画：板倉昭二・友永雅己・明和政子

主 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が生きる教育のための国際的拠点」
ユニットA

日 時：2009年9月22日 13:00～14:30

場 所：百周年時計台記念館、研修室IV

講 師：Henrike Moll 博士（ワシントン大学）

要 旨：Humans have the unique ability to take and imagine others' perspectives. They learn by around 4 years of age, that an object or event can be seen or construed in different ways. In my talk I will address the origin and early development of this understanding. First, I will present studies investigating infants' understanding about what others are and are not familiar with from past experience—a precursor to an appreciation of perspectives. The results of these studies show that infants come to understand familiarity and ignorance in others best in situations of joint engagement. Second, I will report new studies on visual perspective-taking in 3-year-olds using a technique involving color filters. The results suggest that by 36 months of age, children readily acknowledge that another person sees an object differently than they themselves do. This ability, commonly known as 'level 2 visual perspective-taking', thus emerges prior to other theory of mind abilities, such as false belief reasoning. This surprising finding will be discussed with an emphasis that there might be a third level of visual perspective-taking which develops in synchrony with false belief and related forms of reasoning.

成 果：演者の Moll 氏はマックスプランク進化人類学研究所の Michael Tomasello 氏のもとで主としてヒトの子どもを対象に、社会的認知の比較発達研究を進めてきた。今回の発表では、視点取得の発達という点に焦点を絞り、共同関与、第2水準の視点取得の問題などに関する最新の成果が紹介された。日本心理学会の直後ということもあり、参加者が10名未

満と少し少なかったのが残念であったが、参加者の間では議論が活発に行われた。

第12回主催講演会

大学院修了後キャリア形成プログラム講演会：「教育研究と政策をつなぐ」

企画：高見茂・子安増生

主催：グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2008年9月26日（金）13時00分～15時00分

場所：京都大学百周年時計台記念館・国際交流ホール I

講師：惣脇宏（文部科学省生涯学習政策局生涯学習総括官、前国立教育政策研究所次長）

講演演題：教育研究と政策をつなぐ—国立教育政策研究所の役割—

成果：この講演は、大学院博士課程を修了してもなかなか高等教育機関には就職できない現状の中で、博士課程修了者が教育機関以外の幅広い選択肢—国・自治体等の公的研究機関や民間企業の研究機関等—の可能性について考える機会を提供し、その進路選択を側面からサポートすることを目的として実施する「大学院修了後キャリア形成プログラム」の第一回企画として開催された。講師は、文部科学省生涯学習政策局生涯学習総括官の惣脇宏先生にお願いした。惣脇先生は、1980年に文部省入省、文化庁、文部科学省の要職を歴任されているが、この講演では前職の国立教育政策研究所次長としての経験に基づいて、国立教育政策研究所の社会的役割と、そこで行われている教育研究と政策をつなぐ仕事の紹介ならびにその意義が惣脇先生によって丁寧に説明された。参加者は27人（うち外国人0人）であった。

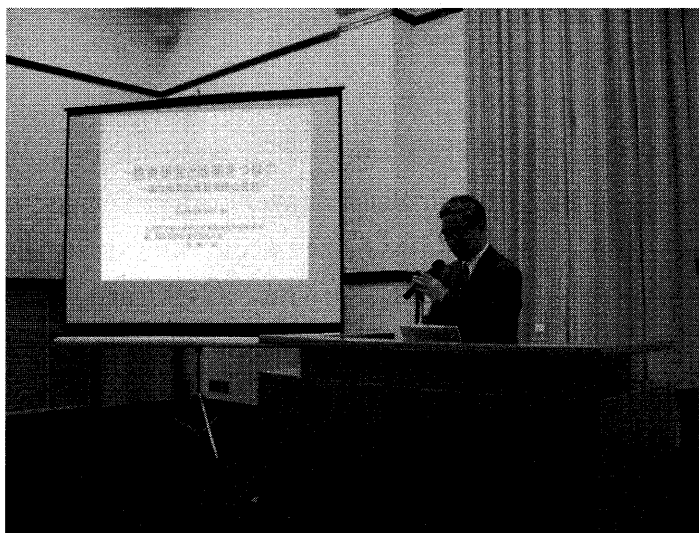


写真1：講演中の惣脇氏

第13回主催講演会

ヤロウ・ダナム博士講演会

企画：子安増生（司会）

主催：グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
ユニットD

日時：2009年1月13日（火）16時00分～18時00分

場所：京都大学教育学部 中央装置室（215室）

講師：ヤロウ・ダナム（米・カリフォルニア大学マーセド校助教）

指定討論：エマニュエル・マナロ（NZ・オークランド大学准教授）

講演演題：彼我の心理学：潜在的集団間態度の起源（Us & them: The origin of implicit intergroup attitudes）

成果：ヤロウ・ダナム博士は、1995年カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校卒業、2002-2007年ハーヴァード大学大学院博士課程修了、博士（心理学）。2007年にカリフォルニア大学マーセド校・心理科学部助教に就任。ダナム博士の専門は、社会認知の発達であり、潜在的連想テスト（implicit association test）などを用いて偏見の心理的過程を研究している。講演では、グループ間の態度の発達に関する先行研究のまとめの後、偏見の潜在的な要素に関するダナム博士自身の実験心理学的研究が紹介された。たとえば、黒人（アフリカ系アメリカ人）に対する偏見は、4歳程度で獲得され、特にそれは潜在的指標で顕著に現われること、そして6歳以降では、成人と同じく「社会的望ましさ」による顕在的な偏見表明の抑制が見られることなどが示された。講演の後、同時期に来日中のエマニュエル・マナロ博士（オークランド大学スチューデント・ラーニング・センター所長）が指定討論を行い、来聴者との質疑応答を行った。参加者は13人（うち外国人4人）であった。この講演により、偏見の発達過程に関する理解が深まった。

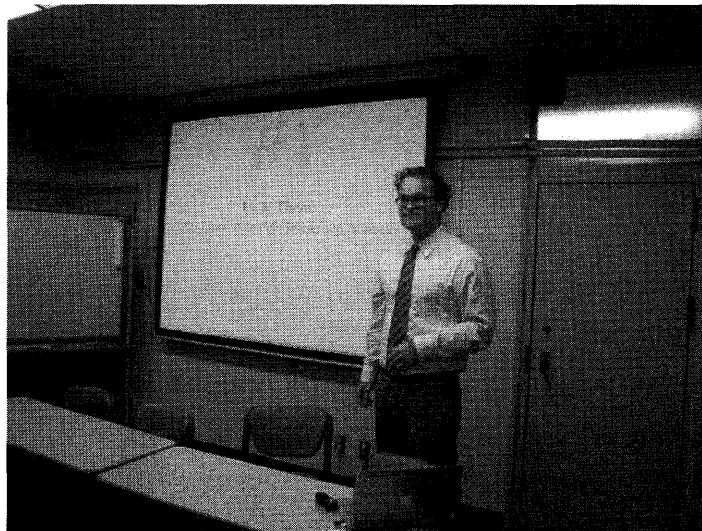


写真2：講演中のダナム博士

第14回主催講演会

ホセ・アレハンドロ・ラミレス博士講演会

企画：大山泰宏

主催：グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
ユニットD

日時：2009年3月27日（金）16時00分～18時00分

場所：京都大学教育学部 第2講義室（総合研究2号館）

講師：ホセ・アレハンドロ・ラミレス（メキシコ・プエブラ＝アメリカス大学教育学部）

講演演題：生徒のQOLに学校教育の質はいかなる効果を与えるのか：メキシコの事例（Assessing the effects of the Quality Schools Program on the Student's Quality of Life: A case of Mexico）

成果：ホセ・アレハンドロ・ラミレス博士は、1974年メキシコ国立自由大学で心理学を修め、

スタンフォード大学で教育学と統計学で修士号を取得、1983年にはスタンフォード大学博士課程修了、Ph.D. (教育学)。1984年からメキシコ・プエブラ＝アメリカス大学教授。同大学は国立自由大学と肩を並べる、メキシコで最も研究・教育水準の高い私立大学である。ラミレス博士の専門は、批判的・創造的思考の研究である。プエブラ＝アメリカス大学では過去2回学部長を務め、アルゼンチン、キューバ、スペイン等の諸大学やカナダのマギル大学から客員教授として招へいを受け、文字通り世界的に活躍している研究者である。

メキシコは、義務教育の質の向上と普及等の問題を抱えており、この問題に取り組むために同大学には「生活の質と社会発展のための研究センター (El Centro de Estudios en Calidad de Vida y Desarrollo Social) が設けられ、心理学、教育学、社会学等の研究者が協力し、学校教育改革プログラムを展開している。今回の講演会では、このセンターがプエブラ州の公立小学校・中学校と連携しておこなった、学校改善プログラム” Schools Quality Program (以下 SQP) ”の概要とその効果の検証に関するものであった。SQPは、学校の経営に自律性と自由度を与え、また、父兄の学校運営参加の枠を拡大し、またそのために必要となる資金を提供することで、学校に関わる人々の主体性や問題意識、責任制の自覚を促すことを通して、教育改善のための土壌を養成するプログラムである。事前・事後の調査で明らかになったのは、それが生徒の生活の質に対する主観的な評価や幸福感の改善には必ずしも明確な効果を与えていないということが示された。その理由として、家族を重視するメキシコ人のメンタリティの特徴などが考えられていた。しかしながら同時に、SQPを体験した子どもは、学校教育や教師への期待が大きくなり、また、とりわけ中学校においては、SQPプログラムの対象となった学校の生徒は、スペイン語や数学で良い成績を示しているなどの結果も示された。

年度末という時期的な影響もあり、参加者は10名弱（うち4名が外国人）であったが、英語で非常に活発な議論がおこなわれ、予定していた時間を過ぎるほどであった。今回の講演会は、ユニットDがおこなっている幸福感の国際比較研究とも強くつながるものであり、示唆されることが大きかった。とりわけ、幸福感にはどのような構成要因があるのか、また、そこに学校教育がいかに関わっていくことができるかといった、根本的なテーマが議論できたと感じられた。

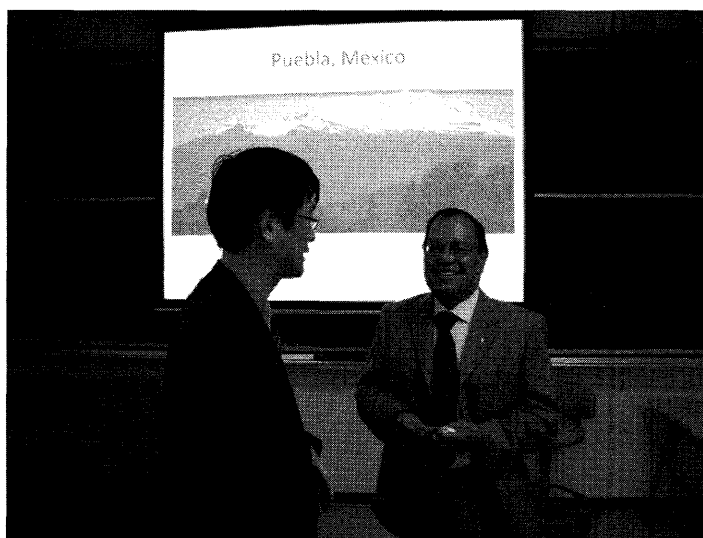


写真3：左から、大山准教授、ラミレス博士

第 13 回共催講演会

「幸福感の日米比較研究」 キャロル・リフ教授・唐澤真弓教授講演会

企 画：楠見 孝・内田由紀子

主 催：京都大学大学院教育学研究科

共 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
ユニット B

日 時：2008 年 4 月 8 日

場 所：京都大学百周年時計台記念館 2F 会議室 III

成 果：本講演会は、キャロル・リフ ウィスコンシン大学加齢センター所長による Psychological Well-being in Adulthood: What is it? Who has it? Why does it matter? と唐澤真弓東京女子大学現代文化学部教授による「文化と Well-being」の講演をおこない、その後、活発な討論を行った。講演の内容は、高齢化に伴う問題のひとつとして、well-being の研究が盛んに行われてきていること、現在報告されている well-being の程度の文化差は、経済からだけで説明できなくなっていることがまず紹介された。そして、リフ教授からは、過去 10 年来米国でなされてきた健康についての生涯発達プロジェクト (Midlife in the US; "MIDUS" と <http://midus.wisc.edu/>) について、唐澤教授からは、それに対応する日本での研究 (Midlife in Japan) について紹介があり、それらの結果から well-being 研究における比較文化データの必要性とその意義について検討した。参加者は、学内外から 30 名 (うち外国人参加者 1 名) であり、活発な討論が行われ、本グローバル COE プログラムの幸福感の国際比較研究を推進する上での重要な指針を得ることができた。

第 14 回共催講演会

「幸福感の国際比較研究」 Bergen 先生講演会・セミナーの記録

企 画：楠見 孝

主 催：京都大学大学院教育学研究科

共 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
ユニット B、D

日 時：2008 年 4 月 8 日

場 所：京都大学百周年時計台記念館 2F 会議室 III

成 果：ハワイ大学の Bergen 准教授を招き、セミナーと講演会をおこなった。

前半は、International seminar on embodied cognition for young researcher として若手対象 (院生、若手研究者など) のセミナーを開催し、4 名の京大の院生、GCOE 研究員が、Embodied Scales and Asymmetrical Distributions of Antonymy: The Stable Sense of the Particle *Down* and its Cognitive Basis (大谷)、Spatial cognition in sentence comprehension (平)、Two different perceptual aspects of literary reading (常深)、Perspective-taking in comprehension of projective spatial terms (小島) についての発表を行い、Bergen 先生も交えて、討論を行った。

後半は Bergen 准教授による Mental Simulation in Language Understanding (言語理解におけるメンタルシミュレーション) の講演をおこない、Happiness の言語表現を中心に議論をおこなった。学内外から約 40 名の出席 (うち外国人 1 名) で、活発な議論が行われ、言語と幸福感に関する研究の指針を得ることができた。

第 15 回共催講演会

「幸福感の国際比較研究」Higgins 教授講演会・セミナー

企画：楠見 孝

主催：京都大学大学院教育学研究科

共催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

ユニット B、D

日時：2008 年 5 月 22 日

場所：京都大学百周年時計台記念館 2F 会議室 IV

成果：コロンビア大学の Higgins 教授を招き、セミナーと講演会をおこなった。前半は、The international seminar on social cognition for young researchers として若手対象（院生、若手研究者など）のセミナーを開催し、京大と名大のそれぞれ 2 名の院生、PD 研究員が、Cultural differences of regret in daily lives（小宮）、The relationship between implicit stereotypes and person judgment（唐牛）、Effects of a Communicative Context on Reproducing Information of Products（菅）、The effect of regulatory focus on the activation of affective representations（竹橋）について発表を行い、Higgins 教授を交えて、討論を行った。

後半は、Higgins 教授が Re-thinking Culture and Personality（文化とパーソナリティ再考）について講演した。とくに、regulatory focus theory（調整焦点理論）と国際比較研究に基づいて、動機づけ、感情、価値、幸福感をめぐる文化がどのようにパーソナリティに影響するのかについて議論をおこなった。学内外から約 45 名の出席（うち外国人 1 名）があり、充実した議論がおこなわれ、本グローバル COE プログラムの幸福感の国際比較研究を推進する上での貴重な指針を得ることができた。

第 16 回共催講演会

伊勢田先生講演会

企画：楠見 孝

主催：科研基盤 B「批判的思考の認知的基礎と教育実践」

共催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

ユニット B

日時：2008 年 7 月 27 日

場所：京都大学百周年時計台記念館 2F 会議室 III

演題：共同作業としての批判的思考と「思いやりの原理」

成果：京都大学文学研究科の伊勢田先生を招き、これまで進めてきた科学哲学や倫理学の観点からの哲学的分析に基づく批判的思考研究について講演をいただいた。とくに、近年の認識論や科学哲学においては認知プロセスの共同作業としての側面が注目されるようになっており、批判的思考にもそうした視点を取り入れることが有用であるということ述べた上で、思いやりの原理という考え方に注目して講演がおこなわれた。そして、批判と思いやりは対立するようにも見えるが、実は建設的な批判において解釈上の思いやりは不可欠であることが指摘され、実際の議論においてどういう場面でどういうタイプの思いやりが必要なのかについて、具体的な事例に基づいて検討した。学内外から約 30 名の出席があり、中身の濃い議論がおこなわれ、批判的思考に関する今後の研究指針を得ることができた。

第17回共催講演会

「わかる」をたどる

企画：やまだようこ・明和政子

主催：京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座発達教育専攻

共催：京都大学グローバル COE 「心が活きる教育のための国際拠点」ユニット C プロジェクト
「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」

日時：2008年11月12日（水）13時00分～14時30分

場所：京都大学教育学部本館 第3演習室（302室）

発表者：高田明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科）

成果：この特別講演では、南部アフリカの狩猟採集民として知られるサン（ブッシュマン）を対象にしたフィールドワークをもとに、養育者-子ども間の相互行為の特徴、および彼らの自然環境や生業様式が与える影響に関してまとめられた研究が、報告された。「随伴的行動の相互調整における文化的基盤」「生態学的知識システムの生成と共有」「社会組織の再生産と創造—合意の達成としての記憶」の3つの話題が用意され、とりわけ、「随伴的行動の相互調整における文化的基盤」と「社会組織の再生産と創造—合意の達成としての記憶」について詳しい発表がなされた。前者では、授乳、ならびに授乳後のジムナスティックという、乳児を抱き上げ、立位を保持したり上下運動をさせる行為がとりあげられ、養育者と乳児の相互行為に偏在する文化実践としての身体性について考察された。また、後者では、ジュホアンとクンという2部族の、養育者-子ども間の相互行為の比較から、子ども集団活動の成り立ち、子ども文化と子どもの相互行為・経験との影響関係、子ども文化の特徴について考察された。フィールドの映像や現地語を交えた、非常に魅力的で刺激的な発表がなされた。学内から約30名（うち外国人参加者約0名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

第18回共催講演会

ランボン・ラルフ教授&セイジ博士講演会

企画：齊藤智

共催：英国 Royal Society、日英大和基金、京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」ユニット A

日時：2008年11月28日（金）10:00～12:00

場所：京都大学教育学研究科 本館1階 会議室

講演者1：Prof. Matthew A. LAMBON RALPH (University of Manchester)

講演題目1：Why do you need ATL amodal semantic representations? Simultaneous under- and overgeneralisation in semantic dementia.

講演者2：Karen Sage Senior clinical lecturer in speech and language therapy.

Neuroscience and Aphasia Research Unit (NARU) at the University of Manchester

講演題目2：Speech and language therapy research within the Neuroscience and Aphasia Research Unit with special emphasis on errorless learning in aphasia. therapy.

成果：英国マンチェスター大学の Matthew A. Lambon Ralph 教授ならびに Karen Sage 博士は、いずれも、同大学心理科学部の NARU (Neuroscience and Aphasia Research Unit) に所属し、言語処理に関する神経心理学的・神経科学的研究を進めるとともに、そこから得られた理論的

な知見を失語症患者に対するリハビリテーションや再学習へ適用するという実践活動を行っている。約 20 名の参加者を得たこの講演会では、そのような NARU グループの研究成果の中から、意味表象の役割について、意味の処理に特定の障害を示す意味認知症 (Semantic Dementia) 患者に関する研究から得られた理論的枠組みを基に、大脳両側の下側頭葉が意味表象の保持に担う機能について議論した。さらにこうした知見を実際のリハビリテーションに利用した先駆的な研究についても知識を共有し、理論面、実践面からの心理学的アプローチについて、貴重な意見交換を行うことができた。

第 19 回共催講演会

「ロンドン大学の医療と教育」講演会

企 画：やまだようこ

主 催：科学研究費プロジェクト「多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発」

共 催：京都大学グローバル COE「心が活きる教育のための国際拠点」ユニット C プロジェクト「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」

日 時：2009 年 1 月 19 日(月)13 時 00 分～15 時 00 分

場 所：京都大学芝蘭会館 研修室

講演者：内藤亮 (ロンドン大学)

講演題目：英国大学院 (認知心理学+免疫学、臨床教育学) の経験から考察した学術的思考の基盤としての言語としての英語 (日本語との対比より) —医療現場でのコミュニケーションスキルやナラティブ・アプローチの考察とともに

成 果：この講演会では、英国の大学院で数年間に渡って学びを積み重ねてきた発表者の経験をもとに、英語と日本語の違いに焦点をあてつつ、また、ナラティブ・アプローチの前提に触れながら、学術的な思考の基盤としての英語に関する考察が発表された。そして、まとめとして、英国の大学院教育で必要とされる訓練のあり方が述べられた。発表者の、双方向的なやりとりを行いながら進めていきたいという指針が最初に述べられたこともあり、随時、聴講者からの質疑とそれに対する応答を差し挟みながら、活発な議論を行いつつ講演が進められた。学内外から、心理学、教育学、医学など幅広い専門分野から、研究者や臨床に従事する医師、大学院生などのべ約 30 名 (うち外国人参加者約 1 名) に及ぶ参加者があり、非常に刺激的な討論が繰り広げられた。

第 20 回共催講演会

ロバート・ロギー教授講演会

企 画：荻阪直行・齊藤 智・大塚結喜

共 催：日本ワーキングメモリ学会、Royal Society of Edinburgh および京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日 時：2009 年 3 月 7 日 (土) 15:30-17:00

場 所：京都大学文学部新館第 3 講義室

題 目：Domain specificity in the mental workspace

講演者：Professor Lobert H. Logie (University of Edinburgh)

要 旨：One ongoing debate in the area of working memory is whether resources are domain specific or domain general. I shall argue that resources are domain specific, drawing

on evidence from different approaches to the study of working memory capacity. First, I will describe results from a large study involving data collected via the internet from over 100,000 participants across the age range 8-90. Measures of verbal and of visuo-spatial working memory capacity showed dramatically different patterns of change across age. Both reached asymptote at around age 20, but visual performance dropped very rapidly thereafter while verbal performance declined at a much slower rate. Further evidence for domain specific resources comes from a study showing that memory for serially ordered phonological codes for the Japanese words is disrupted by concurrent articulatory suppression while memory for serial order of the visual codes for Kanji characters remains unaffected. For a third example, I will describe the single case of a patient who has a very specific deficit in memory for binding of visual features but not of binding the names of features or objects. A final example of the striking differences between the use of verbal and visuo-spatial working memory will be more applied and in the area of medical decision support in neo-natal intensive care. Here, verbal descriptions of complex changing data from patients were found to result in better quality decisions about patient care than did the visually presented line graphs which were in regular use on the ward. These examples complement previous experimental work using dual task paradigms in supporting a model of working memory as a mental workspace that comprises multiple, domain specific resources.

成 果 : Robert H. Logie 教授は、エジンバラ大学の Human Cognitive Neuroscience Group および MRC Centre in Cognitive Ageing and Cognitive Epidemiology に所属し、現在は、特にワーキングメモリの観点から、加齢による認知への影響を、実験心理学的手法や、Web による大規模実験、神経科学的方法によって検討している著名な実験心理学者である。本講演では、イギリスの BBC 放送のウェブサイトを通じて様々な認知機能への加齢の影響を検討した最新の研究成果についても紹介された。またワーキングメモリの領域固有性という議論の絶えないホットなテーマについても、加齢研究のデータをもとに議論された。学内外から 61 名（うち外国人参加者 1 名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

■ シンポジウム

第 3 回主催国際シンポジウム

The 2nd International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University, and the Institute of Education, University of London

“The Self, the Other and Language II: Dialogue between philosophy and psychology”

企 画 : 斉藤直子

共 催 : 京都大学グローバル COE プログラム「心が生きる教育のための国際的拠点」および、
京都大学大学院教育学研究科大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）

日 時 : 2009 年 2 月 28 日（土）午前 9 時～3 月 1 日（日）午後 6 時

場 所 : 京大会館

成果：本国際会議は、2007年度イギリスで開催された、ロンドン大学教育研究所と京都大学教育学研究科の第一回国際会議「自己・他者・言語：哲学、心理学、比較教育学の対話」（2008年3月25日～26日、ロンドン大学教育研究所）の成果と交流を継続的に発展させ、第二回国際会議として京都大学にて開催された。本年度は場所を京都大学に移してロンドン大学教育研究所の教員、大学院生合計8名を招聘した。そして「自己・他者・言語 II：哲学と心理学の対話」という大枠の中で、教育哲学、教育人間学、比較教育学などの教育学研究、および、教育認知心理学や心の理論研究に携わる日英の教員、研究者、学生が、さらに交流の輪を広げて、学際的・国際的な対話交流に従事した。基調講演は、ポール・スタンディッシュ教授（教育哲学）と奈良女子大学の西村拓生准教授（教育哲学）による「京都学派の思想についての東西対話」、ロンドン大学教育研究所ジャン・デリー准教授（心の理論研究）による「発達心理学における哲学的影響：ヴィゴツキー、ピアジェ、規範性の問題」、京都大学教育学研究科、楠見孝教授（教育認知心理学）による「がん患者のためのバーチャルスペースを用いたサポートグループ」、西平直教授（教育人間学）による「世阿弥の実践と技の哲学」であった。また、学生の発表については、昨年度はイギリス側の大学院生が日本側の学生の発表に応答したが、本年度は、イギリス側学生の主発表に対して日本側の学生が応答発表をするという形式を取った。これらの発表形式は、イギリス教育哲学会等、欧米の教育哲学の国際学会の形式を取り入れたものである。この過程で、日本側学生は組になったイギリス側学生より論文の英文校閲指導を受けるというチュートリアルの効果も取り入れた。異文化間の対話、学際的な対話、さらには学部生から教員までの世代間の対話というマルチパースペクティブな対話のスペースから、一見すると関係ないように見える異分野の思想が交差し交流し、哲学と心理学の接点からきわめて刺激的な議論が生まれた。このことは自分野の研究が客観的に見直され外部の視点から建設的に批判される機会ともなった。さらに、本年度は、京都学派の思想や世阿弥の思想についてのセッションを取り入れることによって日本からの研究の発信を行うこともできた。学内外からのべ約35名（うち外国人参加者約9名）の参加者があり、密度の濃い、活発な議論が行われた。また2日間の会議の前にはイギリス側発表者と日本側発表者の話し合いが行われ、終了後には大学院生主体の反省交流会が開催され、来年度のイギリスにおける企画に向けて実り多い意見交換がなされた。



写真4：京大-IOE 国際シンポジウムの参加者



写真5：京大-IOE 国際シンポジウムのフロア風景

第3回共催国際シンポジウム

「日本のFDの未来」-The Future of Faculty Development in Japan: Building the Core in Faculty Development

企画：松下佳代

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター

共催：京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2008年1月24日～25日

場所：京都大学芝蘭会館

成果：このシンポジウムは、高等教育研究開発推進センターが2008年度より5年計画で進めている特別教育研究プロジェクト「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成」の発足シ

ンポジウムとして開催されたものであり、本グローバル COE プログラムのユニット D 「FD・教育改善におけるオルタナティブ・モデルの構想」の活動としても位置づけられていた。海外から、M. T. Huber (カーネギー教育振興財団)、J. M. Robinson (インディアナ大学ブルーミントン校、ISSOTL 議長)、飯吉透 (マサチューセッツ工科大学)、F. Prochaska (ノースカロライナ大学) の各氏を、また、国内から、FD・大学教育改善分野のリーダー5名を招聘し、Huber 博士の基調講演(「高等教育における Teaching Commons の構築」と3つのセッション(「FD ネットワークの構築」「テクノロジー利用による FD」「FD の推進主体を問う」)から構成されていた。各セッションは、海外ゲスト、国内ゲスト、センター教員の3名が報告し、その後フロアとディスカッションを行うという形式で進められた。また2日目の最後には、各セッションの司会によるまとめと全体討論が行われた。海外ゲストの多くは、カーネギー財団が FD・大学教育改善の理念としている SOTL (Scholarship of Teaching and Learning : 教育と学習の学識) を共有し、その実践の中核にいる人びとである。シンポジウムでは、SOTL と高等教育研究開発推進センターが理念としてきた「相互研修型 FD」との類似性と相違、学内・地域・全国・国際という4つのレベルでの FD ネットワーク構築と拠点形成、それを促すテクノロジー利用のあり方、FD における同僚モデルと専門家モデルの対比などをめぐって、刺激的な報告と活発な議論がかわされた。参加者数は、144名(うち外国人参加者6名)であった。

第2回主催シンポジウム

京都大学・慶應義塾大学 COE 合同シンポジウム「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」

企画：杉本均

主催：京都大学グローバル COE プログラム「心が生きる教育のための国際的拠点」

日時：2009年1月11日

場所：京都大学時計台記念館

成果：物理的に同じ基本構造を持つとされる人類、しかしその人体にアプローチする医療という現象が、実はいかに文化や慣習に依存した所業であるのか、私たちは意外に意識していない。医療をめぐる倫理や心の問題を比較文化的に研究することがいかに重要であるか、東西のグローバルCOEプロジェクトを代表して、医療人類学と比較倫理学の立場から2名の研究者に講演いただき、両大学から2名の関係者よりコメントをいただいた。

講演者：

マーガレット・ロック教授(カナダ・マギル大学)

生命医学テクノロジーの発達に伴う自己と社会の変容の姿—医療人類学の視点より カー
ル・ベッカー教授(京都大学こころの未来研究センター)

日本の医療は医療人類学から何を学ぶべきか —臓器移植と iPS 治療を中心に
コメンテーター：

京都大学教育学研究科、鈴木晶子教授(教育哲学)

慶應義塾大学文学研究科、宮坂敬造教授(人類学)



写真6：左から、杉本、宮坂、鈴木、ベッカー、ロック各教授

第1回共催シンポジウム

シリーズ<質的心理学の最前線> (第2回)「人生と病いの語り」

企画：日本質的心理学会研究交流委員会 (委員長：永田素彦)

主催：日本質的心理学会研究交流委員会 (委員長：永田素彦)

共催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」

日時：2008年6月8日

場所：京都大学吉田南キャンパス・総合人間学部棟

成果：このシンポジウムは、やまだようこが編者の一人として2008年に刊行された『質的心理学講座全3巻』の刊行にあわせて、3回のシリーズで開催された<質的心理学の最前線>の第2回であり、生涯発達・医療領域において質的心理学が目指す方向性に関する議論の場を提供することを目的としていた。当日のプログラムは、3名の話題提供者が発表を行い、次に2名の指定討論者が各発表に対するコメントをし、それに対して話題提供者がリプライをし、最後にフロア・ディスカッションを行うという形式で進行した。「ナラティブ」をキーワードに、ナラティブがどのように経験をまとめ意味づけるのか、病という経験を生きること、一研ネガティブな経験を意味づけることとケアがどのように結び付くのか、これらの問題を、インタビューやテキスト分析を通じた質的研究としてまとめ、実践に活かしていくためのリソースについて話題が提供された。学内外から86名の参加者があり、活発な議論が行われた。

第2回共催シンポジウム

「社会脳2008」

企画：荳阪直行・大塚結喜

主催：日本学術会議 心理学・教育学委員会、脳と意識分科会

共催：日本ワーキングメモリ学会および京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2008年8月2日(土) 13:00~17:00

場所：京都大学文学部新館第3講義室

- 概要：13:00 - 13:20 はじめにー「社会脳」にあらわれた現代社会の縮図ー
 荻阪直行（京都大学大学院文学研究科長）
- 13:30 - 14:30 駆け引きする脳
 村井俊哉（京都大学大学院医学研究科准教授）
- 14:30 - 15:30 うそをつく脳
 藤井俊勝（東北大学医学研究科准教授）
- 15:30 - 16:30 だまされる心
 仁平義明（東北大学大学院文学研究科教授）
- 16:30 - 17:00 討論
- 17:00 閉会あいさつ
 内田伸子（お茶の水女子大学理事、日本学術会議会員）

成果：このシンポジウムは、2007年度に日本学術会議・脳と意識分科会によって開催された「社会脳」に関するシンポジウム（2007年6月2日開催）をさらに発展・展開させたものであり、社会脳に関するより応用的な研究を議論する場を提供することを目的としていた。上記のプログラムにある通り、3人の講演者が発表を行い、それらの発表を基に最終的にフロアも含めて討論を行うという形式であった。「駆け引きする脳」では臨床的な観点から統合失調症などの症例が、「うそをつく脳」ではニューロイメージング研究による嘘に関わる脳内メカニズムが、「だまされる心」では悪徳商法にだまされる側の心理的メカニズムなどがそれぞれ紹介された。学内外から約100名（うち外国人参加者約10名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

第3回共催シンポジウム

「東アジアの教育伝統と近代教育（学）ー日本・韓国・中国の場合ー」

国際教育哲学会（INPE）第11回大会シンポジウム

企画：辻本雅史・杉本均

主催：International Network of Philosophers of Education（INPE）

共催：京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2008年8月10日

場所：京都大学吉田南キャンパス

成果：このシンポジウムは、2008年8月9日～12日、京都大学で開催された国際教育哲学会（INPE）における開催校企画として採択されたシンポジウムである。日本学術振興会からも助成金を得ている。

独自の秩序を保ってきた東アジア諸国は、19世紀半ば以降、欧米近代諸国と接し近代化を余儀なくされた。国家近代化において教育は政策の柱となったが、それまで東アジアには一定の教育システムとそれを支える思想が蓄積されていた。こうした伝統的な教育のシステムと思想は、異質な近代教育や近代教育思想に以下に向き合い以下に展開したのか、その諸相を、中国、韓国、日本の展開事例を報告して、現代の教育や教育学に如何なる示唆を提供するか、世界の研究者と議論した。中国から石中英・北京師範大学教授、韓国から韓龍震・高麗大学教授、日本から辻本雅史・京都大学教授、司会者・コメンテーターに加藤守通・東北大学教授の参加を得た。国内外の研究者、およそ60人（うち外国人約25人）の参加者があり、活発な議論が行われた。

第4回共催シンポジウム

病と臨床一病に生きる人間にみる臨床の知

企画：代表 皆藤章 分担 河合俊雄

主催：京都大学大学院GPプログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」

共催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2008年11月17日

場所：京都大学百周年時計台記念館 百周年ホール

成果：近年、医学的には完治することのない病に心理臨床家が関わるが増えてきており、そうした病に対する「臨床の知」が求められている。このシンポジウムは、重篤な病を生きる人間に、心理臨床はいかに関わっていくのかを大きなテーマとして行われた。今回は、話題提供者として、糖尿病治療における世界最先端水準にある Joslin 糖尿病センター副所長・ハーバード大学医学部教授の Alan Jacobson 氏を招聘し、そこに河合俊雄氏（こころの未来研究センター）、清水亜紀子氏（グローバル COE 研究員）が加わり、それぞれ、"Depression Among Patients with Diabetes: What We Know and What We Can Do About it."、「甲状腺疾患患者の語り：病の自己性と他者性」、「筋ジストロフィー患者の生きる体験世界に学ぶ「臨床の知」」と題した話題提供がなされた。それに対し、教育人間学の立場から西平直氏、精神医学の立場から野間俊一氏による指定討論が行われた。話題提供された、糖尿病、甲状腺疾患、筋ジストロフィーはそれぞれの専門領域で医学的・心理臨床的援助が行われているが、今回は人間が生きるという共通した視点から、これらの病を生きる人間の心理的テーマ・世界観の異同について議論が交わされたという点ではきわめて意義あるシンポジウムであった。100名を超える参加者があった。なお、本シンポジウムに関しては、天理よろづ相談所病院の石井均氏、京都大学糖尿病心理臨床研究会の協力を得た。

グローバル COE 後援シンポジウム

「心と身体から教育を考える」

企画：鈴木晶子

主催：日本学術会議・心理学・教育学委員会・「心と身体から教育を考える分科会」

共催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2008年6月1日

場所：京都大学文学部新館第三講義室

成果：このシンポジウムは、日本学術会議・心理学・教育学委員会・「心と身体から教育を考える分科会」が主催したものである。いじめや自殺、青少年犯罪など深刻な状況への社会的対応として、いのちの教育や心のケアの重要性が叫ばれている。だが、「いのち」や「心」といった言葉が一人歩きしてしまい、そもそも脳や心、身体はどんな連関をもつのか？教育可能なのか？善悪の判断など価値観形成にどんな関係があるのか？など、基本的な問いを十分に検討できていない。そのため具体策の捻出を逸るばかりで、教育現場は混乱している。他方、哲学、医学、心理学、体育学、教育学など人間探究の諸科学の知見は、近年目覚ましい発展を遂げているにもかかわらず、そうした知見をもとに、トータルな人間観を提示するには至っていない。本分科会は、脳や心、身体、生命など人間探究の諸科学を専門とする委員による学際的な議論を通して、新たな科学的知見を基礎としたトータルな人間観や教育可能性について検討することを目的として設置された。シンポジウムでは、脳研究、心理学、教育学など人間の行動やその生成変容を研究対象とする研究者7人が講演

と3人のコメンテーターの応答、そしてフロアとの議論を行った。学内外から約80名の参加者を得て、活発な議論を行った。特に、生物としてのヒトと人間の間を繋ぐ研究視角や方法論の共有可能性について様々な視点から提案がなされた。ニホンザルやチンパンジーなどとの比較を通して、人間としての特性を改めて問い直すとともに、進化論的発想との議論のなかで、人間の発達・成長可能性を基礎づける総合的な人間科学の可能性についても検討を行った。なお、当日の様子は京都大学新聞に掲載された。

■ ワークショップ

第3回主催ワークショップ

映像ナラティブ・ワークショップ

企 画：やまだようこ

主 催：京都大学グローバル COE 「心が活きる教育のための国際拠点」ユニット C プロジェクト「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」

共 催：科学研究費プロジェクト「多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発」

日 時：2008年6月25日（水）13時00分～18時00分

場 所：京都大学芝蘭会館 研修室

発表者：高橋正実（ノースイースタン イリノイ大学）

成 果：このワークショップでは、質的研究における映像という手法に着目し、「質的研究」と「ドキュメンタリー制作」の相違点について、具体例をあげ実習を交えながら、討論することを目的としていた。ワークショップは3部構成になっていた。第1部では、沖縄の長寿をドキュメンタリー化した短編映像を対象として取りあげ、研究費と制作費の違いや文献発表とマーケティングの違いなどが報告された。第2部では、参加者が4人前後のグループになり、簡単な絵コンテをもとに映像作品を作成した。そのうえで、各グループの作品を参加者全員で鑑賞し、映像録音と音声録音の違いに着目して議論を行った。第3部では、元特攻隊員たちの回想を綴ったドキュメンタリー映像を鑑賞し、その内容と研究結果について討論した。参加を事前予約制としたが、学内外から定員一杯の25名（うち外国人参加者約1名）の参加者があった。映像作品の鑑賞や作成などの実習を中心とした、極めて刺激的なワークショップとなった。

第4回主催ワークショップ

"Frontiers of comparative cognitive developmental neuroscience"

企 画：板倉昭二・友永雅己・開一夫（学外）・明和政子

主 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」ユニット A

日 時：2008年9月17日 13:00~17:30

場 所：京都大学芝蘭会館別館

成 果：本シンポジウムは、「比較認知発達神経科学」という新たな研究領域の開拓を目指すことを目的とした。講演者は6名で、社会的認知の領域で国内外の第一線で活躍される中堅の研究者を招聘した。本シンポジウムのテーマは、大きく以下の3つにわけられた。1) 社会的認知に関わる脳内メカニズムの解明、2) 社会的認知の生物学的基盤、3) 社会

的認知の個体発生。それぞれのテーマにつき2名の研究者が講演し、関連分野の総説および最新の知見を紹介した。「社会的認知に関わる脳内メカニズムの解明」では、ヒト幼児に環境に応じて心的状態を切り替える課題をおこない、そのときの非侵襲的脳活動を計測した研究や、ヒト新生児がヒトの顔図形や視線の方向を敏感に検出する能力の発見についての報告があった。「社会的認知の生物学的基盤」では、ヒト乳幼児と飼育下の大型類人4種を対象として他者の視線方向の理解能力を実証的に比較した研究や、生後すぐに母子分離させたマウスが不安行動と攻撃性を上昇させることから、幼少期の社会環境が遺伝レベルの神経系の発達に影響を及ぼす可能性を主張する報告があった。社会的認知の個体発生については、ヒトに特有な認知能力とされる身体模倣が主たるテーマとなった。ヒトの模倣を実現させる要因といわれる情動、共感性、他者の心的状態の理解が、模倣の発達のプロセスにどのように関連するかを実証的に調べた研究などが紹介された。総合討論では、参加者から活発な意見や質問がなされ、ヒト特有の社会的認知を解明するための方法論とその妥当性に関する討論が展開した。参加者は、学内外からのべ約35名（うち外国人参加者約2名）であった。

第5回主催ワークショップ

撮るものと撮られるものの関係性—事実と物語の生成的關係をめぐって

企画：やまだようこ

主催：京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際拠点」

ユニットC「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」

共催：科学研究費プロジェクト「多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発」

日時：2008年11月5日（水）13時00分～18時00分

場所：京都大学芝蘭会館 研修室

発表者：新井一寛（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科）、大石高典（京都大学こころの未来研究センター）

成果：このワークショップは、2008年6月25日に京都大学グローバルCOEによって開催された、第3回グローバルCOE主催「映像ナラティブ・ワークショップ」の第2回目として開催するものであった。とりわけ今回は、撮影者と被撮影者、上映することと見ることといった相互関係・行為に焦点をあて、討論をすることを目的としていた。ワークショップは2部構成であった。第1部では、エジプトのスーフィー教団、ジャズブリーヤ・シャズブリーヤ教団の次期教団トップとなる青年の「カリスマとしての成長過程の姿」を撮影した映像作品と、4ヶ月間同居していた友人を被撮影者とした映像作品が上映された。2作品を比較しつつ、とりわけ後者の映像作品における、「物語」の生成過程における撮影者と被撮影者の語り、行為、関係性、「物語」生成と「現実」との相互侵食過程などについて、討論を行った。第2部では、フィールドで5年間の間に撮りためた非意図的・意図的映像を「切り刻んで」つくった映像作品をもとに、発表者がフィールドで感じた、撮る/撮られる関係のコミュニケーション性や村落社会の中で上映する/見ることの政治性について、発表者の現場での経験をもとに議論を行った。調査者と被調査者双方で、様々な物語を生みださずにはおかないフィールドワークや「参与観察」の進行プロセスそのものを見直す手がかりが、検討された。参加は事前予約制とし、学内外から25名（うち外国人参加者約0名）の参加者があり、非常に刺激的で活発な議論が展開された。

第6回主催ワークショップ

民意のリテラシー：「世論」民主主義と「輿論」の可能性

企画：佐藤卓己

主催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
ユニット C

日時：2008年12月5日

場所：京都大学教育学部本館 1階会議室

成果：このワークショップは、「選挙年」2008年はアメリカにおける大統領選のオバマ勝利、日本における総選挙臨戦態勢のなかで社会調査研究とジャーナリズムの現場から世論調査の問題点を検討すべく企画された。まず『輿論と世論—日本の民意の系譜学』（新潮社・2008年）を刊行した佐藤が「輿論と世論のメディア・リテラシー」を基調報告した。世論調査の“世論”とは、そもそもセロンなのか、ヨロンなのか？ このワークショップを企画した佐藤は、戦後曖昧になった“公的な意見＝輿論”と“世間の空気＝世論”の区別を改めて再構築することで、民意の読み書き能力を高めることを主張した。この「輿論／世論」の峻別による熟議民主主義の可能性について議論を深めるべく、世論調査方法論を専門とする社会心理学者・稲葉哲郎（一橋大学大学院社会学研究科准教授）が「輿論と世論は測定可能か？」を、また『「次の首相」はこうして決まる』（講談社現代新書：2008年）を上梓した柿崎明二（共同通信社政治部次長兼編集委員）がジャーナリストの立場から「世論調査病を超えて」を発表した。三人のパネル討議を経て、フロアー討議を行った。研究者・大学院生のほか朝日新聞社、読売新聞社などの報道陣をはじめ学内外からのべ約50名（うち外国人参加者約2名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

第2回共催ワークショップ

Workshop for Socratic Dialogue and Natural Learning: On authenticity

企画：楠見 孝

主催：文部科学省科学研究費補助金基盤研究 B「批判的思考の認知的基礎と教育実践」

共催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
ユニット B

日時：2008年4月2日

場所：京都大学大学院教育学研究科 2階 215室

成果：このワークショップは、オランダ、ロッテルダムのエラスムス実践哲学研究所ハーテロー博士および望月太郎大阪大学准教授を講師と迎えて開催した。ハーテロー博士は、ソクラティック・ダイアログ等、Collective Critical Thinking のワークショップをこれまでも実践している。このワークショップでは、ソクラテス的対話（Socratic Dialogue）を使って、学生による自発性による学び（natural learning）の中で"authenticity（本物）"とは何かを学んだ。ワークショップの後半では、部屋を出て、"authentic"な吉田神社を散策しながら対話を続けた。参加者は、学内外から8名（うち外国人参加者1名）であり、活発な対話が行われた。

第3回共催ワークショップ

The 2nd International Workshop on Multi Cultural Studies: Research Collaboration between the University of Vienna and Kyoto University（第2回多文化研究の国際ワークショップ）

企 画：やまだようこ・Christiane Spiel・Dagmar Stromeier (ウィーン大学)

主 催：科学研究費プロジェクト「多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発」

共 催：京都大学グローバル COE 「心が活きる教育のための国際拠点」

ユニット C 「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」

日 時：2008 年 7 月 10 日 (木) 14 時 00 分～18 時 15 分

場 所：ウィーン大学心理学部

発表者：明和政子 (京都大学)・Sheri Bauman(アリゾナ大学)・および京都大学とウィーン大学の若手研究者・大学院生

成 果：このワークショップは、2008 年 2 月 6 日 (水) に京都大学グローバル COE によって開催された、第 2 回グローバル COE 主催京都大学とウィーン大学の共同研究会「International Workshop of Multicultural Studies」の第 2 回目として、開催するものであった。ヨーロッパ発達心理学会長である Christiane Spiel 教授による開会の辞を始めとして、2 つの特別講演「進化における模倣の基礎と発達」(明和政子)、「コンピューターによるいじめ」(Sheri Bauman) が行われた。引き続き、京都大学 (4 名) とウィーン大学 (3 名) から交互に、7 名の若手研究者や大学院生から研究発表がなされた。その研究内容は多岐に渡るものであり、日本の漫画が人々に与える影響、娘世代からみた母・娘・祖母関係についてのビジュアルライフストーリー、日本の伝統芸能における世代間関係のナラティブ分析、不妊治療者の経験からみた選択、VEL (Vienna E-Lecturing) という大学教育による自己制御学習の促進、生涯学習に対する学生の能力の変化に及ぼす学級の影響、オーストリアの青年を対象とした移民家族の心理的適応、というように、非常に魅力的なものであった。最後に、前回 (2008 年 2 月) の京都大学とウィーン大学の共同研究会における特別講演者である、新進気鋭の若手研究者 Dagmar Stromeier が閉会の辞を述べ、ワークショップの幕が閉じられた。学内外からのべ約 50 名 (うち外国人参加者約 40 名) の参加者があり、京都とウィーンの 2 文化間を行き交う非常に刺激的で活発な国際交流が繰り広げられた。

グローバル COE 後援国際ワークショップ

International Workshop on Comparative Cognitive Science “Minds in the Forest and Under Water: Comparative Cognitive Science on Chimpanzees and Dolphins

「森の心、海の心：チンパンジーとイルカの比較認知科学」

企 画：国際ワークショップ準備委員会

友永雅己 (京都大学霊長類研究所准教授)

幸島司郎 (京都大学野生動物研究センター教授)

中原史生 (常磐大学コミュニティ振興学部准教授)

森阪匡通 (京都大学野生動物研究センター研究員)

山本真也 (京都大学霊長類研究所大学院生)

主 催：京都大学霊長類研究所、京都大学野生動物研究センター (共催)

後援・協力：財団法人名古屋みなと振興財団 (名古屋港水族館)

京都大学グローバル COE 『生物の多様性と進化研究のための拠点形成』

京都大学グローバル COE 『心が活きる教育のための国際的拠点』

日本動物心理学会

日 時：2008年9月12日（金） 10:00～17:30

場 所：名古屋港水族館北館レクチャールーム

発表者：山本真也（京都大学霊長類研究所、日本学術振興会）、松野 響（京都大学文学研究科、日本学術振興会）、友永雅己（京都大学霊長類研究所）、Victoria Horner（Yerkes Primate Research Center, USA）、中原史生（常磐大学）、森阪匡通（京都大学野生動物研究センター、日本学術振興会）、Marie Trone（Dolphin Research Center, FL, USA）、Stan Kuczaj（University of Southern Mississippi, USA）

成 果：近年、心の進化を探る研究領域である「比較認知科学」は、その対象とする種の幅をここ数年劇的に広げつつある。これまで非常に研究が進んできた霊長類、とくにチンパンジーなどの大型類人猿だけでなく、鳥類でも知性が高いといわれているカラスやカケスの仲間、そしてイルカやシャチといった鯨類などでの研究が海外では盛んになってきた。また、研究テーマの面でも広がりを見せている。これまで視覚認知など物理的世界の認識を調べる研究が主流だった霊長類での比較認知研究は、この10数年の間、彼らの持つ社会的な知性を探る研究が精力的に行われるようになってきた。物理的な世界を認識する知性、生態学的環境を認識する知性だけでなく、社会的なかわりの中で発揮される知性への関心の高まりは、霊長類だけでなく、鳥類や鯨類にも波及しつつある。国内での鯨類の比較認知研究者の数は、霊長類研究者に比べてかなり少ない。また生態学的研究や行動研究自体は比較的精力的に行われているものの、鯨類での認知研究を専門に行う研究教育機関が極めて少ないためか、認知研究について言えば世界的に見てもかなり後進の状態にある。そこで、本国際ワークショップでは、海外からイルカの行動と認知の研究の第一人者である Stan Kuczaj 氏(University of Southern Mississippi)をお招きするとともに、国内外の鯨類と大型類人猿の若手研究者を糾合して、国内外で進展している研究の現状を共有し、さまざまな形での研究の連携を探る場を提供することを目的とした。発表されたトピックは多岐にわたるもので、チンパンジーの視知覚認知、協力行動、道具使用の伝播、社会的認知、イルカ類における認知実験の訓練、道具使用、パーソナリティ、音声コミュニケーション、社会的知性など、それぞれに非常に興味深いものばかりであった。参加者は約40名程度だったが、若い学生の方なども多く参加し、今後の類人猿－鯨類の比較認知研究のコラボレーションの可能性を強く感じさせるものであった。

グローバル COE 後援国際ワークショップ

“比較認知発達神経科学の動向 — 他者理解の発達の・進化的起源を探る —”

企 画： 友永雅己、板倉昭二、開一夫（学外：東京大学）、明和政子

司 会： 友永雅己

話題提供者： 岡本早苗（Maastricht University）、Teresa Farroni（Birkbeck, University of London）、Henrike Moll（Washington University）

指定討論者： 明和政子

後援（あるいは共催）：京都大学グローバル COE プログラム「心が生きる教育のための国際的拠点」

日 時：2008年9月21日 10:00～12:00

場 所：北海道大学（日本心理学会第72回大会ワークショップ WS091として開催）

成 果： 認知機能はいかに発達するのか、そしてなぜそう発達するように進化してきたのか。このような2つの時間軸を認知研究に積極的に導入し、かつその神経基盤にまで探求の幅

を広げる。この立場を企画者らは比較認知発達神経科学と名づけ、これまで日本心理学会、日本発達心理学会、日本動物心理学会などの学会大会でのシンポジウムやワークショップ、自由集会、あるいは各種の研究会研究会等で、異なる領域の研究者の間のクロストークを促進する試みを続けてきた。本 WS は、「比較認知発達神経科学の動向」と題して、日本心理学会第 72 回大会の中で開催された。前年の WS では主として国内の若手研究者の成果に焦点をあてたが、今回は、海外で精力的に研究を行っている若手・中堅の方々をお招きした。特に、他者の心的状態の理解を可能とする能力の基盤の発達の、進化的起源について、最前線のトピックをご紹介いただいた。岡本氏は共同注意に関する主としてチンパンジーを中心とした比較認知発達研究を、Farroni 氏は新生児期から乳児期の顔認知に関する認知発達神経科学研究を、そして Moll 氏は乳幼児期における視点取得に関する発達についてくお話いただいた。いずれの発表も、それぞれの領域の最先端のものであり、発表後、指定討論も含めて活発な議論が行われた。参加者は約 50 名。講演はすべて英語で行われた。

グローバル COE 協力ワークショップ

連続講義 「人間とは何か」 (The PRI/WRC Lecture Series “On Human Nature”)

1. 日仏修好 150 周年記念ワークショップ(Workshop for the 150th Anniversary of the French-Japanese Relations) : 2009/5/27-28, 5/31 於 : 吉田泉殿
2. 「人間の心の霊長類的起源—比較認知科学国際シンポジウム 2008」 (Symposium on Comparative Cognitive Science 2008 “ Primate Origins of Human Mind”) : 2009/5/28-5/31 於 : 芝蘭会館
3. 京都大学野生動物研究センター発足記念シンポジウム : 2009/5/30 於 : 百周年時計台記念館大ホール
4. 京都大学霊長類研究所京都公開講座 : 2009/5/30 於 : 百周年時計台記念館大ホール

主催 : 京都大学霊長類研究所、京都大学野生動物研究センター

後援 : 日本学術振興会 (2)、駐日フランス大使館 (1)

協力 : 京都大学グローバル COE 『生物の多様性と進化研究のための拠点形成』

京都大学グローバル COE 『心が活きる教育のための国際的拠点』 (1-4)

成果 : 2008 年 5 月 27 日から 31 日まで、連続講義「人間とは何か」を開催した。本連続講義では、日仏修好 150 周年を記念したワークショップ(在日本フランス大使館後援)、4 月 1 日に発足した京都大学野生動物研究センターの発足を記念した国際シンポジウム、そして、京都大学霊長類研究所京都公開講座などとともに、「人間の心の霊長類的起源—比較認知科学国際シンポジウム 2008」を日本学術振興会の後援のもと、京都大学霊長類研究所と京都大学野生動物研究センターとの共催で、京都大学芝蘭会館において開催した。本国際シンポジウムには平日にもかかわらず、連日 100 名近くの聴講者にご参加いただいた。まず、28 日に、京都大学霊長類研究所のチンパンジー認知研究 30 周年を記念して、チンパンジーでの認知発達研究をメインテーマとして、友永雅己と Brain Hare による Plenary Talk を軸に、明和政子、Sanae Okamoto-Barth、上野有理、林美里、斉藤亜矢、村井千寿子、Barabara Kisilevsky、James Anderson らによる研究発表が行われた。29 日は、チンパンジーだけでなく、イカからイルカまで多様な種での多様な場での研究の発表が行われた。Elisabetta Visalberghi (フサオマキザル、Plenary)、服部裕子(フサオマキザル、チンパンジー)、足立幾磨(アカゲザル)、Dalila Bovet(霊長類と鳥類)、井上紗奈(チンパンジーとヒト)、田中正之(チンパンジー)、松野響(フサオマキザル)、Iver Iversen、山本真也、森村

成樹、大橋岳、Susana Carvalho(すべてチンパンジー)、Robert Seyfarth (ヒヒ、Plenary)、久世濃子(オランウータン)、酒井麻衣(バンドウイルカ)、池田譲(イカ)、入江尚子(アジアゾウ)、高橋麻里子(クジャク)、Vanessa Woods(ボノボ)。30日は野生動物研究センター発足記念シンポとの共催で行われた。フィールドにおいて大型類人猿をはじめとする霊長類の研究と保全を行っている以下の研究者による発表が続いた。山極寿一(ゴリラ)、Marc Ancrenaz(オランウータン)、杉浦秀樹(ニホンザル)、Sabrina Krief、Kim Hockings、中村美知夫(チンパンジー)。

また、28日と29日には若手研究者を中心としたポスターセッションも開催した。2日間で合計41件の発表があり、活発な議論が行われた。

このほか、日仏修好150周年記念ワークショップにおいても活発な議論が行われ、野生動物研究センターの発足記念シンポジウムと京都大学霊長類研究所京都公開講座にも300名程度の聴講者が参加した。

若手研究者養成プログラム及び研究開発コロキウム

海外留学資金

若手研究者の育成及び海外との研究協力の推進を目的として、大学院生が、一定期間、海外の研究機関に在留し、研究を実施できるよう支援するものである。すなわち、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に、「募集人員 20 人（審査適格の者のみ採択）、申請額は 1 件 60 万円以内」として公募を行い、9 人の応募者の中から、厳正な審査により 9 件を採択した。下表に採択された 9 件の内容を示す。

氏名：家島 明彦（教育学研究科 博士課程 3 年）
研究題目： **The Impact of Japanese Pop Culture on American Youth:
Why do American youth love Japanese Anime?**
期間：2008 年 5 月 14 日～24 日および 2009 年 2 月 14 日～28 日
渡航先： **Northeastern Illinois University**（アメリカ合衆国）
交付額： **600 千円**
指導教員： 山田 洋子

氏名：石井 素子（教育学研究科 博士課程 3 年）
研究題目： 在仏日本人留学生についての実証的研究
期間：2008 年 8 月 15 日～2008 年 9 月 4 日
渡航先： **パリ高等師範学校**（フランス）
交付額： **600 千円**
指導教員： 稲垣 恭子

氏名：石橋 遼（教育学研究科 博士課程 2 年）
研究題目： **大脳側頭葉における意味表象を支える機能の探索
—TMS および fMRI を用いて**
期間：2008 年 10 月 7 日～2008 年 12 月 8 日
渡航先： **マンチェスター大学**（イギリス）
交付額： **600 千円**
指導教員： 齊藤 智

氏名：尾崎 真奈美（人間・環境学研究科 博士課程 2 年）
研究題目： **Spiritual Health Education:
Restoration of Connectedness with Others, with Nature,
and/or with the Transcendent**
期間：2008 年 8 月 15 日～2008 年 9 月 30 日
渡航先： **The Center for Spiritual Development in Childhood and Adolescence,
Search Institute**（アメリカ合衆国）
交付額： **550 千円**
指導教員： **カール・ベッカー**

氏名：中嶋 智史（教育学研究科 博士課程 2 年）
研究題目： 表情認知における情動的概念の影響についての研究
期間：2008 年 9 月 25 日～2008 年 10 月 24 日
渡航先： **ボストンカレッジ**（アメリカ合衆国）
交付額： **600 千円**
指導教員： 吉川 左紀子

氏名：馬場 智子（教育学研究科 博士課程 1 年）
研究題目： **タイ仏教教育における共生の理念・政策・実践的特質に関する研究
—人権に関する教育と宗教教育の接点から**
期間：2008 年 9 月 11 日～10 月 6 日および 2009 年 2 月 9 日～21 日
渡航先： **ナレスウェン大学**（タイ）
交付額： **600 千円**
指導教員： 杉本 均

氏名：森本 陽（文学研究科 博士課程 2 年）
研究題目： **フサオマキザルの音声と同種他個体に与える情動的な影響の検討**

期間：2008年12月16日～2009年2月27日
渡航先： ブラジル・サンパウロ州アシス原生林（ブラジル）
交付額： 600千円
指導教員： 藤田 和生

氏名：ユン・スアン（教育学研究科 博士課程3年）
研究題目： 植民地朝鮮における英語教育と京城帝国大学
－朝鮮人英文学者崔載瑞を中心に

期間：2008年5月6日～2009年2月28日
渡航先： ソウル大学（大韓民国）
交付額： 597千円
指導教員： 駒込 武

氏名：李 霞（教育学研究科 博士課程2年）
研究題目： 中国における児童生徒の主体性尊重に関する研究
－理論と実践に焦点をあてて

期間：2008年5月12日～2009年7月11日
渡航先： 北京師範大学（中国）
交付額： 600千円
指導教員： 杉本 均

院生養成プログラム

院生養成プログラムは、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」の研究プロジェクトに関連する優れた研究計画に対し、科学研究費に準ずる形式で大学院生の個別研究プロジェクトを支援するものである。すなわち、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に「募集人員 20 人程度、申請額は 1 件 30 万円以内または 50 万円以内(国際学会発表を含む場合)」として公募を行い、30 人の応募者の中から、厳正な審査により 20 件を採択した。下表に採択された 20 件の内容を示す。

平成 20 年度大学院養成プログラム研究発表会は、2009 年 3 月 27 日(金) 京都大学教育学部第 1 講義室および第 2 講義室において実施された。

氏名	所属部局	学年	指導教員	交付額(千円)
李 基原	教育研究科 研究テーマ 「東アジア思想史における徂徠学『インパクト』に関する研究 －日朝儒学交流史を軸にして－」	博士 3 年	辻本 雅史	300
梅村 高太郎	教育学研究科 研究テーマ 「夢における動きについての心理臨床学的研究」	博士 3 年	河合 俊雄	300
大家 聡樹	教育学研究科 研究テーマ 「超越について」	博士 3 年	桑原 知子	300
黒田 真由美	教育学研究科 研究テーマ 「小学生の英語の学びとことば使い分けの分析 －日本語発話と英語発話の使い分けに注目して－」	博士 3 年	山田 洋子	450
近藤 あき	人間・環境学研究科 研究テーマ 「色の見えに及ぼす認知的状況の効果に関する研究」	博士 2 年	齋木 潤	450
齋藤 桂	教育学研究科 研究テーマ 「言語マイノリティの子どもにたいする教育における公正性と適切性の研究」	博士 2 年	杉本 均	450
高岡 祥子	文学研究科 研究テーマ 「イヌにおけるヒトの感情理解に関する実験的研究と、イヌにおけるヒトの社会的ジェスチャー理解に関する日本における再検討」	博士 1 年	藤田 和生	450
田中 暁生	人間・環境学研究科 研究テーマ 「メタ記憶に関与する神経機構の神経生理学的研究」	博士 1 年	船橋 新太郎	450
田中 史子	教育学研究科 研究テーマ 「物語がどのように生み出され、体験され、表現されているのかに関する研究」	博士 3 年	角野 善宏	300
田村 綾菜	教育学研究科 研究テーマ 「対人葛藤場面における児童の謝罪表出過程の検討」	博士 2 年	子安 増生	450
照屋 信治	教育学研究科 研究テーマ 「近代沖縄教育史の基礎的研究 －沖縄教育会機関誌『琉球教育』『沖縄教育』の整理と分析－」	博士 2 年	駒込 武	300
東畑 開人	教育学研究科 研究テーマ 「心理臨床における美の問題－「生きる主体」という観点から－」	博士 2 年	皆藤 章	300
西嶋 雅樹	教育学研究科 研究テーマ 「心理臨床面接におけるセラピストの関与について」	博士 3 年	角野 善宏	300

野口 寿一	教育学研究科	博士3年	河合 俊雄	300
研究テーマ「TAT 第2物語法に関する研究」				
原田 宗忠	教育学研究科	博士3年	伊藤 良子	300
研究テーマ「自尊感情の変動性に関する臨床心理学的研究」				
松吉 大輔	文学研究科	博士3年	苧阪 直行	450
研究テーマ「視覚的ワーキングメモリ容量の個人差と注意制御の効率性に関する認知神経科学的研究」				
山崎 貴子	教育学研究科	博士1年	稲垣 恭子	300
研究テーマ「戦前期日本の大衆婦人雑誌にみる「職業婦人」の魅力と欲望 －職業婦人イメージの変容と就業インセンティブ形成のメカニズム－」				
森田 健一	教育学研究科	博士2年	桑原 知子	300
研究テーマ「記憶という体験に関する研究」				
森本 洋介	教育学研究科	博士3年	杉本 均	300
研究テーマ「メディア・リテラシー教育での子どもの評価：真正の評価の観点から」				
渡辺 創太	文学研究科	博士2年	藤田 和生	300
研究テーマ「ヒトとハトにおける外界認識－分析対象を多次元に拡張して」				

研究開発コロキアム

研究開発コロキアムとは、大学院生の学術研究活動の発展を図るため、本プログラムに関連する優れた研究計画に対し、科学研究費に準ずる形式でその研究の一部を助成するものである。採択された研究プロジェクトは、原則として、本プログラムの関係諸委員会と調整のうえ、新たに設置される大学院科目「研究開発コロキアム」として編成され、授業時間割に組み込まれた。すなわち、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に「募集人員 10 件程度、申請額は 1 件 50 万円以内」として公募を行い、15 件の応募の中から、厳正な審査により 15 件を採択した。下表に採択された 15 件の内容を示す。

<p>研究代表者： 前原 由喜夫（教育学研究科 博士課程 3 年） 研究分担者： 龍輪 飛鳥 研究題目： 協同課題の解決における前頭葉機能に関する研究 一人のこころを思うとき・機械のこころに出会うとき－ 交付額： 500 千円 指導教員： 齋藤 智</p>
<p>研究代表者： 勝浦 眞仁（人間・環境学研究科 博士課程 3 年） 研究分担者： 山崎 徳子、藤井 真樹 研究題目： 関与の「質」、記述の「質」、理論の「質」を問う 一事象のアクチュアリティに迫る質的研究を目指して－ 交付額： 370 千円 指導教員： 岡田 敬司</p>
<p>研究代表者： 廣瀬 智士（人間・環境学研究科 博士課程 2 年） 研究分担者： 山城 博幸 研究題目： 他者意図理解における視覚意識の役割 交付額： 500 千円 指導教員： 松村 道一</p>
<p>研究代表者： 鮫島 輝美（人間・環境学研究科 博士課程 1 年） 研究分担者： 竹内 みちる、西山 直子 研究題目： 介護における「負担」観から新たな価値観の創造にむけて 一 家族による看取りの語りから学ぶ－ 交付額： 500 千円 指導教員： 杉万 俊夫</p>
<p>研究代表者： 小宮 あすか（教育学研究科 博士課程 1 年） 研究分担者： 上田 祥行、嶺本 和沙、坂野 逸紀、陳 蕾 研究題目： 注意の制御スタイルに文化が及ぼす影響 一 実験心理学的アプローチを用いて－ 交付額： 500 千円 指導教員： 楠見 孝</p>
<p>研究代表者： 本島 優子（教育学研究科 博士課程 3 年） 研究分担者： 川崎 裕美、大槻 綾 研究題目： 家族と子どもの社会情緒的発達 一 縦断的デザインによる検討－ 交付額： 430 千円 指導教員： 明和 政子</p>
<p>研究代表者： 桐村 豪文（教育学研究科 博士課程 1 年） 研究分担者： 三宅 浩子、近藤 千寿枝、江上 直樹、脇 奈七 研究題目： 実践を支える教育行財政制度の可能性と限界 交付額： 440 千円 指導教員： 高見 茂</p>
<p>研究代表者： 樋浦 郷子（教育学研究科 博士課程 2 年） 研究分担者： 山本 和行 研究題目： 近代ナショナリズムをめぐる理論的思索と実証的研究 一 日本の植民地統治を中心に－ 交付額： 498 千円 指導教員： 駒込 武</p>

<p>研究代表者： 中村 哲之（文学研究科 博士課程 3年） 研究分担者： 森本 陽、渡辺 創太、高岡 祥子、溝川 藍、鹿子木 康弘、瀧本 彩加、別役 透、蓬萊 佑香 研究題目： 遊び行動と認知的機能の関係性についての比較認知科学的・比較認知発達科学的研究 交付額： 450 千円 指導教員： 藤田 和生</p>
<p>研究代表者： 赤上 裕幸（教育学研究科 博士課程 1年） 研究分担者： 長崎 励郎、久野 和子、John Person 研究題目： 情報化社会における文化政策とメディア教育 交付額： 440 千円 指導教員： 佐藤 卓己</p>
<p>研究代表者： 荘島 幸子（教育学研究科 博士課程 3年） 研究分担者： 竹家 一美、鮫島 輝美、西山 直子 研究題目： 関係性(家族間・世代間)としての生涯発達 －ナラティブ・アプローチからその変化プロセスを捉える－ 交付額： 500 千円 指導教員： 山田 洋子</p>
<p>研究代表者： 春木 奈美子（教育学研究科 博士課程 1年） 研究分担者： 熊谷 哲哉、河野 一紀、田多井 俊喜、谷垣 紀子、マレア・コリア、平井 久世 研究題目： 〈告白〉の現代 交付額： 500 千円 指導教員： 河合 俊雄</p>
<p>研究代表者： 菊澤 聖子（教育学研究科 博士課程 2年） 研究分担者： 高橋 洋一、須賀 みな子 研究題目： 教育における「幸福」をめぐる語りの創出にかかわる萌芽的研究 交付額： 500 千円 指導教員： 鈴木 晶子</p>
<p>研究代表者： 高橋 洋一（教育学研究科 博士課程 2年） 研究分担者： 神戸 尚子、柴原 真知子 研究題目： 医学教育における共感性と他者理解を深める学習についての実践的研究 交付額： 480 千円 指導教員： 鈴木 晶子</p>
<p>研究代表者： 木戸 彩恵（教育学研究科 博士課程 3年） 研究分担者： 家島 明彦、黒田 真由美、東畑 開人、平川 祥子 研究題目： 他者との対話を通して生成される文化のナラティブ －文化・メディア・教育を通じた日常的行為へのアプローチ－ 交付額： 500 千円 指導教員： 山田 洋子</p>

修士論文及び博士論文

平成20年度に各研究科に提出された心理学関係の修士論文および博士論文を記載した。(なおアンダーラインは、拠点形成事業者ならびに研究協力者である。)

修士論文

文学研究科提出分

- 上垣恵一 対称性認識に関する比較認知科学的研究
主査：藤田和生 (文・教授)
副査：苧阪直行 (文・教授)、櫻井芳雄 (文・教授)
- 瀧本彩加 高次感情の進化に関する比較認知科学的研究
—フサオマキザルの「不公平感」「配慮」「感謝」について—
主査：藤田和生 (文・教授)
副査：苧阪直行 (文・教授)、櫻井芳雄 (文・教授)
- 鹿子木康弘 他者の行為における目標の予測
—知覚と行為の発達の関連から—
主査：板倉昭二 (文・准教授)
副査：苧阪直行 (文・教授)、藤田和生 (文・教授)
- 劉波 ニューラルオペラント課題における脳の機能的・構造的変化についての検討
主査：櫻井芳雄 (文・教授)
副査：藤田和生 (文・教授)、蘆田宏 (文・准教授)

教育学研究科提出分

- 生駒佳也 1950年代における同和教育運動の展開と地域社会の関わり
—京都市田中地区を中心に—
主査：前平泰志 (教・教授)
副査：渡邊洋子 (教・准教授)、辻本雅史 (教・教授)
- 井上烈 不登校生の居場所における生徒支援の多様性
主査：稲垣恭子 (教・教授)
副査：岩井八郎 (教・教授)、大山泰宏 (教・准教授)
- 猪原敬介 物語理解における主人公の目標情報の処理
主査：楠見孝 (教・教授)
副査：齊藤智 (教・准教授)、大塚雄作 (高等教育・教授)
- 大槻綾 言語環境下にある幼児の言語特有的な自己理解
主査：明和政子 (教・准教授)
副査：山田洋子 (教・教授)、子安増生 (教・教授)
- 岡田丈祐 大卒労働市場の変動と高等教育政策
—構造変動と政策理念の乖離について—
主査：岩井八郎 (教・教授)
副査：稲垣恭子 (教・教授)、南部広孝 (教・准教授)
- 唐牛祐輔 ジェンダーステレオタイプに他者視線が及ぼす効果
主査：楠見孝 (教・教授)
副査：齊藤智 (教・准教授)、明和政子 (教・准教授)
- 神戸尚子 俳優の演技スキルと多次元共感性の関連性
主査：子安増生 (教・教授)
副査：吉川左紀子 (こころの未来・教授)、山田洋子 (教・教授)
- 近藤千寿枝 スクールカウンセラー事業の展望と課題
—政策形成過程分析からの考察—
主査：高見茂 (教・教授)
副査：田中耕治 (教・教授)、鈴木晶子 (教・教授)
- 柴原真知子 19世紀イギリス社会における「女性の職業」支援の論理と実践的取り組み
—初期フェミニズム誌 English Woman's Journal にみる言説から—
主査：渡邊洋子 (教・准教授)

- 副査：前平泰志（教・教授）、稲垣恭子（教・教授）
 田中哲平 ワーキングメモリ課題遂行時の検索過程の解明：
 リーディングピリオド課題を用いた検討
 主査：齊藤智（教・准教授）
 副査：吉川左紀子（こころの未来・教授）、西岡 加名恵（教・准教授）
 田中容子 竹内常一の授業論に関する一考察
 —コミュニケーション能力に焦点をあてて—
 主査：西岡加名恵（教・准教授）
 副査：田中耕治（教・教授）、西平直（教・教授）
 辻 喜代司 橋本義夫と青年教育運動：「ふだん記」運動へのメルクマール
 主査：前平泰志（教・教授）
 副査：渡邊洋子（教・准教授）、西平直（教・教授）
 長崎励朗 労音運動における教養的娯楽の変容 —「啓蒙」から「創造」へ—
 主査：佐藤卓己（教・准教授）
 副査：川崎良孝（教・教授）、稲垣恭子（教・教授）
 西山直子 「母」世代から見た「祖母—母—娘」三代の関係性
 —イメージ画とインタビューを通して—
 主査：山田洋子（教・教授）
 副査：明和政子（教・准教授）、皆藤章（教・教授）
 隼瀬悠里 フィンランドにおけるリサーチ・ベースドの教員養成に関する考察
 主査：杉本均（教・教授）
 副査：南部広孝（教・准教授）、西岡加名恵（教・准教授）
 深見友希乃 三上斎太郎による方言詩教育再考—青森地方文壇との関わりに着目して—
 主査：駒込武（教・准教授）
 副査：辻本雅史（教・教授）、田中耕治（教・教授）
 細尾萌子 フランスのバカロレア試験に関する一考察
 —中等教育修了認定試験としての側面に焦点をあてて—
 主査：田中耕治（教・教授）
 副査：西岡加名恵（教・准教授）、前平泰志（教・教授）
 前橋由紀子 高校英語科教育に求められている英語力と評価の問題
 —コミュニケーション能力に焦点をあてて—
 主査：西岡加名恵（教・准教授）
 副査：田中耕治（教・教授）、大塚雄作（高等教育・教授）
 脇奈七 教員評価の活用に関する一考察
 —教師のインセンティブをもとに—
 主査：高見茂（教・教授）
 副査：杉本均（教・教授）、田中耕治（教・教授）
 黄儒芬 台湾における「中途辍学（不登校）」問題に関する研究
 —政策と実践に焦点をあてて—
 主査：南部広孝（教・准教授）
 副査：杉本均（教・教授）、渡邊洋子（教・准教授）
 趙卿我 韓国における教育評価の現状と課題
 —「遂行評価（performance assessment）」を中心に—
 主査：田中耕治（教・教授）
 副査：西岡加名恵（教・准教授）、杉本均（教・教授）
 葉思騏 メディアとしての漢詩—頼山陽『日本楽府』を中心に—
 主査：辻本雅史（教・教授）
 副査：駒込武（教・准教授）、南部広孝（教・准教授）
 荒木飛鳥 英語教育における異文化理解教育の位置づけに関する一考察
 主査：田中耕治（教・教授）
 副査：西岡加名恵（教・准教授）、高見茂（教・教授）
 大田誠二 中等教育の多様化と自由化に関する研究

- 主査：岩井八郎（教・教授）
副査：稲垣恭子（教・教授）、西岡 加名恵（教・准教授）
- 川崎裕美 乳児期の母子間相互作用にみる情動調律とそれを特徴づける要因の検討
主査：明和政子（教・准教授）
副査：山田洋子（教・教授）、伊藤良子（教・教授）
- 二見隆亮 「生涯スポーツ支援者」としての伴走者の研究
—視覚障害者マラソンを事例として—
主査：渡邊洋子（教・准教授）
副査：前平泰志（教・教授）、角野善宏（教・教授）
- 濱崎裕美 母親ときょうだいの三者間で生じる長子の葛藤についての発達の考察
—葛藤状況下で長子はどのようにふるまうか—
主査：明和 政子（教・准教授）
副査：山田洋子（教・教授）、桑原知子（教・教授）
- 竹川敦子 時枝誠記による読解指導の基礎理論に関する一考察
—文章を読むということ—
主査：田中耕治（教・教授）
副査：西岡加名恵（教・准教授）、楠見孝（教・教授）
- 小林晃子 バウムテストを通じた「自己」に関する研究
—木の気持ちになるという体験を通して—
主査：桑原知子（教・教授）
副査：角野善宏（教・教授）、山田洋子（教・教授）
- 高橋優佳 「造形」における主観的体験の検討—粘土制作を通じて—
主査：伊藤良子（教・教授）
副査：田中康裕（教・准教授）、田中耕治（教・教授）
- 中野江梨子 風景構成法において描き手が枠内の空間に見ているもの
主査：皆藤章（教・教授）
副査：角野善宏（教・教授）、渡邊洋子（教・准教授）
- 中藤信哉 集団における「居心地」と「自分」の関係について
主査：伊藤良子（教・教授）
副査：桑原知子（教・教授）、前平泰志（教・教授）
- 広瀬悠三 カントにおける世界市民性に基づく地理教育
主査：矢野智司（教・教授）
副査：西平直（教・教授）、鈴木晶子（教・教授）
- 森崎志麻 「ひきこもり」に関する一考察
—「ひきこもり」を語る経験者との面接調査過程から見えてきたこと
主査：大山泰宏（教・准教授）
副査：伊藤良子（教・教授）、稲垣恭子（教・教授）
- 谷垣紀子 語りの中の笑いについての研究
—「自分のことで思わず笑ってしまうこと」の語りから—
主査：桑原知子（教・教授）
副査：田中康裕（教・准教授）、稲垣恭子（教・教授）
- 友尻奈緒美 娘からみた母親との差異性と同一性 —母娘関係についての一考察—
主査：伊藤良子（教・教授）
副査：河合俊雄（こころの未来・教授）、岩井八郎（教・教授）
- 松本健三 夢見手の語りを手がかりとした夢の第三者性に関する研究
主査：田中康裕（教・准教授）
副査：大山泰宏（教・准教授）、西平直（教・教授）

人間・環境学研究科提出分

- 伊藤喬範 他者との関わりの中でアイデンティティ形成を営むための効果的な配慮のあり方
主査：岡田敬司（人環・教授）
副査：小山静子（人環・教授）、富田恭彦（人環・教授）

- 今田容康 「ツール」としての「民主的な集団」
—日教組における生活指導観からの一考察—
主査：岡田敬司（人環・教授）
副査：小山静子（人環・教授）、高橋由典（人環・教授）
- 山田あさ子 学校における自治に関する考察—規則と討議を中心に—
主査：岡田敬司（人環・教授）
副査：小山静子（人環・教授）、道簾泰三（人環・教授）
- 玉岡愛 高校家庭科教科書の言説分析と教科再編への試案
—学習者を拘束する権力作用の可視化とそこからの脱却をめざして—
主査：杉万俊夫（人環・教授）
副査：高橋由典（人環・教授）、永田素彦（人環・准教授）
- 宮田薫現 代社会における自然災害の意味と災害救援のあり方
主査：杉万俊夫（人環・教授）
副査：吉田純（人環・教授）、永田素彦（人環・准教授）
- 田中亜以子 快楽の政治学—夫婦という性規範がもたらしたこと
主査：小山静子（人環・教授）
副査：田邊玲子（人環・教授）、高橋義典（人環・教授）
- 久保瑞日 19世紀末フランスにおける「家庭教育」像
—La Famille が描く中間階層家族を中心として—
主査：小山静子（人環・教授）
副査：岡田敬司（人環・教授）、多賀茂（人環・准教授）
- アリボヴァ・カモラ 上田万年の国語思想
—西洋言語学に影響を受けた言語学者としての上田万年—
主査：小山静子（人環・教授）
副査：岡田敬司（人環・教授）、新宮一成（人環・教授）
- 坂野逸紀 シーンの瞬時的カテゴリ認識における上位レベルの優位性に関する研究
主査：齋木潤（人環・教授）
副査：大東祥孝（人環・教授）、船橋新太郎（こころの未来・教授）

こころの未来研究センター提出分

- 奥井遼 「開かれた身体」を求めて—嘉納治五郎と植芝盛平にみる近代身体教育史
主査：Carl Becker（こころの未来・教授）
副査：高橋義人（人環・教授）、岡田敬司（人環・教授）
- 久保田昌子 「見ること」の変容と機械化時代の意識
—「写真」の心理学的考察—
主査：河合俊雄（こころの未来・教授）
副査：伊藤良子（教・教授）、西平直（教・教授）
- 小西佳世 「なぞること」についての一考察～スクイグルを通して～
主査：河合俊雄（こころの未来・教授）
副査：桑原知子（教・教授）、鈴木晶子（教・教授）
- 渡邊潔 線と文字の転移論
主査：河合俊雄（こころの未来・教授）
副査：田中康裕（教・准教授）、佐藤卓巳（教・准教授）
- 布井雅人 好みの形成と変容に処理が及ぼす影響
主査：吉川左紀子（こころの未来・教授）
副査：楠見孝（教・教授）、角野善宏（教・教授）
- 山添愛 情認知に文脈が及ぼす効果—2者の表情の相互作用の検討—
主査：吉川左紀子（こころの未来・教授）
副査：齋藤智（教・准教授）、稲垣恭子（教・教授）
- 竹林美佳 快を表現するニューロンは存在するか
主査：船橋新太郎（こころの未来・教授）
副査：齋木潤（人環・教授）、大東祥孝（人環・教授）

博士論文

文学研究科提出分

課程博士

中村哲之 錯視知覚の進化に関する比較認知科学的研究

主査：藤田和生（文・教授）

副査：板倉昭二（文・准教授）、友永雅己（霊長・准教授）

宮田裕光 思考能力の進化的起源：

ハト・ヒト幼児・kea(ミヤマオウム)を対象とした比較研究

主査：藤田和生（文・教授）

副査：板倉昭二（文・准教授）、田中正之（野生・准教授）

服部裕子 「思いやり」の起源—霊長類における協力行動の実験的分析—

主査：藤田和生（文・教授）

副査：友永雅己（文・教授）、板倉昭二（文・准教授）

教育学研究科提出分

課程博士

渡部みさ 心理臨床の〈場〉に関する研究—主に教育機関における実践から—

主査：皆藤章（教・教授）

副査：桑原知子（教・教授）、角野善宏（教・教授）

川部哲也 既視体験に関する心理臨床学的研究

主査：河合俊雄（こころの未来・教授）

副査：伊藤良子（教・教授）、角野善宏（教・教授）

石井英真 現代アメリカにおける教育目標・評価論に関する研究—タキノミー研究の展開—

主査：田中耕治（教・教授）

副査：西岡加名恵（教・准教授）、松下佳代（高等教育・教授）

須藤春佳 前青年期の親友関係“chumpship”に関する心理臨床学的研究

主査：伊藤良子（教・教授）

副査：河合俊雄（こころの未来・教授）、角野善宏（教・教授）

久保田美法 「老い」に聴く心理臨床学的探求

主査：皆藤章（教・教授）

副査：田中康裕（教・准教授）、矢野智司（教・教授）

荘島幸子 「望む性」を生きる自己と家族

—ある性同一性障害者とその家族へのナラティブアプローチ

主査：山田洋子（教・教授）

副査：明和政子（教・准教授）、桑原知子（教・教授）

田中優子 批判的思考プロセスにおける目標志向性とメタ認知

主査：楠見孝（教・教授）

副査：子安増生（教・教授）、大塚雄作（高等教育・教授）

川島大輔 死の意味づけへの生涯発達心理学的研究

—老年期における死と宗教へのナラティブ・アプローチ—

主査：山田洋子（教・教授）

副査：明和政子（教・准教授）、西平直（教・教授）

原田宗忠 自尊感情の揺れに関する臨床心理学的研究

主査：伊藤良子（教・教授）

副査：皆藤章（教・教授）、大山泰宏（教・准教授）

勅使河原学 精神分析的な心理療法におけるセラピストの営みについての考察

—エディプス・コンプレックス論を中心に据えて—

主査：伊藤良子（教・教授）

副査：角野善宏（教・教授）、田中康裕（教・准教授）

李基原 徂徠学の再構成とその波紋—東アジア思想史への視野—

主査：辻本雅史（教・教授）
副査：駒込武（教・准教授）、西平直（教・教授）

論文博士

丸島令子 中年期の発達課題とパーソナリティに関する研究—世代性の発達研究—

主査：伊藤良子（教・教授）
副査：田中康裕（教・准教授）、桑原知子（教・教授）

村田翼夫 タイの教育発展に関する実証的研究

主査：高見茂（教・教授）
副査：杉本均（教・教授）、前平泰志（教・教授）

人間・環境学研究科提出分

課程博士

三好正彦 学童保育の多角的研究—児童福祉的側面と人間形成論的側面からの考察

主査：岡田敬司（人環・教授）
副査：小山静子（人環・教授）、杉万俊夫（人環・教授）

中島暢美 ディブリーフィング・ワークの研究

— 看護学生の臨地実習におけるディブリーフィング・ワークの心理教育的意義

主査：岡田敬司（人環・教授）
副査：新宮一成（人環・教授）、杉万俊夫（人環・教授）

業 績

2008年4月～2009年3月の期間の業績（公刊予定のものを含む）を、著書、論文、紀要、総説、科研等報告、翻訳、辞典・事典、書評、講演、受賞歴、社会的貢献などの順に並べた。これは、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」の教員・研究員・院生・ポスドクなど、全構成メンバーのこの一年間の活動記録であり、必ずしもグローバル COE プログラムの補助金による成果だけを収録したものではない。

下線は教員メンバー（教授、准教授、助教、COE 研究員）であることを、*印は査読付雑誌などに掲載されたことを示す。

1. 著書

- 赤沢真世 (2008). 第7章英語科の学力・第8章全国学力テスト (小学校国語) 田中耕治 (編) 新しい学力テストを読み解く 日本標準 pp.151-174,181-184.
- 赤沢真世 (印刷中). 阿原成光と英語教育—人間らしさを尊重した英語教育 田中耕治 (編) 続 時代を拓いた教師たち 日本標準
- 赤沢真世 (印刷中). 英語教育のカリキュラム編成と評価—大阪府河内長野市立天野小学校の実践に対するコメント— 東京学芸大学教員養成カリキュラム研究開発センター (編) (仮) 地域・日本・世界と小学校英語—「小学校英語」実践の取り組みと課題— 東京学芸大学出版会
- Ando, H., & Koyasu, M. (2008). Differences between acting as if one is experiencing pain and acting as if one is pretending to have pain among actors at three expertise levels. Itakura, S., & Fujita, K. (Eds.). *Origins of social mind: Evolutionary and developmental views*. Tokyo: Springer. pp.123-140.
- ベッカー, C. (2008). アメリカの死生観教育—その歴史と意義 島菌進・竹内整一 (編) 死生学とは何か 東京大学出版会 pp. 75-104.
- ベッカー, C. (2008). 北米に於けるデス・エデュケーションとその周辺 得丸定子 (編) いのち教育をひもとく—日本と世界 現代図書 pp. 55-80, 211-224.
- ベッカー, C. (2008). 日本人の死生観—死を迎える時に 町淳二 (編) 美しい日本の医療—グローバルな視点からの再生 金原出版 pp. 47-62.
- ベッカー, C. (2008). 日本の宗教的思想が二十一世紀に貢献するもの 木村武史 (編) サステイナブルな社会を目指して 春風社 pp. 241-256.
- ベッカー, C. (2008). 死の現状 カール・ベッカー (編) 愛する者の死とどう向き合うか—悲嘆の癒し 晃洋書房 pp. 125-158, 241-256.
- ベッカー, C. (2008). 死生観教育の必要性 日本ホスピス・在宅ケア研究会 (編) ひびきあう生と死—未来を拓くスピリチュアルケア 雲母書房 pp. 101-114, 178-182.
- Carvalho, M.K.F. (2008). ブラジルの教育—多様性の国における希望 富野幹雄 (編) グローバル化時代のブラジルの実像と未来 行路社 pp. 163-185.
- Fujita, K., Nakamura, N., Sakai, A., Watanabe, S., & Ushitani, T. (in press). Amodal completion and illusory perception in birds and primates. In Lazareva, O. & Shimizu, T. (Eds.), *How animals see the world: Behavior, biology, and evolution of vision*. Oxford University Press.
- 福田斎 (2009). 遺伝子の変異を持つ「からだ」と「こころ」の分離と、その関係の結び直しについて 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ第8巻 身体の病と心理臨床—遺伝子の次元から考える— 創元社
- 原田宗忠 (印刷中). 査定結果を考慮しながら家族面接を行うということ—もの忘れ外来における実践から— 竹内健児 (編) 心理検査の伝え方、活かし方 金剛出版
- 本所恵 (2009). 科学的リテラシー 西岡加名恵・田中耕治 (編) 「活用する力」を育てる授業と評価 中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの可能性 (仮) 学事出版, 73
- 細野晴臣・鎌田東二 (2008). 神楽感覚 作品社 pp.1-268
- 家島明彦 (2008). マンガの影響と自己形成 榎本博明 (編) 自己心理学2 生涯発達心理学へのアプローチ 金子書房 pp. 204-205
- 伊村知子・友永雅己 (2008). 視覚の系統発生：ヒト以外の霊長類の知覚発達との比較から 山口真美・金沢創 (編) 知覚・認知の発達心理学入門 北大路書房 pp.99-112.
- 板倉昭二 (2008). 私という意識の発生—自己意識の発達レベル 仲真紀子 (編) 自己心理学4 認知心

- 理学へのアプローチ 金子書房 pp.65-84.
- Itakura, S., & Fujita, K. (Eds.) (2008). *Origins of the social mind: Evolutionary and developmental views*. Tokyo, Springer Verlag
- Itakura, S., Okanda, M., & Moriguchi, Y. (2008) . *Discovering mind: development of mentalizing in human children*. In: S. Itakura & K. Fujita (Eds.) . *Origins of social mind: Evolutionary and developmental View*. Springer. pp179-198.
- 伊藤良子 (2008). こころの様態と心理療法、全体討論：こころの未来と心理療法 河合俊雄 (編) こころにおける身体 身体におけるこころ 日本評論社 pp.128-135,139-157.
- 伊藤良子 (編著) (2009). 心身論再考—心と身体・遺伝と環境・偶然と必然—伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 8 身体の病と心理臨床 遺伝子の次元から考える 創元社 pp.11-20
- 伊藤良子 (編著) (2009). 人間はみな発達障害 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 7 「発達障害」と心理臨床 創元社 pp.15-27.
- 伊藤良子 (編著) (2009). 臨床心理学：全体的存在として人間を理解する、いちばんはじめに読む心理学の本 1 ミネルヴァ書房 pp. i - ii, 1-8
- 角野善宏 (編) (2009). おわりに 京大心理臨床シリーズ 7 「発達障害」と心理臨床 創元社 pp.451-453.
- 鎌田東二 (2008). 聖地感覚 角川学芸出版 pp.1-246.
- 皆藤章 (2008). 風景構成法 小川俊樹 (編) 現代のエスプリ別冊 投影法の現在 至文堂 pp.152-163.
- 河合俊雄 (2008). 心理療法と超越性の弁証法 横山博 (編) 心理療法と超越性 新曜社 pp.103-125.
- 河合俊雄 (2008). 内分泌専門病院における心理療法と研究：症状から人へ 河合俊雄 (編) こころにおける身体/身体におけるこころ 日本評論社 pp.99-121.
- 河合俊雄 (2009). いまなぜ日本人は聖地を訪れるのか？ いちどは行ってみたい日本の聖地 洋泉社 pp.94-94.
- 河合俊雄・鎌田東二 (2008). 京都「癒しの道」案内 朝日新聞出版 (朝日新書) pp.1-212.
- 河崎美保 (2008). 疑問点を考えながら解法の発表を聴くことの効果. 赤井悟 (監修)・大阪府寝屋川市立田井小学校研修委員会 (編著) 高い学力を育む授業研究 三学出版 pp. 213-217.
- 河崎美保 (2009). 「アイデンティティ形成としての学び」への転換 東北大学高等教育開発推進センター (編) 大学における「学びの転換」と言語・思考・表現 東北大学出版会 pp. 98-104.
- 木村裕 (2008). 「外国語科のカリキュラム」、「保健体育科のカリキュラム」、「環境教育のカリキュラム」、「国際理解教育のカリキュラム」、「市民性教育のカリキュラム」 田中耕治 (編著) よくわかる教育課程 (仮) ミネルヴァ書房
- 木村裕 (2008). 社会科の学力と思考力・判断力—問題分析を通してみえてくる学力実態 田中耕治 (編著) 新しい学力テストを読み解く—PISA/TIMSS/全国学力・学習状況調査/教育課程実施状況調査の分析とその課題 日本標準 pp.67-93.
- 駒込 武 (2008). 台湾における未完の脱植民地化 金富子・中野敏男 (編) 歴史と責任 青弓社 pp.152-162.
- 고마고매 다케시 (駒込 武) (2008). 식민지제국 일본의 문화통합 (植民地帝国日本の文化統合) 역사비평사 (歴史批評社) pp. 1-540.
- 小山静子 (2008). 短期大学の女子教育機関化 香川せつ子・河村貞枝 (編) 女性と高等教育 昭和堂 pp.310-336.
- 小山静子 (2008). 高学歴女性にとっての学校 小山静子・太田素子 (編) 「育つ・学ぶ」の社会史 藤原書店 pp.135-178.
- 小山静子 (2008). 「育つ・学ぶ」の社会史に向けて 小山静子・太田素子 (編) 「育つ・学ぶ」の社会史 藤原書店 pp.7-23.
- 子安増生 (2009). 序にかえて 学会連合資格「臨床発達心理士」認定運営機構 (編) 臨床発達心理士 わかりやすい資格案内 [第2版] 金子書房 pp.
- 子安増生 (2009). 先の手を読む—思考・問題解決・推理 繁樹算男・丹野義彦 (編著) 心理学の謎を解く—初めての心理学講義 医学出版 pp.73-96.
- 子安増生・二宮克美 (編) (2008). キーワードコレクション[項目 21, 22 担当] 心理学フロンティア 新

曜社

- 久代恵介 (印刷中). Velocity Storage Integrator. 内野善生・古屋信彦 (編) 日常臨床に役立つめまいと平衡障害 金原出版
- Kusumi, T. (2009). Structural equation modeling of risk avoidance in everyday life. In K. Shigemasu, A. Okada, T. Imaizumi, and T. Hoshino (Eds.) *New Trends in Psychometrics*, pp.491-500. Universal Academic Press.
- 楠見 孝 (2009). 暗黙知：経験による知恵とは何か 小口孝司・楠見 孝・今井芳昭 (編) 仕事のスキル 北大路書房 pp.6-20.
- 楠見 孝・上市秀雄 (2009). 人は健康リスクをどのようにみているか 吉川肇子 (編) 健康リスクコミュニケーションの手引き ナカニシヤ出版 pp.96-115.
- 前平泰志 (2008). 〈ローカルな知〉の可能性 日本社会教育学会 (編) 〈ローカルな知〉の可能性—もうひとつの生涯教育を求めて 東洋館出版社 pp. 9-23.
- 松下佳代 (2008). 声とリテラシー—PISA型学力をこえて— 寺岸和光 (著)、松下良平・松下佳代 (解説) 「かわりの力」で学級が変わる—対話する学びが育てるもの— 三学出版 pp. 177-184.
- 松下佳代 (印刷中). 能力と幸福、そして幸福感 子安増生 (編) 心が活きる教育—リスク社会と幸福感— ナカニシヤ出版
- 溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学—他者の森をかけ抜けて自己になる— 世界思想社
- 溝上慎一 (2008). 青年期における同一化形成と関係性 (財) 大学コンソーシアム京都 プラザカレッジ 21世紀学講座 絆—喪失から再生、そして新生へ— 京都アカデミア叢書 4 pp.85-109.
- Moisés Kirk de Carvalho Filho・楠見 孝 (2009). メタ記憶と社会・文化 清水寛之 (編) メタ記憶：記憶のモニタリングとコントロール 北大路書房 pp.137-152.
- 森田健一 (印刷中) 指圧にみる心理臨床 京大心理臨床シリーズ 9 心理臨床における関係性と身体
- 森田健一 (2009). タイムスリップ現象という根源的体験 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 7 「発達障害」と心理臨床 p.208.
- 明和政子 (2009). 霊長類の新生児模倣 開一夫・長谷川寿一 (編) ソーシャルブレインズ 自己と他者を認知する脳 東京大学出版会 pp.67-68.
- 明和政子 (印刷中). 紙上討論 心の発達と進化 児童心理学の進歩 金子書房
- 明和政子 (印刷中). 人間らしい遊びとは?—遊びから探る人間の心の発達と進化 亀井伸孝 (編) 遊びの人類学 昭和堂
- Myowa-Yamakoshi, M. (in press). Early social cognition in chimpanzees (Pan troglodytes) In: Suddendorf, E., Ross, S. Matsuzawa, T (Eds.) *The Mind of Chimpanzee*. Chicago University Press.
- Myowa-Yamakoshi, M. & Tomonaga, M. (in press). Imitating and understanding the actions of others in humans and chimpanzees— Evolutionary origins of social communication. In: Gunnar, M & de Haan, M. (Eds.) *Handbook of Developmental Social Neuroscience*. Guilford Press.
- 中藤信哉 (2009). 発達障害児と居場所としての集団 伊藤良子・角野善弘・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 7 「発達障害」と心理臨床 創元社 p.210.
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 (2008). 家族心理学 有斐閣 pp1-36,37,193-212,231-247.
- 中井由佳子 (2009). 発達課題を抱える青年期女性との面接過程 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) 「発達障害」と心理臨床 創元社 pp.163-173.
- 南部広孝 (2008). 労働条件 有本章 (編) 変貌する日本の大学教授職 玉川大学出版部 pp. 183-197.
- Naoko Saito (2008). “Pragmatism, Tragedy, and Hope: Dewey Growth and Emersonian Perfectionist Education,” in *Pragmatism, Education, and Children: International Philosophical Perspectives*, edited by Michael Taylor, Helmut Schreier and Paulo Ghiraldelli, Jr. (New York: Rodpo NY) : 75-95.
- 西田麻衣子 (2009). アスペルガー症候群の疑いを指摘され来談した5歳女兒とのプレイセラピー 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 7 「発達障害」と心理臨床 創元社 pp.103-111.
- 西田麻衣子 (2009). 遺伝情報がもたらすつながりとへだたり 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京

- 大心理臨床シリーズ 8 身体の病と心理臨床 遺伝子の次元から考える 創元社 p.376.
- 西岡加名恵 (2008). 総合的学習の時間の研究と実践の動向 日本教育方法学会 (編) 現代カリキュラム研究と教育方法学 (教育方法 37) 図書文化 pp.138-145.
- 西岡加名恵 (編) (2008). 「逆向き設計」で確かな学力を保障する 明治図書
- 野口寿一 (2009). 小児科への入院をめぐる心と身体 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ第8巻 身体の病と心理臨床 創元社 pp.134.
- 布柴靖枝 (2008). 嫉妬心を助長する親 児童心理 No.878 金子書房 pp.82-86.
- 岡田敬司 (2009). 人間形成にとって共同体とは何か ミネルヴァ書房 pp.1-231.
- 大家聡樹 (2008). 臨床イメージからみた〈超越〉—「自分を越えた何か」の体験の語りを手がかりに 藤原勝紀・皆藤章・田中康裕 (編) 京都大学心理臨床シリーズ 6 心理臨床における臨床イメージ体験 創元社 pp.60-68.
- 大家聡樹・田中史子・清水亜紀子・築山裕子・西田麻衣子・佐々木麻子 (2009). 糖尿病患者への心理的アプローチの概観—糖尿病における心理臨床的視点の可能性 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 8 身体の病と心理臨床—遺伝子の次元から考える 創元社 pp.92-102.
- 大山泰宏 (2008). 臨床心理学はどのようにして生まれたか? 伊藤良子 (編著) 臨床心理学—全体的存在として人間を理解する ミネルヴァ書房 pp.19-38.
- 大山泰宏 (2009). (新版) 人格心理学 放送大学教育振興会
- 大山泰宏 (2009). おわりに 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 8 身体の病と心理臨床 遺伝子の次元から考える 創元社 pp.379-381
- 荳阪直行 (編著) (2008). ワーキングメモリの脳内表現 京都大学学術出版会
- Saiki, J. (2008). Multiple object permanence tracking: Maintenance, retrieval, and transformation of dynamic object representations. (pp. 243-264) In C. Rossi (Ed.) Brain, Vision, and AI. In-Teh.
- 齋木 潤 (2008). 視覚性ワーキングメモリ、チェンジブラインドネス (分担執筆) 子安増生・二宮克美 (編) キーワードコレクション 心理学フロンティア 新曜社 pp.10-17.
- 齋木 潤 (印刷中). 心が活きる実験心理学. 子安増生 (編) 心が活きる教育 ナカニシヤ出版
- Saiki, J., Koike, T., & DeBrecht, M. (2008). Saliency map models for stimulus-driven mechanisms in visual search: Neural and functional accounts. (pp. 527-530) . In R. Wang, F. Gu, & E. Shen (Eds.) Advances in Cognitive Neurodynamics. Springer-Verlag.
- 齋藤直子 (2008). 科学の客観性・技術の普遍性: プラグマティズム、懐疑主義、悲劇の感覚 飯田隆ほか (編) 岩波講座 哲学 第9巻 岩波書店 pp.133-154.
- 齋藤直子 (2009). <内なる光>と教育—プラグマティズムの再構築 法政大学出版局
- 笹倉尚子 (2009). 大学病院精神科での発達障害検査について—心理臨床家による検査施行の意義 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 7 「発達障害」と心理臨床 創元社 pp.392-399.
- 佐々木麻子 (2009). 家族の老いと遺伝—映画に描かれた親子を題材として 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 8 身体の病と心理臨床 遺伝子の次元から考える 創元社 pp. 377.
- 佐藤卓己 (2008). 《放送=通信》教育の時代: 国防教育国家から生涯教育社会へ 佐藤卓己・井上義和 (編) ラーニング・アロン: 通信教育のメディア学 新曜社 pp. 69-104.
- 佐藤卓己 (2008). テレビ的教養: 一億総博知化の系譜 NTT 出版
- 佐藤卓己 (2008). 輿論と世論: 日本的民意の系譜学 新潮選書
- 佐藤卓己 (2008). 8月15日のメディア神話 川島真・貴志俊彦 (編) 資料で読む世界の8月15日 山川出版社 pp.7-18.
- 佐藤卓己 (2008). キャッスル事件をめぐる<怪情報>ネットワーク 猪木武徳 (編) 戦間期日本の社会集団とネットワーク NTT 出版 pp.111-135.
- 佐藤卓己 (2008). 放送教育の時代—もうひとつの放送文化史 NHK 放送文化研究所 (編) 現代社会とメディア・家族・世代 新曜社 pp.253-276.
- Sato, W. (2008). The information processing role of the amygdala in emotion. In: Jimmy, O. (Ed.) "Affective computing: Emotion modelling, synthesis and recognition." I-Tech Education and

- Publishing, Vienna, Austria, pp.297-308.
- 佐藤弥・魚野翔太・十一元三 (印刷中). 広汎性発達障害の神経基盤 須田治 (編) 子どもへの発達支援のエッセンス 2: 情動的な人間関係の問題への対応 金子書房
- 清家 理 (2008). 【領域: 医療福祉】急性期病院からの重度障害残存患者の在宅調整事例 —なんでできへんの?! 食事もトイレも介助は知らん! 家もよう探ささん!— 浅野仁 (監修) 福祉実践の未来を拓く 中央法規 pp.83-85
- 清水亜紀子 (2008). 「体験の語り」においてイメージが果たす機能—「自我体験の語り」に現われるイメージを素材にして— 藤原勝紀・皆藤章・田中康裕 (編) 京大心理臨床シリーズ 6 心理臨床における臨床イメージ体験 創元社 pp.99-109.
- 清水亜紀子 (2009). 「不如意」を生きる主体に関する一試論—筋ジストロフィーという「病い」を生きる主体を手がかりに 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 8 身体の病と心理臨床—遺伝子の次元から考える 創元社 pp.120-132.
- 白井述・伊村知子 (2008). 空間視の初期発達 山口真美・金沢創 (編) 知覚・認知の発達心理学入門 北大路書房 pp.57-68.
- 杉万俊夫 (2008). 地域活性化のアクションリサーチ サトウタツヤ・南 博文 (編) 質的心理学講座 3: 社会と場所の経験 東京大学出版会 pp.155-181.
- 杉本均 (2008). 多文化社会における教育的受容と排除 山内乾史 (編著) 教育から職業へのトランジション—若者の職業選択の教育社会学 東信堂 pp.160-177.
- 高橋優佳 (2009). 小学校現場における「発達障害のグレーゾーン」の問題と心理臨床的かかわり 伊藤良子・角野善弘・大山泰宏 (編著) 京大心理臨床シリーズ 7 巻 「発達障害」と心理臨床 創元社 pp.265-272.
- 高見 茂 (2008). 教育法規・政策の基礎を読み解く、教育行財政に関する法制度・政策を読み解く 高見 茂・開沼太郎 (編) 教育法規スタートアップ pp.2-15,242-272.
- 高見 茂 (印刷中). 地方財政危機とリスク管理—教育財務会計制度の整備と展望、教育財政から教育金融へ— 日本教育行政学会研究推進委員会 (編) 教育のガバナンス改革
- 武川正吾・西平 直 (共編) (2008). シリーズ死生学・ライフサイクルと死 東京大学出版会
- 田中耕治 (2008). PISA 型読解力はどのように位置づけられるべきか 日本教育方法学会 (編) 教育方法 37 現代カリキュラム研究と教育方法学—新学習指導要領・PISA 型学力を問う 図書文化 pp.56-68.
- 田中史子 (2009). ぶつかりあう中から生まれてくるもの—ADHD と診断された十一歳男児とのプレイセラピー— 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編著) 京大心理臨床シリーズ 7 「発達障害」と心理臨床 創元社 pp.133-142.
- 田中耕治 (2008). 序章 今日の学力問題の特徴、教育学の課題としての学力問題 田中耕治・井ノ口淳三 (編) 学力を育てる教育学 八千代出版 pp.1-7,9-27.
- 田中耕治 (2008). 第 1 章 学力と評価の新しい考え方—質的に高い学力の保障をめざして—、第 2 章 学力調査の特徴と分析視角—多層的で重層的な分析のために—、第 8 章 「全国学力・学習状況調査」の論点 田中耕治 (編) 新しい学力テストを読み解く—PISA/TIMSS/ 全国学力・学習状況調査/ 教育課程実施状況調査の分析とその課題— 日本標準 pp.13-26,29-39,175-179.
- 田中耕治 (2008). 教育評価 岩波書店全 236 頁
- 田中耕治 (2009). 「関心・意欲・態度」問題としての愛国心通知表 市川昭午 (監・編) 資料で読む戦後日本と愛国心 第 3 巻 停滞と閉塞の時代 1986~2006 日本図書センター pp.446-449.
- 田中耕治・西岡加名恵 (編著) (2008). 「学力向上」実践レポート 教育開発研究所
- 田中耕治・八田幸恵・赤沢真世・徳永俊太・本所恵 (2008). 「全国学力・学習状況調査」の分析—何が、どのように問われているのか 田中耕治 (編) 新しい学力テストを読み解く PISA/TIMSS/ 全国学力・学習状況調査/ 教育課程実施状況調査の分析とその課題 日本標準 pp.175-197.
- 田中康裕 (2008). ユングの「ファルススの夢」—そのイメージ体験と思惟 藤原勝紀・皆藤章・田中康裕 (編) 京大心理臨床シリーズ 6 心理臨床における臨床イメージ体験 創元社 pp. 69-80
- 田中康裕 (2008). 臨床心理実践の専門家になるために必要なことは?: 専門性と訓練 伊藤良子 (編) 臨床心理学 ミネルヴァ書房 pp. 183-200.
- 田中康裕 (2009). 成人の発達障害の心理療法 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シ

- リーズ7 「発達障害」と心理臨床 創元社 pp.184-200.
- 高瀬泉 (2008). DV (domestic violence) 性犯罪 佐藤喜宣 (編著) 臨床法医学テキスト 中外医学社 pp.172-176.
- 高瀬泉 (2008). 法医学からみた身体と遺伝カウンセリング 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編著) 京都大学心理臨床シリーズ8 身体の病と心理臨床 創元社 pp.366-375.
- 高嶋雄介 (2009). アスペルガー症候群の疑いを指摘された小学校低学年の男児とのプレイセラピー 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シリーズ7 「発達障害」と心理臨床創元社 pp.122-132.
- 徳永俊太 (2008). 算数調査:小学校 田中耕治 (編著) 新しい学力テストを読み解く 出版社 pp.191-194.
- 徳永俊太・本所恵 (2008). 算数・数学調査の出題傾向田中耕治 (編著) 新しい学力テストを読み解く 出版社 pp.188-191.
- 東畑開人 (2009). 美的身体と皮膚 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ8 身体の病と心理臨床 遺伝子の次元から考える 創元社 pp.284-293.
- 坪見博之・荳阪直行 (2008). 視覚的注意の脳内表現 荳阪直行 (編) ワーキングメモリの脳内表現 京都大学学術出版会 pp.43-73.
- 土田陽子 (2008). 男の子の多様性を考える 一周辺化されがちな男子生徒の存在に着目して 木村涼子・古久保さくら (編著) ジェンダーで考える教育の現在 -フェミニズム教育学をめざして 解放出版社 pp.62-77.
- 辻河昌登 (印刷中). 関係精神分析の視座からみたところとからだ 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 心理臨床におけるところとからだ 創元社
- 辻河昌登 (2009). 特別支援教育と発達障害 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) 発達障害の心理臨床 創元社 pp.426-434.
- 辻本雅史 (印刷中). 教育史跡 岩淵令治 (編) 史跡日本史 第9巻「近世の都市と文化」吉川弘文館
- 辻本雅史 (印刷中). 近世日本の教育思想と<近代> 今井康雄 (編) 教育思想史 有斐閣
- 内田由紀子 (2009). 文化と心 遠藤由美 (編) 社会心理学—社会で生きる人のいとなみを探る (いちばんはじめに読む心理学の本2) ミネルヴァ書房 pp. 161-180.
- Ueichi, H. & Kusumi, T. (2009). Structural equation modeling of risk avoidance in everyday life. In K. Shigemasu, A. Okada, T. Imaizumi, and T. Hoshino (Eds.) *New Trends in Psychometrics*, pp.491-500. Universal Academic Press.
- やまだようこ (2008). たましいのイメージと循環するいのち 武川正吾・西平直 (編) 死生学3巻 死とライフサイクル 東京大学出版会 pp.175-196.
- やまだようこ (2008). 人生と病いの語り やまだようこ (編) 人生と病いの語り 東京大学出版会. pp.1-14.
- やまだようこ (2008). 喪失を生きるナラティブ「千の風になって」 やまだようこ (編) 人生と病いの語り 東京大学出版会 pp.15-50.
- やまだようこ (編) (2008). 人生と病いの語り 東京大学出版会.
- Yamamoto H., Ban H., Fukunaga M., Umeda M., Tanaka C. and Ejima Y. (2008). Large- and Small-Scale Functional Organization of Visual Field Representation in the Human Visual Cortex. In: Portocello T. A. and Velloti R. B. editors. *Visual Cortex: New Research*. New York: Nova Science Publisher. 195-226.
- 山本尚代 (2008). コラム: イメージとしての身体 藤原勝紀・皆藤章・田中康裕 (編) 京大心理臨床シリーズ6 心理臨床における臨床イメージ体験 創元社 pp.218-219.
- 矢野智司 (2009). 9章 子ども—システムを侵犯する外部としての子ども、13章 悪—悪の体験と自己変容、15章 関係性—教育関係とそれを侵犯する贈与の出来事 田中智志・今井康雄 (編) キーワード現代の教育学 東京大学出版会 pp.112-122,163-172,188-197.
- 矢野智司 (2008). メディア革命を生きる子ども—現実 - 仮想現実関係をめぐって 田中智志 (編) グローバルな学びへ—協同と刷新の教育 東信堂 pp.71-101.
- 矢野智司 (2009). 教育人間学が自己変容する『限界への教育学』という運動—語ることの不可能性と可能性 平野正久 (編) 教育人間学の展開 北樹出版 pp.330-348.
- Yumiko Yamada and Asako Yamada (2008). The personal relations in a school: Bullying and a

teacher's role . Edited by Kazuhito Yoshizaki and Hisao Ohnishi, "Contemporary issues of brain, communication and education in psychology: The science of mind". Union Press pp.261-274.

渡部幹・森本裕子 (2008). 信頼と規範の社会心理学. 藤田友 (編) ソフトロー研究叢書第1巻 ソフトローの基礎理論 有斐閣 pp.43-65.

雅幼滋娜白 (2008). 賽德克族語教育發展與正名運動 郭明正 (編) 賽德克正名運動 東華大學原住民族學院 pp.101-120

2. 論文

*Adachi, I., Kuwahata, H., Fujita, K., Tomonaga, M., & Matsuzawa, T. (2008). Plasticity of ability to form cross-modal representations in infant Japanese macaques. *Developmental Science*, in press. (online first: DOI: 10.1111/j.1467-7687.2008.00780.x)

*Adachi I (in press) Cross-modal representations in primates and dogs: A new framework of recognition of social objects. *Intracognition Studies*

Adams, R.B., Jr., Rule, N., Franklin, R.G., Jr., Wang, E., Stevenson, M.T., Yoshikawa, S., Nomura, M., Sato, W., Kveraga, K., & Ambady, N. (in press). Cross-cultural reading the mind in the eyes. An fMRI investigation. *Journal of Cognitive Neuroscience*.

*Anderson, J. R., Kuroshima, H., Paukner, A. & Fujita, K. (2009). Capuchin monkeys (*Cebus apella*) respond to video images of themselves. *Animal Cognition*, 12, 55-62.

*Anderson, J. R., Hattori, Y., & Fujita, K. Quality before quantity: Rapid learning of reverse-reward contingency by capuchin monkeys (*Cebus apella*). *Journal of Comparative Psychology*, in press.

*Anderson, J. R., Awazu, S., & Fujita, K. Colour vs. quantity as cues in reverse-reward-competent squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*). *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, in press.

*浅田剛正(2008). 描画法におけるセラピストの主體的関与について—風景構成法を用いた関与の多様性の検討から—. *心理臨床学研究*, 26(4), 444-454.

蘆田宏 (2008). fMRI 順応法による動き情報処理の脳内機構の研究. *基礎心理学研究*, 27 (1), 58-62.

馬場智子 (2006)タイにおける宗教の相対化—「仏教原理に基づく学校」を事例に. *アジア教育研究報告*, 第7号, 19-32.

*Carvalho, S., Cunha, E., Sousa, C., & Matsuzawa, T. (2008). Chaînes opératoires and resource-exploitation strategies in chimpanzee (*Pan troglodytes*) nut cracking. *Journal of Human Evolution*, 55, 148-163.

趙卿我 (2008). 韓国内の韓国語教育の研究動向と課題. *関西教育学会年報*, 32,81-85.

渕上皓一朗 (2008) 近世地方藩儒の学問形成と社会参加：龍野藩儒股野玉川の学習日記を対象に、教育史フォーラム、4、印刷中

渕上皓一朗 (2008) 近世地方藩儒の学問形成と読書、*関西教育学会年報*、33、印刷中

藤村友美・佐藤弥・鈴木直人 (2008). 動画および静止画表情に対する顔面筋電図反応—表情の覚醒度が及ぼす影響— . *電子情報通信学会技術研究報告*, 108, 23-28.

*藤田和生 (2008). 「普遍論的アプローチ」と「進化論的アプローチ」は対立軸か？ *動物心理学研究*, 58(1), 91.

*藤田和生・黒島妃香・服部裕子・高橋真・森本陽・瀧本彩加・佐藤義明 フサオマキザルの知性と感情 (Intellectual and affective processes of tufted capuchin monkeys). *霊長類研究*, 印刷中

*Fujita, K. Metamemory in tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*). *Animal Cognition*, in press.

福田斎・伊藤良子・楠見孝・藤田潤・駿地真由美・山本善晴・井上嘉孝・築山裕子・西田麻衣子・松本拓磨 (2008). 大学生の遺伝子診断に関する意思決定と支援ニーズとの関連. *日本遺伝カウンセリング学会誌*, 28(2), 33-41.

福田斎・伊藤良子・楠見孝・藤田潤・駿地真由美・山本喜晴・井上嘉孝・築山裕子・西田麻衣子・松本拓磨 (2008) 遺伝子診断に関する意思決定と支援者のニーズ. *日本遺伝カウンセリング学会誌*, 28(2),33-41.

*福島美和, 久保(川合)南海子, 正高信男 (2008) 学習に困難を伴う子どもの療育プログラムとそれに伴う認知機能・脳機能の変化について *発達障害研究* 30(3), 185-194.

*Grove, P., Ashida, H., Kaneko H., Ono, H. (2008). Interocular transfer of a rotational motion aftereffect as a function of eccentricity. *Perception*, 37 (8), 1152-1159.

- *Hagura, N., Oouchida, Y., Aramaki, Y., Okada, T., Matsumura, M., Sadato, N. and Naito, E., (2009) (Advance Access Publication May 2, 2008). Visuokinesthetic Perception of Hand Movement Is Mediated by Cerebro-Cerebellar Interaction between the Left Cerebellum and Right Parietal Cortex. *Cerebral Cortex January 2009*, 19:176-186.
- 原田宗忠(2008). 青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係. 教育心理学研究, 56, 330-340.
- 原田宗忠・西田麻衣子・山田裕子・国立淳子・杉原百合子・武地一(印刷中). 初期アルツハイマー型の認知症高齢者における不安と自己の側面. 認知症ケア学会誌.
- 春木奈美子(2008). 到達せぬ苦悩??主体の不可能性をめぐって. ラチオ 05 講談社 pp.118-217
- 長谷川イザベル・井岡瑞日・藤田浩美・松岡淑子・中森厚子・小沼静子・松田祐子・小林緑・佐野満里子・日置久子 (2008). ポーヴォワールの時代を生きたフランス女性たち. 女性空間, 25.
- *Hayashi, M., Sekine, S., Tanaka, M., & Takeshita, H. (in print). Copying a model stack of colored blocks by chimpanzees and humans. *Interaction Studies*.
- 日比野愛子・永田素彦 (2008). バイオテクノロジーをめぐるメディア言説の変遷. 科学技術社会論研究, 5, 59-72.
- 平山るみ・楠見孝 (2009). 健康食品の効能とリスク判断に及ぼすサンプルサイズ情報の影響. 日本リスク研究学会誌, 19, 41-46.
- *Hirokawa, J., Bosch, M., Sakata, S., Sakurai, Y. and Yamamori, T. (2008) Functional role of the secondary visual cortex in multisensory facilitation in rats. *Neuroscience*, 153, 1402-1417.
- * Hirose, N., & Osaka, N. (in press). Object substitution masking induced by illusory masks: Evidence for higher object-level locus of interference. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*.
- * 廣瀬信之・苧阪直行 (2008). オブジェクト置き換えマスキングの脳内機構. *心理学評論*, 51, 301-317.
- 樋浦郷子(2008), 朝鮮神宮大祓式への児童生徒動員—「崇敬」と「信仰」のあいだ. 朝鮮史研究会論文集, 46, 215-244.
- 本所恵 (2009). スウェーデンの高校における必修科目の教育目標—数学の全国学力テストの検討を中心に—. *教育方法学研究*, 34, (印刷中)。
- 本所恵 (2009). スウェーデンの高校カリキュラムにおける選択制—「選択の自由」と「希望進路の実現」の関連に焦点をあてて—. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 55, 405-415.
- 細尾萌子(2008). 昭和2年の中学校入学者選抜方法改正時における二つの評価論の位相——栃木県内中学校の昭和3年度入学考査の方針及び人物考査問題の分析を通じて——. 関西教育学会年報, 通巻第32号, 36-40.
- *Ichihara-Takeda, S. and Funahashi, S. (2008) Activity of primate orbitofrontal and dorsolateral prefrontal neurons: effect of reward schedule on task-related activity. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 20: 563-574.
- *池田尊司・苧阪直行 (2008). 視覚的美しさの評価の神経基盤—神経美学的アプローチ—. *心理学評論*, 51, 318-329
- Ikemoto, K., Nishi, K., Kunii, Y., Wada, A., Yang, Q., Takase, I., Nishimura, A., Niwa, SI (2009). A study of monoamine neuronal systems of schizophrenic patients: Using forensic autopsy brains. *Leg Med*, [Epub ahead of print].
- Imura, T., Yamaguchi, M.K., Kanazawa, S., Shirai, N., Otsuka, Y., Tomonaga, M., & Yagi, A. (2008). Infants' sensitivity to shading and line junctions. *Vision Research*, 48, 1420-1426.
- Imura, T., Tomonaga, M., Yamaguchi, M. K., & Yagi, A (2008). Asymmetry in the detection of shapes from shading in infants. *Japanese Psychological Research*, 50, 128-136.
- Imura, T., Shirai, N., Tomonaga, M., Yamaguchi, M. K., & Yagi, A. (in press). Asymmetry on the perception of motion in depth by moving cast shadows. *Journal of Vision*, 8(13), 1-8.
- Imura, T., & Tomonaga, M. (in press). Moving shadows contribute to the corridor illusion in a chimpanzee (Pan troglodytes). *Journal of Comparative Psychology*
- *猪原敬介・堀内 孝・楠見 孝 (2008). 文理解における文脈制約が下位目標・上位目標・因果的前提の推論に及ぼす効果. 認知心理学研究, 5(2), 141-152.
- 石川裕之 (2008). 韓国の対外言語政策における韓国語「世界化」戦略と世宗学堂の設立. 比較教育学研究,

- *Itakura, S., Ishida, H., Kanda, T., Shimada, Y., Ishiguro, H., & Lee, K. (2008). How to build an intentional android: Infants' imitation of a robot's goal-directed actions. *Infancy*, *13*, 519-532.
- *Itakura, S. (2008). Development of mentalizing and communication: From viewpoint of developmental cybernetics and developmental cognitive neuroscience. *IEICE TRANS. COMMUN., E91-B*, 2109-2117.
- *井谷信彦 (2008) 『住まうこと』と世界の奥行き: O. F. ボルノウ「新しい庇護性」再考『教育哲学研究』第98号 pp. 39-57.
- 井谷信彦・宮崎康子・石崎達也・高柳充利・辻敦子(2008). プレゼントが開く未知なる教育: 児童文学や絵本を事例として. 近代教育フォーラム, 17, 167-178.
- 井藤元 (2009) 「シュタイナーのゲーテ『メールヒェン』論—ゲーテ、シラー、シュタイナーの思想的邂逅」、『ホリスティック教育研究』第12号
- *伊藤祐康, 久保(川合)南海子, 正高信男 (2008) 日本人の掛け算九九の実行プロセスについての実験的検討 *認知科学* 15(2), 280-288.
- 伊藤良子 「河合隼雄という巨木」金剛出版『臨床心理学』第8巻第1号、3-7、2008
- 岩井八郎 (2008). 「『失われた10年』と女性のライフコース - 第二次ベビーブーム世代の学歴と職歴を中心に」『教育社会学研究』第80集, 東洋館出版社, pp.61-87.
- 皆藤章 「うつ病合併糖尿病の療養指導とは?」『肥満と糖尿病』第8巻第1号、58-59頁、2009年1月。
- 鎌田東二 「宮沢賢治の作品に見られる<心>」『大法輪』2008年5月号、231-239頁、大法輪閣。
- Kaneda, M., & Osaka, N. (2008). Role of anterior cingulate cortex during semantic coding in verbal working memory. *Neuroscience Letters*, *436*, 57-61.
- 金子勉 「大学ガバナンスの主体の構成原理—ドイツ・モデルの現在—」『日本教育行政学会年報』34, 2008年, 214-217.
- *Kaneko, T., & Tomonaga, M. (2008). Utility of the habituation-dishabituation procedure for comparative cognitive studies of *Callithrix jacchus* and *Aotus* spp.: Preliminary assessments. *Perceptual and Motor Skills*, *106*, 830-832
- *Kano, F., Tanaka, M., & Tomonaga, M. (2008). Enhanced recognition of emotional stimuli in the chimpanzee (*Pan troglodytes*). *Animal Cognition*, *11*, 517-524.
- *唐牛祐輔・楠見 孝. (2009). 潜在的ジェンダーステレオタイプ知識と対人印象判断の関係. *認知心理学研究*, 6(2), 155-164.
- *川合伸幸, 久保(川合)南海子 (2008) ヒトと動物の回顧的推論について *認知科学*, 15(3), 378-391.
- 河合俊雄 (2008) 身体病の心理療法. *心理学ワールド*. 43, 5-8.
- 河合俊雄 (2009). 日本における分析心理学. *ユング心理学研究・日本における分析心理学*. 創元社. 1巻特別号. Pp.118-135.
- 河合俊雄 (2009). もの・内面・接点: 心理療法におけるこころ観を求めて. *もの学雑誌*第3号. Pp.60-70.
- *Kawakami, K., Takai-Kawakami, K., Kawakami, F., Tomonaga, M., Suzuki, M., & Shimizu, Y. (2008). Roots of smile: A preterm neonates' study. *Infant Behavior & Development*, *31*, 518-522.
- 木戸口英樹・齊藤智 (2008). 単語・非単語の音声認知メカニズム —日本語3モーラ単語・非単語を用いた検討—. *日本認知科学会* 第25
- * 木原健・荻阪直行 (印刷中). 注意の瞬きの神経基盤, *心理学評論*.
- * Kihara, K., & Osaka, N. (in press). Early mechanisms of negativity bias: An attentional blink study. *Japanese Psychological Research*.
- 桐村豪文 (2008) 大学間競争に関する言説の限界を考えるための根本的考究『教育行財政論叢』第11号
- 小林伸行(印刷中). <能力>メディアと「有能/無能」コード: ルーマン教育システム論の「一般化問題」, *社会学*

評論, 59(4), 547-62.

小木曾由佳(2009).自己実現論における「関係性」の地平——ユング=ブーバー論争の再検討. ホリスティック教育研究, 日本ホリスティック教育協会, 12, 34-46.

*Kojima, T. & Kusumi, T. (2008). Spatial term apprehension with a reference object's rotation in three-dimensional space. *Cognitive Processing*, 9, 107-119.

Komeda, H., Kawasaki, M., Tsunemi, K., & Kusumi, T. (2009). Differences between estimating protagonists' emotions and evaluating readers' emotions in narrative comprehension. *Cognition & Emotion*, 23, 135-151.

小山静子 (2008). 『愛国婦人』(明治期復刻版) 解説. 柏書房. pp.1-17.

子安増生 (2008). 他者の心を「察する」心の発達. 教育と医学, 56 (9), 837-845.

*Kuramori, M., Iwaki, T., & Kusumi, T. (2009). Emergence of form and function in a visual image combination. *Psychologia: An International Journal of Psychological Sciences*, 52(1), 50-66.

* Kuriki, I., Ashida, H., Murakami, I., Kitaoka, A. Functional brain imaging of the Rotating Snakes illusion by fMRI. *Journal of Vision*, 8 (10):16, 1-10.

栗田季佳・若松昭彦・楠見孝 (2009). 障害者に対する潜在的態度の測定技法-FUMIE テストによる検討 - , 信学技法 IEICE Technical Repo

*Kuroshima, H., Kuwahata, H., & Fujita, K. (2008). Learning from other's mistakes in capuchin monkeys (*Cebus apella*). *Animal Cognition*, 11, 599-609..

* Kushiro, K., Bai, R., Kitajima, N., Sugita-Kitajima, A. and Uchino, Y. (2008). Properties and axonal trajectories of posterior semicircular canal nerve-activated vestibulospinal neurons. *Experimental Brain Research*, 191:257-264.

*楠見 孝・栗山直子・齊藤貴浩・上市秀雄 (2008). 進路意思決定における認知・感情過程：高校から大学への追調査に基づく検討. キャリア教育研究, 26(1), 3-17.

*楠見 孝・米田英嗣・小島隆次 (2008) アバターの感情表出機能によるマルチユーザ仮想空間コミュニケーション・システムの改良. 日本教育工学会論文誌, 31(4), 415.

*Kusumi, T., Komeda, H., & Kojima, T. (2008) . Improvement in Multi-User Communication Systems Using an Avatar's Facial Expression Features. *Educational Technology Research*, 31, 173-183.

楠見 孝 (2009). 認知心理学におけるモデルベースアプローチ. 人工知能学会誌, 24(2), 237-244.

Tomoko KUWABARA・Haruka SUDO・Chihiro HATANAKA・Masaki NISHIJIMA・Kenichi MORITA・Chihiro HASEGAWA・Yasuhiro OYAMA. (2009). A Study on the New Paradigm in Collaborations between Teachers and School Counselors. *Psychologia*, 51(4) (in Press)

黒田真由美. (2008). ALTが行う授業の調整: ALTと子どものコミュニケーションの検討に基づいて. Step Bulletin, vol.20, 179-185.

Maehara, Y. & Saito, S. (in press). The processing-storage relationship in working memory span: From a perspective of a represent

Mattig, R. (2008). Popmusik und Communitas: Eine Fallstudie zum Verhältnis von körperlich-rituellen und medialen Erfahrungen zu Vorstellungen von einer idealen Gesellschaft. *Paragrana*, 17(1), 182-197.

Mattig, R. (2008). Der Zauber der Rock- und Popmusik. Pädagogisch-anthropologische Untersuchungen zum Zusammenhang von Jugend und Ritual (Doctoral dissertation, Freie Universität Berlin).

Matsuno, T., & Tomonaga, M. (2008). Temporal characteristics of visibility in chimpanzees (*Pan troglodytes*) and humans (*Homo sapiens*) assessed using a visual masking paradigm. *Perception*, 37, 1258-1268

Matsuno, T., & Tomonaga, M. (2008). Effects of target connectivity in multiple object tracking by chimpanzees (*Pan troglodytes*). *The Japanese Journal of Psychonomic Science*, 27 (1), 123-124.

- Matsuno, T. & Fujita, K. (in press) A comparative psychophysical approach to visual perception in primates. *Primates*
- 松野響 (2008). 霊長類の視知覚への比較認知科学的アプローチ. *動物心理学研究*, 58(1), 45-50.
- *Matsuzawa T., & McGrew WC (2008). Kinji Imanishi and 60 years of Japanese primatology. *Current Biology* 18(14): 587-591.
- 南尾由紀・辻河昌登・菊間由嘉里・野路知子・月岡万里子 (2009). 知的発達に遅れがある小学生への家庭教師による教育的支援. *学校心理学研究*, 8, (印刷中).
- Miyata, H. & Fujita, K. (2008). Pigeons (*Columba livia*) plan future moves on computerized maze tasks. *Animal Cognition*, 11: 505-516.
- Miyata, H., Itakura, S. & Fujita, K. (in press). Planning in human children (Homo sapiens) assessed by maze problems on the touch screen. *Journal of Comparative Psychology*.
- 三好正彦 (2008). 学童保育 第三の教育の場としての可能性. 関西教育学会年報通巻第 32 号. 136
- *三好正彦 (2008). 障害のある子どもたちにとっての学童保育—社会的インクルージョンに向けた可能性—. 日本社会福祉学会『社会福祉学』49巻4号 (来季2月下旬発刊予定)
- 溝川藍・子安増生 (2008). 児童期における見かけの泣きの理解の発達: 二次的誤信念の理解との関連の検討. *発達心理学研究*, 19, 209-22
- *Möbius, Y., Boesch, C., Koops, K., Matsuzawa, T., & Humle, T. (2008). Cultural differences in army ant predation by West African chimpanzees? A comparative study of microecological variables. *Animal Behaviour*, 76, 37-45.
- 森純一、竹腰千絵 (2008). 「豪州の大学の財務運営」、京都大学アクションプラン 2006-2009、平成 18 年度『海外の大学の財務状況調査と財務戦略施策報告』より, pp.7-9, pp.38-40.
- Moriguchi, Y., Okanda, M., & Itakura, S. (2008) Young children's yes bias: How does it relate to verbal ability, inhibitory control and theory of mind? *First Language*, 28, 431-442.
- Morimoto, Yosuke. (2008). Creating Media Literacy in Japan: Initiatives for New Citizenship. In Drotner, K., Jensen, H. S. and Schroder, K. C (Eds.), *Informal learning and digital media*, London: Cambridge Scholars Publishing. 225-237.
- A, Morimoto., I, Takase., Y, Shimizu., and K, Nishi. (2008) : Assessment of cervical venous blood flow and the craniocervical venus valve using ultrasound sonography. *Legal Medicine*, Sep 26, Epub.
- 森本裕子・渡部幹・楠見孝 (2008). サンクション行動および公正さの認知における信頼の効果: 戒めと報復. *社会心理学研究*, 24(2), 108-119.
- 森田健一 (2008) 主観的体験から捉えたプルースト現象. *日本味と匂学会誌* 15 巻 1 号 pp.53-60.
- *明和政子 (印刷中) 身体マッピング能力の基盤を探る 「ベビーサイエンス」 vol.8
- 永山智之 (2009). 二者関係から三者関係に移行する場面における主観的体験の変容: 大学生同士の対人場面を用いて. *心理臨床学研究*, 26(6), 741-747.
- Nagaoka, C., & Komori, M., "Body movement synchrony in psychotherapeutic counseling: a study using the video-based quantification method," *IEICE Transactions*, 2008, E91-D(6), 1634-1640.
- 永田素彦・日比野愛子 (2008) バイオテクノロジー受容の規定因: 意識調査に基づく日英独仏比較. *科学技術社会論研究*, 5, 73-82.
- *永田素彦・吉岡崇仁・大川智船 (印刷中). 流域環境の多様な属性に対する住民の選好評価のためのシナリオアンケート手法の開発. *実験社会心理学研究*
- 中井由佳子 (2009). 母親とのつながりを求め、両親をつなごうとする思春期女性との面接. *京都女子大学大学院こころの相談室心理臨床研究* 4, p 65~78
- Nakamura, N., Watanabe, S., & Fujita, K. (2008). Pigeons perceive the Ebbinghaus-Titchener circles as an assimilation illusion. *Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes*, 34, 375-387.
- 中村哲之 (2008). 領域間共通モデルの意義についての考察 (Discussion on the significance of cross-domain models). *動物心理学研究*, 58, 91-92.
- Nakamura, N., Watanabe, S., & Fujita, K. (in press). Further analysis of perception of reversed

Muller-Lyer figures for pigeons (*Columba livia*). *Perceptual and Motor Skills*.

- 中村夕衣(2008) 近代性の危機とグレート・ボックス論 —レオ・シュトラウスからアラン・ブルームへ—、教育哲学研究、98, 1-19.
- *中西美貴 (2008). 日本統治下の北部台湾における先住民女性と和服—タイヤル族を中心に. 女性学年報, 29, 25-44.
- *Nakao, H. & Itakura, S. (2008). An integrated view of empathy: Psychology, philosophy, and neuroscience. *Integrative Psychological & Behavioral Science*. 10, 1007-1012.
- *Nanbu, H. (2008). Religion in Chinese education: from denial to cooperation. *British Journal of Religious Education*, Vol. 30, No. 3, 223-234. (translated by Stephen G. Covell)
- 西平直(2008)「ライフサイクルの二重性 逆説・反転・循環」、武川正吾・西平直(2008)『シリーズ死生学・ライフサイクルと死』(東京大学出版会、2008)133-152頁
- 西平直「精神分析の影響」というトリック—教育との接続という問いの立て方をめぐって『近代教育フォーラム』第17号、2008年、63-72頁
- 西平直「世阿弥『伝書』における「いまここ」—「時に用ゆるをもて花と知るべし」『人間性心理学研究』第25巻—第2号 2008年、37-48頁。
- 西平直(2008)「巡礼としてのシュタイナー教育(1)」『真夜中』1号(リトルモア)108-111頁。
- 西平直(2008)「巡礼としてのシュタイナー教育(2)」『真夜中』2号(リトルモア)98-101頁。
- 西平直(2008)「巡礼としてのシュタイナー教育(3)」『真夜中』3号(リトルモア)132-135頁。
- 西平直(2008)「巡礼としてのシュタイナー教育(4)」『真夜中』4号(リトルモア)114-118頁。
- * Nishioka, K., “Issues Surrounding Academic Achievement in Japan: Examining the 2008 revisions of the National Courses of Study”, Japanese Educational Research Association, *Educational Studies in Japan*, No.3, 2008, pp.5-16.
- *野口素子・佐藤弥・吉川左紀子 (2008). 情動強度尺度日本語版の作成. 対人社会心理学研究, 8, 103-110.
- 野村光江・吉川左紀子・Reginald B. Adams, Jr. (2008). 「まなざしから心を読む」ことと文化—電子情報通信学会技術研究報告, IEICE Technical Report, HCS2007-63, pp.1-4
- 布井雅人・吉川左紀子 (2008). 好みの形成に処理水準が及ぼす影響. 電子情報通信学会技術研究報告 HIP, 108(282), 63-67.
- 小田麻実子・辻河昌登・辻河 優(2009). 大阪府私立幼稚園におけるキンダーカウンセラー活動に関する調査研究. 心理臨床学研究, 27, (印刷中).
- 小川絢子・子安増生 (2008). 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性:ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に. 発達心理学
- *小川時洋・吉川左紀子 (2008) 他者の視線方向と表情が情動刺激に対する視覚的注意に及ぼす効果. 認知心理学研究 5, 83-91.
- 小原優貴(2009)「インドにおける貧困層対象の私立学校の台頭とその存続メカニズムに関する研究—デリー・シャードラ地区の無認可学校を事例として—」日本比較教育学会『比較教育学研究』第39号(印刷中)。
- Ohashi G, Hasegawa R, Kourouma M, Matsuzawa T (2008) Arbors and cuttings: New trials for Green Corridor Project at *Bossou-Nimba*. *Pan Africa News* 15(2):20-23.
- 大橋岳(2008)「トランスフロンティアに分布するチンパンジーの生態と保全—ギニア共和国ボソウから国境を越えてリベリア共和国ニンバ州の森へ」. 『エコソフィア』20:97-105.
- *Okada, T., Sato, W., Kubota, Y., Usui, K., Inoue, Y., Murai, T., Hayashi, T., & Toichi, M. (2008). Involvement of medial temporal structures in reflexive attentional shift by gaze. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 3, 80-88.
- *Okamoto-Barth, S., Tomonaga, M., Tanaka, M., & Matsuzawa, T. (2008) Development of using experimenter-given cues in infant chimpanzees: Longitudinal changes in behavior and cognitive development. *Developmental Science* 11(1), 98-108.
- Okanda, M. & Itakura, S. (2008) Children in Asian cultures say yes to yes-no question: Common and cultural differences between Vietnamese and Japanese children. *International Journal of Behavioral Development*, 32, 131-136.
- Okanda, M. & Itakura, S. (accepted). When do children exhibit a yes bias?. *Child Development*.

- 小野文生(2008). 教育哲学の零度: 未来の想起と過去の予感とのあいだで. *教育哲学研究*, 97, 57-62.
- 大塚雄作 (2008). 関西地区大学のFD——実態とニーズ IDE-現代の高等教育, No. 503 『進展する大学のFD』, pp. 27-31.
- 大家聡樹 (2006) : 青年期の親子関係イメージと境界例心性に関する研究, *心理臨床学研究*, 24 (1), 22 - 33.
- 大家聡樹 (2008e) : 面接関係を生きる—沈黙という共感体験を通じて—, 創造の臨床事例研究 F J K 報告書 第四号, 88-98.
- 大家聡樹 (2009c) : セラピストの面接関係に対する指向性と面接関係の変容について—障害を抱える息子と生きる 50 代女性との面接過程を手がかりに—, 創造の臨床事例研究 F J K 報告書 第五号. (受理)
- 荳阪直行 (2008). 『心理学評論』と共に歩んだ12年 —創刊50周年記念に寄せて—, *心理学評論*, 50, 445.
- 荳阪直行・佐藤隆夫・行場次郎・蘆田宏 (2008). 「視覚研究の最前線」刊行にあたって, *心理学評論*, 51, 203-205.
- 荳阪直行 (2008). 作業記憶と意識・無意識, *生体の科学*, 59, 444-445.
- 荳阪直行 (2008). メタ認知の脳科学, *現代のエスプリ*, 497, 18-28.
- 荳阪直行 (2008). 感性の認知脳科学, *国文学*, 50-57.
- *荳阪直行 (2008). 意識論の最前線: メタ意識としてのセルフアウェアネスの脳内表現, *理論心理学研究*, 10, 33-34.
- 荳阪直行 (印刷中). メタ記憶とワーキングメモリの脳内表現 —社会脳をめぐる自己知 (TOMS) と他者知 (TOMO) の問題—, 清水寛之編, 『メタ記憶』, 北大路書房.
- 荳阪直行 (印刷中). 意識と注意のトップダウン制御, *分子精神医学*.
- *Osaka, N. (in press). Walk related mimic word activates the extra-striate visual cortex in the human brain: An fMRI study. *Behavioral Brain Research*.
- *Otsuka, Y., Osaka, N., and Osaka, M. (2008). Functional asymmetry of superior parietal lobule for working memory in elderly. *NeuroReport*, 19, 1355-1359.
- 尾崎真奈美 (2008). 「高次元意識」に関する現代心理学による説明: その限界と可能性, サトルエネルギー学会誌, 13(2), 57-61.
- 李 霞. (2008). 中国の国語教育における児童の主体性に関する一考察—小学校における授業の事例研究—. *日本教育目標・評価学会紀要*, 18, 56-66.
- 李 霞. (2008). 日本の国語教育における児童の主体性研究—小学校国語授業を事例に—. *中国全国教学論第11回学術年会第2回課程と教学論博士課程院生シンポジウム論文集*, 639-646
- 李 霞. (2008). 大学院生の研究と生活に関する日中比較. *日中教育学系合同シンポジウム論文集*. (印刷中)
- *Saiki, J., & Miyatsuji, H. (in press). Estimated capacity of object files in visual short-term memory is not improved by retrieval cueing. *Journal of Vision*.
- *Saiki, J. (in press). Functional roles of memory for feature-location binding in event perception: Investigation with spatiotemporal visual search. *Visual Cognition*.
- *Saiki, J. (2008). Stimulus-driven mechanisms underlying visual search asymmetry revealed by classification image analyses. *Journal of Vision*, 8(4):30, 1-19.
- 齋藤桂 (2009). (審査中) 「アメリカ・カリフォルニア州におけるバイリンガル教育の実態」日本比較教育学会『比較教育学研究』第39号
- *Saito, S., Logie, R. H., Morita, A., & Law, A. (2008). Visual and phonological similarity effects in verbal immediate serial recall: A test with Kanji materials. *Journal of Memory and Language*, 59, 1-17.
- *Saito, S., Jarrold, C., & Riby, D. M. (in press). Exploring the forgetting mechanisms in working memory: Evidence from a reasoning span test. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*.
- *酒井博之・山田剛史・杉原真晃 (2008). オンライン公開授業実践における大学教員の「気づき」と「自省」. *日本教育工学会論文誌*, 32(Suppl.), 57-60.
- *Sakurai, Y. and Takahashi, S. (2008) Dynamic synchrony of local cell assembly. *Reviews in the Neurosciences*, 19, 425-440.

- 猿山隆子 (2008). 「共同で紡ぎ出す(知)－鶴見和子の生活記録運動にみられる不連続性をめぐって－」『日本の社会教育第 52 集 (ローカルな知)の可能性－もうひとつの生涯学習を求めて－』日本社会教育学会年報編集委員会、東洋館出版社、2008.9、117-129.
- 佐藤卓己 (2008). インターネット時代のテレビ的教養：“ローカルな知”の可能性？. 日本の社会教育, 52, 157-169.
- Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S. (2008). Time course of superior temporal sulcus activity in response to eye gaze: A combined fMRI and MEG study. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 3, 224-232.
- 佐藤弥・魚野翔太・松浦直己・十一元三 (2008). 非行少年における表情認識の問題. 電子情報通信学会技術研究報告, 108, 1-6.
- *Sato, W., Fujimura, T., & Suzuki, N. (2008). Enhanced facial EMG activity in response to dynamic facial expressions. *International Journal of Psychophysiology*, 70, 70-74.
- *Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S. (in press). Commonalities in the neural mechanisms underlying automatic attentional shifts by gaze, gestures, and symbols. *Neuroimage*.
- *Sato, W., & Yoshikawa, S. (in press). Anti-expressions: Artificial control stimuli for emotional facial expressions regarding visual properties. *Social Behavior and Personality*.
- *Sato, W., & Yoshikawa, S. (in press). Detection of emotional facial expressions and anti-expressions. *Visual Cognition*.
- *Shikishima, C., Hiraishi, K., Yamagata, K., Sugimoto, Y., Takemura, R., Ozaki, K., Okada, M., Toda, T., & Ando, J., (in press), . "Is g an entity? A Japanese twin study using syllogisms and intelligence tests," *Intelligence*, published online.
- *Shimada, Y. & Itakura, S. (2008). Alteration of adults' subjective feeling of familiarity toward infants' sounds. *Perceptual and Motor Skills*, 107, 225-230.
- 清水亜紀子 (2008). 「分離の痛み」を共に生き抜くこと～小児癌を生きる男児とのプレイセラピー～. 創造の臨床事例研究(FJK 報告書・藤原勝紀編), 4, pp.67-80
- *清水亜紀子 (印刷中). 「自己の二重性の意識化」としての自我体験－体験者の語りを手がかりに－. パーソナリティ研究, 17(3).
- *尹秀安 (2009). 京城帝国大学における英文学の位置－佐藤清の英文学観を中心に－ 教育史フォーラム, 4, 3-25.
- 杉万俊夫 (2008). 中堅看護師研修における活動理論の実践. インターナショナル・ナーシング・レビュー, 138, 50-54.
- *Sugimori, E. & Kusumi, T. (2008). Output monitoring error: Effects of previously encoded action phrases. *Psychologia:International Journal of Psychological Science*, 51(1),76-88.
- *Sugimori, E. & Kusumi, T. (2008). Relationship between cue word activation and prospective memory performance. *Psychological Reports*, 102, 317-327.
- *Sugimori, E. & Kusumi, T. (2009). Limiting Attentional Resources Influences Performance and Output Monitoring of an Event-Based Prospective Memory Task . *European Journal of Cognitive Psychology*, 21(1), 112-128.
- 杉本均(2009 予定) 「義務教育の機能的変容と回帰の国際動向」『比較教育学研究第 38 号』(頁数未定)
- *Suzuki, Shoko(2008). Die Zukunft verhandeln. Aus der Sicht der Wissenschaftskommunikation in der Risikoforschung und Bioethik Japans. Paragrana – Internationale Zeitschrift fuer Historische Anthropologie. Bd.17, Das Menschliche Leben, Heft2, S.187-194
- *菅原幸恵・北上田源・実川悠太・伊藤哲司・やまだようこ (2009) 過去の出来事を“語り継ぐ”ということ. 質的心理学研究, 8, 6-24.
- 田口真奈(2008) FD の推進主体は誰か, 『IDE 現代の高等教育』, No. 503, 21-26
- Takahashi, M., Ushitani, K., & Fujita, K. (2008). Inference based on transitive relation in tree shrews (*Tupaia belangeri*) and rats (*Rattus norvegicus*) on a spatial discrimination task. *The Psychological Record*, 58, 215-227.
- 高橋真 (2008). 推論能力の進化に関わる選択圧－社会的文脈の推論に関する種間比較からの示唆－. 動

- 物心理学研究, 58, 51-59.
- *Takahashi, S., Ban, H., Ohtani, Y., Sawamoto, N., Fukuyama, H., Ejima, Y. (2008). Neural mechanisms for perceptual permanency: an fMRI study of the tunnel effect. *Gestalt Theory*, 30(1), 39-51.
- 高橋洋一 (2009). サイエンスアゴラ 2008 参加報告: ドイツにおける Wissenschaft im Dialog との比較を交えて. 平成 20 年度 総長裁量経費研究プロジェクト「大学のアウトリーチ活動の方法開発に関する教育学研究: 日中独比較研究を通して京都大学の可能性を探る, 個別研究報告書 4「アウトリーチ活動と大学—科学コミュニケーションの未来」調査研究報告書
- 高橋康介, 齋木 潤 (2008). 動的な変形に対する視触覚間同時性判断. *心理学研究*, 78, 599-606.
- Takahashi, K., Saiki, J., & Watanabe, K. (2008). Realignment of temporal simultaneity between vision and touch. *NeuroReport*, 19, 319-322.
- 高見茂 (2009). 総括とまとめ—教育行政学の新たなフロンティアの開拓を目指して—教育行財政研究, 36, 75-77.
- Takaoka, A., Morisaki, A., & Fujita, K. (2009). Intermodal representation in dogs. *Journal of Veterinary Behavior: Clinical Applications and Research*, 4, 54-55.
- 高瀬泉・中川季子・坂口生夫・山本好男・西克治 (2009). 児童虐待への臨床法医学的取り組み. 滋賀医科大学雑誌, 1, 24-27.
- 高嶋雄介・須藤春佳・高木綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・重田智・田中史子・西嶋雅樹・桑原知子 (2008). 学校現場における事例の見方や関わり方にあらわれる専門的特徴. *心理臨床学研究*, 26(2), 204-217.
- Takeshita, H., Myowa-Yamakoshi, M., & Hirata, S. (in press) The supine position of postnatal human infants: Implications for the development of cognitive intelligence. *Interaction Studies*.
- 田村綾菜 (印刷中). 児童の謝罪認知に及ぼす加害者の言葉と表情の影響. *教育心理学研究*.
- *Tanabe, A., & Osaka, N. (in press). Picture span test: Measuring visual working memory capacity involved in remembering and comprehension. *Behavior Research Methods*.
- 田中耕治 (2008). 学力調査と教育評価研究. 『教育学研究』第 75 巻第 2 号, pp. 2-12.
- 田中耕治 (2008). 「目標に準拠した評価」をめぐる現状と課題—内申書問題が提起するもの—. 『教育目標・評価学会紀要』第 18 号, pp. 1-7.
- 田中耕治 (2009). 学力調査における質と平等の問題—「真正の評価」論からみえてくるもの—. 『教育新世界』No. 57, pp. 2-8
- *田中美香・金山由美・河合俊雄・桑原晴子・山森路子 (2008). 甲状腺専門病院における心理臨床: 身体医から依頼されるケースの分類と特徴. *心療内科*, 12, 430-435.
- 田中每実 (2008). FD の工学的経営学的モデルとその生成性の回復のために. *大学教育学会誌*, 第 30 号 第 1 巻, 54-56.
- 田中每実 (2008). 「教育哲学の出発」に関する総括的報告. *教育哲学研究*, 第 97 号, 173-175.
- *Tanaka, Y. (in press). On dissociation as a psychological phenomena, *Psychologia*, 51.
- 田中容子「上手なほめ方・叱り方 授業場面で考える」*高校生活指導* 179 号 p.72-75
- 谷野幸子 (2009). 中途身体障害者にみる「からだ」と「生きるということ」. *京大心理臨床シリーズ* 第 8 巻, 30-37(印刷中)
- 照屋信治 (2009). 沖縄教育における「文明化」と「大和化」—太田朝敷の「新沖縄」構想を手がかりとして—. *教育学研究*, 第 76 巻第 1 号, 1-12.
- *Tomonaga, M. (2008). Relative numerosity discrimination by chimpanzees (*Pan troglodytes*): Evidence for approximate numerical representations. *Animal Cognition*, 11, 43-57.
- 東畑開人 (2008). 容姿の美醜についての体験における「他者」の関与. *心理臨床学研究*, No.25. (6), 671-681
- 東畑開人 (2009). 玩具の存在論. *箱庭療法学研究*. 印刷中
- *Tsubomi, H., Ikeda, T., Hanakawa, T., Hirose, N., Fukuyama, H., & Osaka, N. (in press). Connectivity and signal intensity in the parieto-occipital cortex predicts top-down attentional effect in visual masking: an fMRI study based on individual differences. *Neuroimage*.
- *内田由紀子 (2008). 文化と感情: 比較文化的考察と組織論への意義. *組織科学*, 41, 48-55.

- *Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B. (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 741-754.
- *内田由紀子 (2008). 日本文化における自己価値の随伴性—日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証—. *心理学研究*, 79, 250-256.
- 内田由紀子 (印刷中). 文化と心の相互構成プロセス—文化心理学における文化概念と方法論. *文化人類学研究*, 9.
- *Uchida, Y., & Kitayama, S. (in press). Happiness and unhappiness in east and west: Themes and variations. *Emotion*.
- *Uchida, Y., & Townsend, S. S. M., Markus, H. R., & Bergsieler, H. B. (in press). Emotions as within or between people? Cultural variation in lay theories of emotion expression and inference. *Personality and Social Psychology Bulletin*.
- *Ueno, A., Hirata, S., Fuwa, K., Sugama-Seki, K., Kusunoki, K., Matsuda, G., Fukushima, H., Hiraki, K., Tomonaga, M., & Hasegawa, T. (2008). ERPs to stimulus deviance in an awake chimpanzee (*Pan troglodytes*): Towards hominid cognitive neurosciences. *PLoS ONE*, 3(1): e1442. doi:10.1371/journal.pone.0001442.
- *Wall, M. B., Lingnau, A., Ashida, H., Smith, A. T. (2008) Selective visual responses to expansion and rotation in the human MT complex revealed by fMRI adaptation. *European Journal of Neuroscience*, 27(10), 2747-2757.
- 渡辺創太 (2008). 比較研究における多要因・多目的の意義 (Importance of multi-factor and multi-goal in comparative study). *動物心理学研究*, 58, 94
- *渡邊洋子 「伝統芸能という『共有知』とローカル・アイデンティティの可能性—沖縄県島尻郡南風原町の民俗芸能復活の取り組みを手がかりに—」日本社会教育学会編『〈ローカルな知〉の可能性—もう一つの生涯学習を求めて』、東洋館出版社、2008年9月、pp.130-144.
- *Weiss, A., Inoue-Murayama, M., Hong, K.W., Inoue, E., Uono, T., Ochiai, T., Matsuzawa, T., Hirata, S. & King, J. (2009). Assessing chimpanzee personality and subjective Well-Being in Japan. *American Journal of Primatology*, 7, 283-292.
- White, I. M., Minamoto, T., Odell, J. R., Mayhorn, J., & White, W. (2009). Brief exposure to methamphetamine (METH) and phencyclidine (PCP) during late development leads to long-term learning deficits in rats. *Brain Research*, 1266, 72-86.
- 項純 (2008) 日本における最新の全国学力調査及びその結果についての分析. *教育科学研究* (「日本最新全国学力調査及其結果分析」『教育科学研究』), 6月号, pp56-60.
- 山田あさ子 (2008). 学校における逸脱行動に関する考察—許容のかかわりの有効性について—. *関西教育学会年報*, 32, 141-145.
- やまだようこ (2008). 老年期にライフストーリーを語る意味. *老年看護学*, 12, 10-15.
- *やまだようこ・山田千積 (2009) 対話的場所 (トポス) モデル —多様な場所と時間をむすぶクロノ・トポスモデル. *質的心理学研究*, 8, 25-42.
- 山本佳世子 (2008). 高校生の SOC と自殺親和性および死生観の関係. *臨床死生学*, 13, 印刷中
- 山本和行 (2008). 台湾領有初期における教育勅語の導入過程. *日本の教育史学*, 51, 56-68.
- 山本和行 (2009). 1890年全国教育者大集会における「国家教育」論の構造. *教育学研究*, 76-1, 13-22.
- Yamamoto, S., Yamakoshi, G., Humle, T., & Matsuzawa, T. (2008). Invention and modification of a new tool use behavior: ant-fishing in trees by a wild chimpanzee (*Pan troglodytes verus*) at Bossou, Guinea. *American Journal of Primatology*, 70, 699-702.
- Yamamoto, S., & Tanaka, M. (in press). Do chimpanzees (*Pan troglodytes*) spontaneously take turns in a reciprocal cooperation task? *Journal of Comparative Psychology*.
- Yamamoto, S., & Tanaka, M. (in press). How did altruistic cooperation evolve in humans? Perspectives from experiments on chimpanzees (*Pan troglodytes*). *Interaction Studies*.
- 山梨裕美 (2008) シンポジウム "Measuring Zoo Animal Welfare" 参加報告 インターネットジャーナル「環境エンリッチメント」、2008 vol2-3

山梨裕美(2008) ひっかいたりこすったり 科学11月号、岩波書店

Yamasaki, S., Takase, I., Takada, N., Nishi, K. (2009) Measurement of force to obstruct the cervical arteries and distribution of tension exerted on a ligature in hanging. *Leg Med*, [Epub ahead of print].

矢野智司「京都学派の人間学と戦後教育学の系譜」『教育哲学研究』第97号、2008年5月、p.158-163.

矢野智司「動物絵本の人間学」(初出『動物観研究』動物観研究会、第8号、2004年5月、pp.3-6) 韓国語訳、『創批オリニ』創批、2008年

矢野智司『贈与と交換の教育人間学』という問題圏『近代教育フォーラム』教育思想史学会、第17号、2008年9月、pp.93-106.

ヤユツ・ナパイ(2008). 台湾原住民村落における部落発展再考??観光事業と伝統文化教育の連関に着目して. *天理台湾学報*, 17, 107-120.

雅幼滋娜白(2008). 従在日朝鮮人民族學校看台灣原住民民族語教育--以教材、師資、課表為分析對象. *台灣原住民族研究季刊*, vol 1, Number 3, 149-173

淀直子(2008). 分離性と自己の生成 - 発達障害を抱える男児のプレイセラピー -, *遊戯療法学研究*, 7-1, 3-12, .

*Yoshikawa, S., & Sato, W. (2008). Dynamic facial expressions of emotion induce representational momentum. *Cognitive, Affective, and Behavioral Neuroscience*, 8, 25-31.

3. 紀要

千秋佳世(2007). 自我体験とノスタルジーに関する一考察. 京都大学教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 11, 50-56.

藤原綾子・辻河昌登(印刷中). 我が子の非行と向き合った親の心理的プロセスに関する心理臨床学的研究. 発達心理臨床研究(兵庫教育大学附属発達心理臨床研究センター紀要).

福井宏和・杉万俊夫(2008). 原子力発電所保修部門の安全文化醸成に向けた全社的活動. *Journal of Institute of Nuclear Safety System*, 15, 338-344.

*原田宗忠(2008). コーピングが自尊感情の変動性と自己概念に与える影響. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 639-650.

原田宗忠(印刷中). 友達の下半身に関心をもつ3歳11ヶ月男児とのプレイセラピー. 京都大学大学院教育学研究科臨床心理事例紀要.

原田宗忠(印刷中). 児童養護施設におけるケアワーカーと心理職との連携について—自尊感情が揺れやすい3人の事例から—. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要.

*橋本京子(印刷中). クライシスにおけるソーシャルサポートと自己認知の関係について. 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*市原有希子(2009). 心理臨床におけるずれの性質と働き. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55, 227-239.

Ikeda, I. (2009). The concept of attention in Simone Weil: Toward its ordinariness and creativity. *臨床教育人間学*, 9.

Ishizaki, T. (in press). Critical Consideration of the Notion of 'Language' and 'Beyond': 'Beyond the Self' and the Issue of 'Transcendence' in E. Levinas. *Record of Clinical-Philosophical Pedagogy*.

*井谷信彦(2009). 存在論に立脚した教育理論の展開:「有用化としての教育」に対する問いかけを軸に. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55, 41-60.

井藤元(2008). シュタイナー「ニーチェ論」の思想史的検討—試金石としてのニーチェ. *臨床教育人間学*, 9.

*井藤元(2009). 『崇高論』によるシラー美的教育論再考—シラー美的教育論再構築への布石. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55.

伊藤良子(2008). アスペルガー症候群の中学生男児との心理面接について—高岡論文へのコメント. 大阪大学大学院人間科学研究科心理教育相談室紀要, 14.

伊藤良子(2008). 『オモラシ・指しゃぶりを主訴として来談した筋ジストロフィー症をもつ7歳男児とのプレイセラピー』について. 神戸女学院大学心理相談室紀要, 9.

伊藤良子(2008). 巻頭言 日本社会の悩む力を育む場. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研

究センター紀要, 12, 1-2.

伊藤良子 (2008). 巻頭言 相談室の内と外. 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要 臨床心理事例研究, 35, 1-2.

角野善宏 (2008). 福井論文へのコメント. 心理相談研究 (神戸女学院大学大学院人間科学研究科心理相談室紀要), 9, 136-138.

*皆藤章 (2008). 心理臨床における物語の生成—active imagination の体験から—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 39-57.

皆藤章 (2008). 並行面接について思うこと. 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要 臨床心理事例研究, 34, 27-29.

*鎌田東二 (2008). 柳宗悦と宮沢賢治と出口王仁三郎における宗教と芸術. 京都造形芸術大学紀要 Genesis, 12, 155-182.

*河合篤史・辻河昌登 (印刷中). 私立小学校における心理教育的援助サービスの導入に関する実践研究. 学校教育学研究 (兵庫教育大学附属学校教育研究センター紀要).

河合俊雄 (2009). 高橋論文についてのコメント. 文教学院大学臨床心理相談センター紀要, 7, 17-20.

川崎良孝 (2009). 最近の図書館研究の状況: 批判的図書館 (史) 研究を中心として. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 7, 1-10.

*木戸彩恵 (印刷中). 化粧行為にみられる自己-他者間の対話的関係性への考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*木村裕 (印刷中). オーストラリアのグローバル教育プロジェクトの基本的構想とその特質. 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*河野一紀 (2009). 「臨床の知」についての考察—精神分析における「無意識」概念の検討を通じて. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55, 309-322.

小山静子 (2008). 日本教育史の研究動向 (近現代). 日本の教育史学, 51, 125-133.

*Koyasu, M. (2009). Young children's development of understanding self, other, and language. *Kyoto University Research Studies in Education*, 55, 1-13.

子安増生 (2009). 三つ子の魂、どんな魂?—幼児期の心の発達をさぐる. 子ども学 (甲南女子大学国際子ども学研究センター), 11, 87-114.

桑原知子 (2008). 甲斐論文へのコメント—「老いて生きる」「切れてつながる」. 甲南大学臨床心理研究 (甲南大学カウンセリングルーム紀要), 16, 9-11.

*李霞 (2008). 中国の国語教育における児童の主体性に関する一考察—小学校における授業の事例研究—. 日本教育目標・評価学会紀要, 18, 56-66.

*松井華子 (印刷中). 風景構成法の彩色過程研究の可能性について. 京都大学教育学研究科紀要.

松井華子 (印刷中). 下着の窃盗を繰り返し逮捕されたことをきっかけに来談した 40 代男性との面接. 臨床心理事例研究.

三好正彦 (印刷中). 社会的インクルージョン実現に向けての学童保育の可能性—現状と今後の課題について. 人間・環境学研究科紀要 人間・環境学.

*溝口禎之・辻河昌登 (印刷中). 学校教師の職業アイデンティティの危機としての「バーンアウト」と再生に関する研究. 学校教育学研究 (兵庫教育大学附属学校教育研究センター紀要).

*溝川藍 (印刷中). 幼児期における嘔泣きについての認識の発達. 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*森田健一 (印刷中). 記憶に関する心理臨床的観点についての一考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*内藤みちよ (2008). 子どもの問題行動をきっかけに罪悪感を語る母親との面接—人生と面接における「カイロス」の意味—. 臨床心理事例研究, 35.

野口剛 (2009). 小説「細雪」に見る階級・身体・たしなみ. 教育・社会・文化 (京都大学教育学研究科教育社会学研究室), 12.

竹家一美 (2008). 不妊をめぐる社会歴史的背景とその言説. 京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座紀要 教育方法の探究, 11, 25-32.

*竹家一美 (印刷中). ある不妊女性の喪失と選択—対話的省察実践によるナラティブ・テキストの再検討—. 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*小川絢子 (2008). 幼児期における他者の誤った行動に対する理由づけの発達. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 258-269.

- 小川絢子 (2008). 他者の誤った行動に対する幼児の理由づけにワーキングメモリが及ぼす影響. 発達研究, 22, 191-202.
- *小川絢子 (2009). 幼児期における誤信念課題の理由づけ内容の分析—時間的標識に着目して—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55, 61-73.
- 小木曾由佳 (2008). 心理療法における「相互性」の問題—ブーバー=ロジャーズ「対話」の再検討. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 12, 92-103.
- *小原優貴 (印刷中). インドの初等教育における無認可学校の役割と機能—貧困層ビジネスとしての私立学校に着目して—. 京都大学大学院教育学研究科紀要.
- *Ohara, Y. (2009). "Language and the Formation of Self-Identity: The Case of 'Dalits' in India". 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座 臨床教育人間学, 9, 189-194.
- 及川恵・坂本真士 (2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ—授業の場を活用した抑うつ的一次予防プログラムの改訂と効果の検討—. 京都大学高等教育研究, 14, 145-156.
- *大家聡樹 (2008). 〈超越〉についての心理臨床学的研究—「自分を越えた何か」の体験の語りを手がかりに—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 505-517.
- Saito, K. (印刷中). Language Minority Students, Parental Engagement and Partnerships. 臨床教育人間学 (京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座).
- Sakurai, R. (2008). The Potential of Non-Formal Education through Community Learning Centers throughout the World to Encourage Basic literacy, Personal Development and Societal Inclusion. *Proceedings of the International Colloquium between Graduate School of Education, Kyoto University (Japan) and the Institute of Education, University of London*. Kyoto: Kyoto University.
- *笹倉尚子 (2008). <行為としての演技>からみた心理臨床. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 612-625.
- 笹倉尚子 (印刷中). 解離的な症状を呈す不登校の思春期女子との面接. 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要.
- 笹倉尚子 (印刷中). 腐女子心性と関係を生きること. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要.
- 佐藤卓己 (2008). 教育将校・鈴木庫三の軌跡—日本大学助手から情報局情報官へ. 教育学雑誌, 43, 1-18.
- 佐藤卓己 (2008). <世論の輿論化>に向けて: 戦後「世論」の成立史から. よろん (本世論調査協会), 101, 34-37.
- *清水亜紀子 (2008). 自我体験について「語り・聴く」体験をめぐる一考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 464-477.
- *志波泰子 (2008). 3 歳児における他者の意図と信念の理解. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 293-304.
- *杉本均・隼瀬悠里 (2008). 北欧諸国における教師教育. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 1-23.
- *杉本均・櫻井里穂・工藤瞳 (印刷中). 児童労働と義務教育—メキシコおよびペルーの事例より—. 京都大学教育学研究科紀要.
- Takayanagi, M. (in press). Economy of 'Beyond the Self': Teacher Education in and as Higher Education. *Record of Clinical-Philosophical Pedagogy*.
- *田村綾菜 (印刷中). 謝罪に対する被害者の反応とその発達的变化: 文献展望. 京都大学大学院教育学研究科紀要.
- 田中史子 (印刷中). 言葉の箱庭としての物語とびったり感. 京都大学大学院教育学研究科紀要.
- 田中史子・清水亜紀子・大家聡樹・築山裕子・西田麻衣子・佐々木麻子 (2009). 糖尿病治療にみる心理臨床的関わりの可能性—治療教育の歴史的概観を通して. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 12, 42-54.
- 田中康裕 (2008). 並行面接批判—主として解離性障害と発達障害のケースをめぐる—. 臨床心理事例研究 (京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要), 34, 30-32.
- 田中容子 (2008). 生徒を学びへと誘える授業を求めて. 全国高校生活指導研究協議会第 46 回全国大会研究紀要, pp. 28-37.
- *田中慶江 (2008). 13 歳少女のイニシエーションに関する一考察 —初潮と猫イメージをとおして—. 京

都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 558-570.

*谷野幸子 (印刷中). 日常をまなざす心の作業としての心理臨床. 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*東畑開人 (2008). 心理臨床と美の背反性—「偽の美」考. 京都大学教育学研究科紀要, 54, 518-530.

*東畑開人 (印刷中). 醜との心理臨床. 京都大学教育学研究科紀要.

*徳永俊太 (2008). イタリアの歴史教育における授業論—ラボラトリー概念の検討を通して. 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*辻河昌登 (印刷中). 世代間伝達に関する精神分析学的考察 (II). 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*Wakamura, T., Suzuki, K., Toichi, M., Tamaki, A., Horita, S., Matsugi, K., & Miyajima, A. (2008). Effects of body position during an afternoon nap on body temperature and heart rate variability in young healthy Japanese men. 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要 健康科学, 5, 17-21.

渡邊洋子 (2008). 沖縄における『伝統芸能』と生涯学習・社会教育. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 7, 63-81.

渡邊洋子 (2009). 日英医学教育の現段階と課題—日英国際シンポジウム『卒後医学教育の新たな発展にむけて—Work-Based Learning からのチャレンジ』の議論から—. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 8, 59-72.

渡邊洋子 (2009). 『女性が働くこと』と教育をめぐる論点と生涯教育学的課題—三好浩信「日本の女性と産業教育—近代産業社会における女性の役割」(東信堂、2000年)を手がかりとして—. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 8, 73-86.

山際志穂・辻河昌登 (印刷中). 路上生活経験者の内的世界に関する心理臨床学的研究. 発達心理臨床研究 (兵庫教育大学附属発達心理臨床研究センター紀要).

淀直子 (2008). 前思春期を考える—『千と千尋の神隠し』から—. 宝塚市立教育総合センター紀要, 80, 28-36.

4. 総説

赤沢真世 (印刷中). 小学校英語. 西岡加名恵 (編)『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書.

Becker, C. (2008). Embracing the Pure Land Vision. In *Never Die Alone*, ed. Jonathan Watts and Yoshiharu Tomatsu. Tokyo: Jodo Shu Press. pp. 57-89.

ベッカー, C. (2008). 日本の死生学教育—現代の仮題と急務. 京都・宗教論叢, 3, 7-19, 28-30.

ベッカー, C.・村上和雄 (2009). (対談) 生命のメッセージ. 致知, 402, 102-108.

ベッカー, C. (2009). 21世紀のキーワードは抑制. 『釣耕苑対談集』 邑心文庫. pp. 206-219.

Fujita, K., Kuroshima, H., Hattori, Y., & Takahashi, M. (2008). Social intelligence in capuchin monkeys (*Cebus apella*). In Itakura, S., & Fujita, K. (eds.), *Origins of the social mind: Evolutionary and developmental views*. Springer Verlag, pp.3-20.

藤田和生 (2009). メタ記憶の進化. 清水寛之 (編) メタ記憶—記憶のモニタリングとコントロール. 北大路書房. pp. 173-199.

Fujita, K., Nakamura, N., Sakai, A., Watanabe, S., & Ushitani, T. (in press). Amodal completion and illusory perception in birds and primates. In Lazareva, O., Shimizu, T., & Wasserman, E. (eds.), *How animals see the world: Behavior, biology, and evolution of vision*. Oxford University Press.

Fujita, K., & Ushitani, T. (in press). Perceptual logics in a comparative perspective: the case of amodal completion. In Watanabe, S., & Yamazaki, Y. (eds.), *Rational animals, irrational humans*.

船橋新太郎 (2008). 前頭前野における Dynamic Modulation 機構. 分子精神医学, 8, 91-101.

船橋新太郎 (2008). 意思決定のしくみ. Brain and Nerve (神経研究の進歩), 60, 1017-1027.

船橋新太郎 (2008). 統合失調症のワーキングメモリ—霊長類を用いた研究を通して—. *Schizophrenia Research*, 51, 219-225.

林美里 (2008). 物にかかわる知性をさぐる—対面検査と野生チンパンジーのくらし. 発達, 29(115), 104-112.

林美里 (2008). 物の操作にみられる知性とその発達—飼育下と野生のチンパンジー、ヒトとの比較. 科学,

- 78, 631-634.
- 林美里 (2008). 突起のついた積木をつむ. 科学, 78, 996-997.
- 平石界 (2009). 進化心理学の視点. 日経サイエンス, 39, 80.
- 本所恵 (2008). スウェーデンの高校における職場実習の取り組み—企業と学校との連携による職業教育—. *BERD*, 12, 36-41.
- 本所恵 (2009). 数理化サイクルと読解のプロセス. 『授業研究 21』 明治図書. pp. 27-28.
- 伊村知子・友永雅己 (2008). 視覚の系統発生: ヒト以外の霊長類の知覚発達との比較から. 山口真美・金沢 創 (編) 『知覚・認知の発達心理学入門』 北大路書房. pp. 99-112.
- 板倉昭二 (2008) 他者の心を理解する脳の仕組み. 教育と医学 9月号, 4-11.5.
- 板倉昭二 (2008). メタ認知には人にのみ固有の現象—メタ認知の系統発生と個体発生. 現代のエスプリ, 497, 29-37.
- 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) (2009). 京大心理臨床シリーズ7 「発達障害」と心理臨床. 創元社.
- 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編) (2009). 京大心理臨床シリーズ8 身体の病と心理臨床 遺伝子の次元から考える. 創元社.
- 伊藤良子 (2008). 夢の変容過程に現れたクライアントの内的作業. 日本心理臨床学会編『心理臨床の広場』 (特集1: 夢の心理臨床学的利用) 創刊号, 20-21.
- 伊藤良子 (2008). 感情と心理臨床: 象徴化に向けて (日本情動研究会第2回講演記録). 日本情動研究会 日本情動研究会ニューズレター, 2, 16-19.
- 伊藤良子 (2008). 京都大学大学院. 大塚義孝 (編) 『臨床心理士指定・専門職大学院ガイド』. 日本評論社. pp. 25.
- 伊藤良子 (2008). 日本ユング心理学会編集委員会 (編) 『日本における分析心理学』 (河合隼雄先生追悼シンポジウム、第3部 日本における分析心理学と精神分析 2008 記録). 創元社. ユング心理学研究, 1, 98-160.
- 伊藤良子 (2008). 公の場にかかれた事例研究 (日本心理臨床学会 第25回大会シンポジウム『心理臨床学の実践研究成果を以下に公開するか』 記録). 心理臨床学研究, 26, 113-117.
- 角野善宏 (2008). ニューズレター: 「臨床教育実践研究センターから」 京都大学大学院教育学研究科/教育学部. pp. 7.
- 狩野文浩・田中正之・友永雅己 (2008). 記憶と情動. 科学, 78, 458-459.
- 小山静子 (2008). 人はどのように育ち学んできたのか. 機, 199, 10-11.
- 子安増生 (2008). 『経済心理学のすすめ』のすすめ. 『書齋の窓』 3月号, 21-25.
- 子安増生 (2008). 祝『心理学評論』刊行50周年. 心理学評論, 50, 440-441.
- 子安増生 (2008). OT のための教養講座・発達心理学「その1 他者視点の取得」. 作業療法ジャーナル, 42(8), 855.
- 子安増生 (2008). OT のための教養講座・発達心理学「その2 心の理論の獲得」. 作業療法ジャーナル, 42(9), 952.
- 子安増生 (2008). OT のための教養講座・発達心理学「その3 他者感情の推測」. 作業療法ジャーナル, 42(10), 1065.
- 子安増生 (2008). OT のための教養講座・発達心理学「その4 他者の痛み認知」. 作業療法ジャーナル, 42(11), 1193.
- 子安増生 (2008). OT のための教養講座・発達心理学「その5 実行機能の役割」. 作業療法ジャーナル, 42(12), 1281.
- 子安増生 (2008). OT のための教養講座・発達心理学「その6 描画による表現」. 作業療法ジャーナル, 42(13), 1359.
- 久保 (川合) 南海子 (2008). 高齢ザルからみた記憶の変化. 心理学ワールド, 42, 17-20.
- 楠見孝 (2008). ホワイトカラーにおける暗黙知とその継承. *Global Edge*, 13, 12-13.
- 桑原知子 (2008). 心理療法とは 心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法①. こころの科学, 138, 101-107.
- 桑原知子 (2008). きく=①「聴く」心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法②. こころの科学, 139, 129-134.
- 桑原知子 (2008). きく=②「効く」心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法③. こころ

ろの科学, 140, 119-124.

- 桑原知子 (2008). 待つ 心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法④. こころの科学, 141, 123-128.
- 桑原知子 (2008). あう 心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法⑤. こころの科学, 142, 140-144.
- 松下佳代 (2008). 大学カリキュラムのなかのキャリア教育—能力論的検討—. IKUEI NEWS (電通育英会), 44, 25.
- 松沢哲郎 (2008). 野生動物研究センター発足. 科学, 78(5), 566-567.
- 松沢哲郎 (2008). 霊長類学の「到達点」—霊長類学 60 周年とアイ・プロジェクト 30 周年. 科学, 78(6), 612-616.
- 松沢哲郎 (2008). 1 ppm の思想. 科学, 78(7), 782-783.
- 松沢哲郎 (2008). 人間もまたサルである. 科学, 78(8), 870-871..
- 松沢哲郎 (2009). ジェーン・グドールと幸島の旅. 科学, 79(1), 118-119.
- 松沢哲郎 (2009). 野生チンパンジーに見る石器製作の起源. 科学, 79(3), 272-273.
- 松沢哲郎 (2009). 社会的認知の発達—発達という現象の比較認知科学的研究. 発達, 117(30), 104-112.
- 明和政子 (2008). 心の発達と教育の進化的基盤. 科学, 78(6), 626-630.
- 西平直 (2008). 本当は兄弟がいた—子どもの頃と死の問題. 『UP』(東京大学出版会、2008年).
- 西平直 (2008). ひるあんどん (連載 10 回). 『春秋』(春秋社、2008年).
- 大山泰宏 (2008). 米国における臨床心理士養成とスーパーヴィジヨナーその 1: 臨床心理士のトレーニングシステム. 日本臨床心理士会雑誌, 58, 53-55.
- 大山泰宏 (2008). 米国における臨床心理士養成とスーパーヴィジヨナーその 2: 臨床心理士の訓練プログラム. 日本臨床心理士会雑誌, 59, 53-55.
- 齋木潤 (印刷中). 視覚性短期記憶における結び付け問題. 日本神経回路学会誌.
- 櫻井芳雄 (2008). 侵襲式BMI (ブレイン・マシン・インタフェース) の現状と課題. 日本機械学会誌, 111, 916-919.
- 佐藤卓己 (2008). 直接税と受信料と購読料. 信濃毎日新聞, 2008年2月25日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 常用漢字表に「興」論を. 信濃毎日新聞, 2008年5月26日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). クイズ番組と《テレビ的教養》. 調査情報 (TBS), 7月8日号, 44-49.
- 佐藤卓己 (2008). 秋葉原事件だ問うもの⑦ ネット利用にも格差. 信濃毎日新聞, 2008年7月13日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). やさしい経済学—21世紀と文明: メディア社会の輿論と世論①-⑧. 日本経済新聞, 2008年7月4日より7月15日まで8回連載.
- 佐藤卓己 (2008). ドイツから見る北京五輪. 信濃毎日新聞, 2008年9月1日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). “情報” から北京オリンピックを読む. 熱風 (スタジオジブリ), 10月号, 16-21.
- 佐藤卓己 (2008). 本当の歴史的思考とは. 信濃毎日新聞, 2008年12月1日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2009). 弾圧された右翼ジャーナリズム—昭和言論史の再審へ. 中央公論, 2009年1月号, 57-65.
- 佐藤卓己 (2009). 民放における「テレビ的教養」の可能性 (特集 放送と青少年). 月刊民放 (日本民間放送連盟), 39-2, 8-1.
- 佐藤卓己 (2009). 教育テレビから教養テレビへ. GALAC (放送批評懇談会), 6, 12-15.
- 佐藤弥・魚野翔太・十一元三 (2008). アスペルガー障害と扁桃体. *Clinical Neuroscience*, 26, 458-459.
- 荘島幸子 (2008). 語る、聴くという場のなかで生み出される関係性、そして新しい現実へ. 日本発達心理学会ニューズレター, 55, 1-2.
- 杉本均 (印刷中). 第3章 ブータンに学ぶ幸福感と教育—伝統と近代の衝突と共生. 子安増生 (編) 『心が活きる教育—リスク社会と幸福感』ナカニシヤ出版.
- 田中耕治 (2008). 教育評価としての教員評価. 『現代教育科学』No.617, pp. 8-10.
- 田中耕治 (2008). 今、高校教育で求められる学力と評価とは. 『月刊 高校教育』第41巻第8号, pp. 28-31.
- 田中耕治 (2008). 「習得」と「活用」をつなぐパフォーマンス課題の開発. 『授業研究 21』No.624, pp. 9-10.
- 田中耕治 (2009). 学力調査に見る日本の子どもの特徴と弱点—算数学力に焦点をあてて. 『児童心理』No.890, pp. 18-24.
- 田中耕治 (2009). 「学習評価」の新しい考え方. 『教育展望』第55巻第2号, pp. 32-37.
- 田中正之 (2008). 経験によって変わる世界の見え方. 科学, 78(6), 622-625.

- 田中每実 (2008). 相互研修型 FD の組織化と拠点形成. IDE, 503, 54-57.
- 友永雅己 (2008). チンパンジーにおけるシンボルの獲得. 中山剛史・坂上雅道 (編) 『脳科学と哲学の出会い 脳・生命・心』玉川大学出版部, pp. 58-81.
- 友永雅己 (2008). チンパンジーにおける社会的認知とその発達—顔の認知を題材として—. 基礎心理学研究, 26, 186-193.
- 友永雅己 (2008). チンパンジーから知る自己・他者・身体—チンパンジーから見た世界 2.0. 科学, 78, 617-621.
- 友永雅己 (2008). チンパンジーにおける対称性の (不) 成立. 認知科学, 15, 347-357.
- 友永雅己 (2008). コミュニケーションと社会—チンパンジーの認知発達からみた社会的相互交渉の進化—, 甘利俊一 (監修)・入来篤史 (編) 『コミュニケーションの脳科学』東京大学出版会, pp. 163-191. 東畑開人 (印刷中). こころを装うこと—ファッションの心理臨床学. 心理臨床の広場.
- 鶴光代・藤城有美子・大山泰宏・平部正樹 (2008). 第 5 回『臨床心理士の動向ならびに意識調査』結果速報(暫定値): 第 1 報. 日本臨床心理士会雑誌, 56, 74-79.
- 鶴光代・藤城有美子・平部正樹・大山泰宏 (2008). 第 5 回『臨床心理士の動向ならびに意識調査』結果速報(暫定値): 第 2 報. 日本臨床心理士会雑誌, 57, 42-50.
- 渡邊洋子・金井壽宏 (2008). [対談・成人教育] 生涯学習時代の成人教育. 『CREO』2008 年 No.1, 神鋼ヒューマンクリエイト, pp. 13-23.
- 渡邊洋子・河井亨・原田直樹・黒野詩織・小野加奈子・牧浦寛・柴原真知子・辻喜代司 (2008). 【授業報告】ドナルド・A・ショーン著『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』(柳沢昌一・三輪建二監訳, 2007) を共同で読む. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 8, 157-181.

5. 科研等報告書

- 千秋佳世 (2008). 「My experience in the seminar」夢分析セミナー発表要旨及び参加報告. 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 19 年度国際企画研究成果報告書, p. 36.
- 隼瀬悠里 (2008). 都道府県および市町村の歳入の推移と教育費の相関関係. 文部科学省委託事業 (採択番号 24) 新教育システム開発プログラム研究成果報告書『公教育財源の效果的調達と配分方法に関する総合研究—教育資金動向の調査研究—』, pp. 114-117.
- 稲垣恭子 (2008). 基盤研究 B 「モダンガールとフェミニン・ファシズム」『大学批判の歴史社会学—知識人的公共圏の成立と変容』 (pp. 1-10)
- 石川裕之 (2009). 基盤研究 C 「韓国: 『後発福祉国家』における子育て支援政策—国民国家モデルとグローバル・モデルの錯綜—」.
- 石川裕之 (2009). 特別教育研究経費 大学教員教育研修のためのモデル拠点形成「II-2. 公開授業・検討会」.
- 石川裕之 (2009). 特別教育研究経費 大学教員教育研修のためのモデル拠点形成「IV-5. 若手 FD 研究者ネットワーク (JFDN Jr)」.
- 石川裕之 (2009). 特別教育研究経費 大学教員教育研修のためのモデル拠点形成「V-C. 海外研究者の招聘・交流」.
- 岩井八郎 (2008). 『ポスト・フォーディズム時代における教育機会とライフコース変動に関する比較研究』(2006-07 年度 基盤研究 (C) 研究成果報告書).
- 加藤奈奈子・大石真吾・佐々木麻子・山本尚代 (2008). 心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究—特別養護老人ホームでの調査から—. 平成 19 年度研究開発コロキウム報告書.
- 加藤奈奈子・大石真吾・佐々木麻子・千秋佳世・浅田剛正・高橋優佳・森崎志麻・山本尚代・浅田恵美子 (2009). 心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究. 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書.
- 河崎美保 (2009). II—4. 大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか— 【1】実施報告. 京都大学高等教育叢書, 27, 80-107. (平成 20 年度採択特別教育研究経費報告書「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 2008」).
- 河崎美保 (2009). V—A. アメリカ訪問 5. カーネギー教育振興財団、インディアナ大学、およびノース

- カロライナ大学訪問. 京都大学高等教育叢書, 27, 340-342. (平成 20 年度採択特別教育研究経費報告書「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 2008」).
- 金晓明・沈麗云・章騫・川崎良孝 (2009). 川崎良孝・鈴木晶子研究担当『上海図書館とアウトリーチ・サービス』(平成 20 年度総長裁量経費研究プロジェクト「大学のアウトリーチ活動の方法開発に関する教育学研究: 日中独比較研究を通して京都大学の可能性を探る」個別研究報告書 No. 3), 44 p
- 木村裕・徳永俊太 (2008). 『「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む高倉教育～学校・家庭・地域・大学の連携～』(平成 20 年度京都市立高倉小学校紀要)「高倉小学校と京都大学教育方法研究室との連携—大学院生から見た『プロジェクト TK』—」, スマイル 21 プラン委員会・京都市立高倉小学校, pp. 38-44.
- 児玉華奈・太田拓紀・生駒佳也・辻喜代司 (2008). 野殿・童仙房地域における協働的な「学びの空間」をめぐるフィールドワーク. 京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター『大学院生主体課題探究・討論 平成 19 年度研究開発コロキウム成果報告書』
- 項純 (2008). 日本における博士育成システムの経験と示唆. 『高レベル創造型科学技術人材団体の建設に関する研究プロジェクト報告書(下)』(「日本研究生培養機制的経験と示唆」『高层次创新型科技人才队伍建設研究专题报告』), pp. 481-495.
- 河野一紀 (2009). 心理臨床における「知」について—「非日常性」という概念を手掛かりに. 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書.
- 楠見孝・小倉加奈代・三浦麻子 (2008). 仮想空間を利用したガン患者サポートグループの構築. 特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究」平成 20 年度研究成果報告書.
- 楠見孝・平山るみ (2008). 市民の食品リスク・リテラシーの構造: 学歴と批判的思考態度の影響. 基盤研究 A「科学を基礎とした食品安全行政/リスクアナリシスと専門職業、職業倫理」(研究代表者新山陽子) 研究成果報告書.
- Matsui, H. (2008). Meet Dr.Giegerich. 臨床の知を創出する質的に高度な人材養成—京大型臨床の知創出プログラム—平成 19 年度国際企画成果報告書. pp. 35.
- 松井華子・千秋佳世・古川裕之・山本有恵 (2009). 風景構成法における彩色についての研究. 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書. pp. 96-105.
- 宮島朝子・相良二郎・真継和子 (2008). 萌芽研究「住宅改修必要性評価と福祉用具処方の一体化モデル開発に向けた基礎的研究」.
- 溝上慎一 (2008). 調査にあたって/調査結果のまとめ. 京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会 (編)『大学生のキャリア意識調査 2007 調査報告書』. pp. 1-4, 6-16.
- 森田健一・佐藤健・菱田一仁・永山智之 (2008). きの子どもの村学園 学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究—新しい学びと育ちの場・洛風中学校でのとりくみを通じて—第 4 章. 『研究開発コロキウム 平成 19 年度研究成果報告書』 pp. 96-98.
- 永田素彦・大川智船 (2009). 朱鞠内湖の流域環境に関する住民意識調査. 総合地球環境学研究所研究プロジェクト「流域環境の質と環境意識の関係解明—土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として」(環境意識プロジェクト) 研究報告書.
- 内藤みちよ (2008). 心理検査のフィードバック面接の実施報告—その臨床的意義とセンター実習への活用について—. 立命館大学心理・教育相談センター年報, 7, 52-55.
- 中村哲之・瀧本彩加・別役透・渡辺創太・森本陽・溝川藍・高岡祥子・鹿子木康弘 (2009). 遊び行動と認知機能の関係性についての比較認知科学的・比較認知発達科学的研究—Relationship between play and cognitive function - from a viewpoint of comparative cognitive science and comparative cognitive developmental science—. 京都大学グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」(Kyoto University Global COE Program. "Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds") 平成 20 年度研究開発コロキウム (Colloquium for Educational Research and Development) 研究成果報告書, 22-23, 146-155.
- 西岡加名恵 (2009). 『中学校社会科のパフォーマンス課題』(科研費研究成果報告書「カリキュラム評価に活きるスタンダードの設定に関する国際比較調査」).
- 西岡加名恵・中池竜一・盛永俊弘・小西康公・井尻美和子・山崎慶子・北原琢也・森千映子・井上典子 (2009).

- 『京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM 「カリキュラム設計データベース (CDDDB)」への招待』財団法人 パナソニック教育財団 平成 20 年度研究委託事業「パフォーマンス課題とウェブリックの開発を推進する E.FORUM カリキュラム設計データベース (CDDDB) の活用」。
- 野口剛 (2009). 京都大学における留学の三層構造とその規定要因. 『京都大学における国際交流の現状と可能性—第 3 回アンケート調査報告』(京都大学国際交流センター).
- 野口剛・赤上裕幸・太田誠二・山崎貴子・井上烈・岡田丈祐・岡田薪子・長崎励朗 (2008). 京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキウム研究成果報告書「情報・メディア・コミュニケーションの社会的役割と機能に関する実証的研究」.
- Ohara, Y. (2008). Language and the Formation of Self-Identity: The Case of Dalits in India. University of Kyoto, Collection of Paper of International Colloquium between the Institute of Education (IoE), University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University (Kyoto) "The Self, the Other and Language: Dialogue between philosophy, psychology and comparative education" Kyoto University.
- 及川恵 (2008). 共同実施ワーキンググループ. 京都大学高等教育叢書, 27, 190-191.
- 及川恵・石川裕之 (2008). マギル大学 TLS 訪問および ISSOTL2008 参加. 京都大学高等教育叢書, 27, 368-369.
- 小野文生 (2009). 〈学〉における〈風〉の存在理由—「京大らしさ」へのひとつのパースペクティブ. 平成 20 年度総長裁量経費研究プロジェクト「大学のアウトリーチ活動の方法開発に関する教育学研究: 日中独比較研究を通して京都大学の可能性を探る」個別研究報告書 3『研究調査報告書 京都大学らしさの根源を探る』(鈴木晶子研究代表). pp. 45-53.
- 大塚雄作 (2009). 授業アンケート結果報告: 2007 後期-2008 前期. 京都大学高等教育叢書 (大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 2008), 27, 26-48.
- 大家聡樹・田中史子・築山裕子・西田麻衣子・佐々木麻子・森崎志麻 (2009). 糖尿病患者の「生きる」ことの心理臨床学的研究. 平成 20 年度「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム研究成果報告書.
- 劉曉丹・庄盛・川崎良孝 (2009). 中国大学におけるアウトリーチ活動に関する調査報告書 (復旦大学と華東師範大学を事例として). 平成 20 年度総長裁量経費研究プロジェクト「大学のアウトリーチ活動の方法開発に関する教育学研究: 日中独比較研究を通して京都大学の可能性を探る」個別研究報告書 No. 2, 30 p.
- Saito, K. (2009). Language Minority Students and Parent-School Partnerships. The Self, the Other and Language: Dialogue between Philosophy, Psychology and Comparative Education. International Colloquium between the Institute of Education (IoE), University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University. Kyoto University.
- 齋藤桂 (2009). カリフォルニア州におけるテスト政策の実態. 平成 18-20 年度 日本学術振興会科学研究費基盤研究 (C) 『米国マサチューセッツ州における教育管理政策の総合的研究』研究成果報告書 (研究課題番号 18530626) (研究代表者 北野秋男).
- 齋藤桂 (2009). プレ大学教員としての大学院生と FD. 京都大学高等教育叢書 (大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 2008), 27.
- 櫻井芳雄 (2008). 基盤研究 B 「多様な長期記憶の形成を担う機能的神経回路の活動について」.
- 櫻井芳雄 (2008). 特定領域研究『移動知』「情報を表現する神経活動における身体の役割を BMI 法で解析する」.
- 佐藤卓己 (2009). 基盤研究 C 「放送メディア教育の成立と展開」.
- 佐藤弥・魚野翔太・松浦直己・十一元三 (2008). 非行少年における表情認識の問題. 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 43, 157-163.
- 清水亜紀子・田中史子・大家聡樹・築山裕子・西田麻衣子・佐々木麻子・森崎志麻 (2008). 糖尿病患者の「生きること」の心理臨床的理解の試み. 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 19 年度研究成果報告書, 42-43, 102-111.
- 杉本均 (編) (2009). 『義務教育の機能変容と弾力化に関する国際比較研究』(最終報告書) 平成 18~19 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (18330179). 413 頁
- 鈴木晶子 (2008). 基盤研究 C 「『いのちの尊厳』教育における生命科学的思想の位置価値と育成課題に関

する実証的研究」。

鈴木晶子 (2008). 日本学術会議・環境リスク分科会報告書。

鈴木晶子 (2008). 日本学術会議・医学教育分科会報告書。

鈴木晶子 (2009). 『大学におけるアウトリーチ活動と科学コミュニケーションの未来』平成 20 年度総長裁量経費研究プロジェクト「大学のアウトリーチ活動の方法開発に関する教育学研究：日中独比較研究を通して京都大学の可能性を探る」個別報告書。

鈴木晶子 (2009). 『京都大学らしさの根源に関する調査研究』平成 20 年度総長裁量経費研究プロジェクト「大学のアウトリーチ活動の方法開発に関する教育学研究：日中独比較研究を通して京都大学の可能性を探る」個別報告書。

高見茂 (2008). 文部科学省委託研究「公教育財源の効果的調達と配分方法に関する総合的研究－教育資金動向の調査研究－」。

高見茂 (2009). 基盤研究 B「教育委員会を支える公会計制度の構築と適用可能性の調査」中間報告書。

高瀬泉 (2008). 若手研究 B「児童虐待・性犯罪被害者への臨床法医学的介入および関係諸機関との連携構築の試み」。

田中耕治 (監訳・編集) (2009). スタンダードからルーブリックへの 6 つのステップ (ケイ・バーク著). 『リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発』(平成 19-21 年度科学研究費補助金研究成果最終報告書), 149 p.

田中耕治 (2009). 教育現場に生きる教育実践力の構想. 鳴門教育大学「平成 20 年度特色 GP・専門職 GP シンポジウム報告書」, pp. 5-10.

友永雅己 (2008). 基盤研究 B「動的表象の形成と知識－知覚の相互作用：その比較認知科学的検討」。

築山裕子・梅村高太郎・笹倉尚子・谷垣紀子・友尻奈緒美・林明日香・古川裕之・小西佳世・高橋優佳・中野江梨子・永山智之 (2008). こころと身体の在り方についての心理臨床的理解の試み－心身症を通して－. 研究開発コロキウム平成 19 年度研究成果報告書, pp. 122-131.

渡邊洋子 (2009). 『「伝承・習い事」文化における学主要式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究』(研究成果報告書, 課題番号 18330167) (平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) (研究代表者 渡邊洋子), 157 p.

やまだようこ (2008). 基盤研究 B「フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法」。

山本有恵・千秋佳世・古川裕之 (2009). 臨床的方法としての「めぐる」ことに関する研究－「魂をめぐる語り」に立ち合うことから－. 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書, pp. 146-159.

山本有恵・千秋佳世・松井華子 (2008). 臨床的方法としての「めぐる」ことの体験的研究－「魂をめぐる語り」に立ち合うことから－. 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 19 年度研究成果報告書, pp. 132-141.

矢野智司・川崎良孝・高見茂・田中耕治・桑原知子・金子勉・西岡加名恵・中池竜一・赤沢真世 (2009). 『E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修』(平成 20 年度 成果報告書) 192 p.

6. 翻訳

春木奈美子 (2008). 贈与の人間学と社会的承認. Marcel Henaff (著) *Anthropology of Gift Giving and Social Recognition* (University of California, San Diego での講義). ラチオ 05. 講談社. pp.164-186.

垣口弥生子・川崎良孝 (2008). 『公立図書館・文書館・博物館：協同と協力の動向』京都大学図書館情報学研究会発行, 68 p. (Alexandra Yarrow, Barbara Clubb and Jennifer-Lynn Draper, *Public Libraries, Archives and Museums: Trends in Collaboration and Cooperation* (IFLA Professional Reports: 108), The Hague, Netherlands, IFLA Headquarters, 2008).

川崎良孝・久野和子・村上加代子 (2008). 『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 405 p. (John E. Buschman and Gloria J. Leckie, eds., *The Library as Place: History, Community, and Culture*, Westport, Connecticut, Libraries Unlimited, 2006).

川崎良孝・川崎佳代子 (2009). ボストン公立図書館と日曜開館問題 (1864-1872 年). 京都大学生涯教育

学・図書館情報学研究, 7, 87-134.

- 子安増生 (監訳)・三宅真季子 (訳) (2008). コーエン (著) 『心理学者、心理学を語る』新曜社。(原書 Cohen, D., *Psychologists on psychology*. Hodder & Stoughton. 2004.)
- 久保 (川合) 南海子 (2008). 第 12 章 健全なエイジングにおける言語の理解と産出. 山本浩市・藤田綾子 (監訳) 『エイジング心理学ハンドブック』北大路書房, pp. 261-287. (J. E. Birren & K. W. Schaie (Eds.) *Handbook of the Psychology of Aging*.)
- 松本健三 (2008). 海外文献抄録-ブラックホール、得体の知れない空間、気づきの根本的变化. 精神療法, 34, 770-771. (原書 Hinton, L. (2007) Black holes, uncanny spaces and radical shifts in awareness. *Journal of Analytical Psychology*, 52, 433-447.)
- 中西美貴 (2008). IX-2 教育. 台湾女性史入門編纂委員会 (共訳) 台湾女性史入門. 人文書院. pp. 216-217.
- 中西美貴 (2008). IX-5 身体. 台湾女性史入門編纂委員会 (共訳) 台湾女性史入門. 人文書院. pp. 222-223.
- 中西美貴 (2008). IX-2 政治. 台湾女性史入門編纂委員会 (共訳) 台湾女性史入門. 人文書院. pp. 228-229.
- 西浦太郎 (2008). Kim, B. A. (著) "Starting on a Journey in search of Myself 本来の自分を探し求める旅をはじめて-アイデンティティの危機に陥った中年男性との箱庭療法 (事例研究)-. 箱庭療法学研究, 19, 95-107.
- 西浦太郎 (2008). Yamanaka, Y. (著). Ueber den Zaun geschaut "Kritzelgeschichten" (Die Erfindung des Gegenseitige Gekritzelei und Geschichtenerfindung mit Collage (MSSM + C) und Darlegung einiger Faelle), Sandspiel-Therapie, Heft 25 November 2008, pp.14-49.
- 小野文生 (2008). 社会. 藤川信夫 (監訳), クリストフ・ヴルフ (編) 歴史人間学事典第 1 巻. 勉誠出版. (Ch. Wulf hrsg. *Vom Menschen. Handbuch Historische Anthropologie*. Beltz Verlag, 1997)
- 小野文生 (2008). 性差. 藤川信夫 (監訳), クリストフ・ヴルフ (編) 歴史人間学事典第 1 巻. 勉誠出版. (Ch. Wulf hrsg. *Vom Menschen. Handbuch Historische Anthropologie*. Beltz Verlag, 1997)
- 荳阪直行 (監訳) (2008). ローズ (著) 『意識の脳内表現: 心理学と哲学からのアプローチ』培風館. (原書 Rose, D. (2006). *Consciousness: Philosophical, psychological and neural theories*. Oxford University Press.)
- 櫻井里穂 (2008). ゆるぎない基盤 乳幼児のケアおよび教育 EFA グローバルモニタリングレポート 2007. 浜野隆 (監訳) The Compelling Case for ECCE 「ECCE が有効である論拠」株式会社トライ.
- 塩原佳典 (2008). 本当のところ、教育には何ができるのか. スーザン・ロッシュ他 (著) "Journal of the JAPAN SKEPTICS" JAPAN SKEPTICS. (原論文 Susan Carol Losh, Christopher M. Tavani, Rose NJoroge, Ryan Wilke, and Michael Mcauley (2003). What Does Education Really Do? Educational Dimensions and Pseudoscience Support in the American General Public, 1979-2001. *Skeptical Inquirer*, 27(5), 30-35.)
- 高嶋雄介 (2008). 張日昇・徐潔・張雯 (著) Case Study Of Sandplay Therapy for An 11-Year-Old Girl with Selective Mutism. 日本箱庭療法学研究, 20, 75-88.
- 富樫公一 (監訳)・辻河昌登・富樫真子・古村香里 (訳) (2008). ビービー & ラックマン (著) 『乳児研究と成人の精神分析』誠信書房. (原書 Beebe, B. & Lachmann, F.M., *Infant Research and Adult Treatment: Co-constructing Interactions*. The Analytic Press. 2002.)
- 横井公一・辻河昌登 (監訳) (2008). ミッチェル (著) 『関係精神分析の視座』ミネルヴァ書房. (原書 Mitchell, S.A., *Hope and Dread in Psychoanalysis*. Basic Books. 1993.)

7. 辞典・事典

- 赤沢真世 (印刷中). 「総合的な学習の時間のカリキュラム」「授業の評価」. 田中耕治 (編) 『やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ: よくわかる教育課程』ミネルヴァ書房.
- Funahashi, S. (2008). Learning の項目執筆. *The Encyclopedic Reference of Neuroscience*. Springer Verlag.
- 岩井八郎 (2008). 「因果関係」, 「統計研究法」, 「マクロ分析/ミクロ分析」他、計 21 項目の執筆. 『現代教育事典』. あすろ出版.
- 楠見孝 (印刷中). 「批判的思考」の項目執筆. 海保博之 (編) 思考と感情の事典. 朝倉書店.

- 楠見孝 (印刷中). 文献解題 山梨正明『比喩と理解』, 茂呂雄二『なぜ人は書くのか』, 阿部純一ほか『人間の言語情報処理—言語理解の認知科学—』の項目執筆. 中村明ほか (編)『日本語 文章・文体・表現事典』朝倉書店.
- 楠見孝 (印刷中). 判断のバイアスの項目執筆. 乾敏郎・川口潤・吉川左紀子ほか (編) よくわかる認知科学 ミネルヴァ書房.
- 楠見孝 (印刷中) 大人の学び: 熟達化と市民リテラシー 渡部信一 (編) ・佐伯胖 (監修) 『「学び」の認知科学事典』大修館書店.
- 布柴靖枝 (2008). 「カウンセリング関係」「カウンセリングの限界」. 『産業カウンセリング辞典』金子書房, pp. 55.
- 佐藤卓己 (2008). 「宣伝」, 「メディア統制」の項目執筆. 歴史学事典 15 コミュニケーション 弘文堂.
- 佐藤弥・十一元三 (印刷中). 「前頭葉」, 「脳波」, 「海馬」, 「扁桃体」, 「小脳」, 「側頭葉」の項目執筆. 自閉症スペクトラム用語集 教育出版.
- 高見茂 (印刷中). 収支に関する制度、補助金の適正化、授業料等の学校納付金. 必携学校小六法 2010 年版 協同出版, pp. 905-907.
- 田中耕治 (2008). 教育評価の原理と課題、教育評価の機能と方法. 佐伯胖 (監修) 『学びとコンピュータ—ハンドブック』東京電気大学出版局, pp. 38-45.

8. 書評

- 稲垣恭子 (2008). 書評『社会学の名著 30』 京都新聞 4月20日.
- 井谷信彦 (2008). 紙芝居の裏表と『不気味なもの』の消息と. 『別冊子どもの文化』 NO.10, pp. 57-60.
- 伊藤良子 (2008). 書評: 乾吉佑著『医療心理学の手引き』. 精神療法, 34(2), 239-240.
- 岩井八郎 (2008). 書評『社会の見方、測り方 軽量社会学への招待』 (与謝野・栗田・高田・間淵・安田編、勁草書房, 2006年). 理論と方法, 23(1), 139-141.
- 岩井八郎 (2008). 書評アラン・クルーガー『テロの経済学』 (2008年9月21日日経新聞朝刊).
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.4. 看護展望, 33(5), 56-57.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.5. 看護展望, 33(6), 54-55.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.6. 看護展望, 33(7), 62-63.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.7. 看護展望, 33(8), 68-69.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.8. 看護展望, 33(9), 58-59.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.9. 看護展望, 33(10), 62-63.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.10. 看護展望, 33(11), 62-63.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.11. 看護展望, 33(12), 56-57.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.12. 看護展望, 33(13), 62-63.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.13. 看護展望, 34(1), 72-73.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.14. 看護展望, 34(3), 70-71.
- 皆藤章 (2008). ころをみつめる Vol.15. 看護展望, 34(4), 70-71.
- 鎌田東二 (2008). 書評「原日本の精神風土」. 日本経済新聞 2008年8月3日.
- 鎌田東二 (2008). 書評「空海の企て」. 時事通信 2008年11月22日配信.
- 金子勉 (2008). 書評 鳥居朋子 (著)『戦後初期における大学改革構想の研究』. 教育制度学研究, 15, 210-222.
- 駒込武 (2008). 書評「李省展著『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代—ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』」. 植民地教育史研究年報, 第10号, 皓星社.
- 明和政子 (2008). 書評 中道正之 (著) ゴリラの子育て日記〜サンディエゴ野生動物公園のやさしい仲間たち. 霊長類研究, 24(1), 34-35.
- 明和政子 (印刷中). 書評 西田利貞 (著) チンパンジーの社会「『チンパンジー用物差し』でヒトを測る」. いのちの科学「環境と健康」東方出版.
- 西岡加名恵 (2008). 書評「ピーター・カニンガム著、山崎洋子・木村裕三監訳『イギリスの初等学校カリキュラム改革—1945年以降の進歩主義的理想の普及—』」. 関西教育学会研究紀要, 8, 64-66.
- Saito, N. (2008) "Reconsidering the sense of the 'text-as-friend': Reply to Granger" (a response paper to

David Granger's Review of Saito's *The Gleam of Light*, *Studies in Philosophy and Education*.

- 佐藤卓己 (2008). 書評「綿拔豊昭・陶智子編著『絵で見る 明治・大正礼儀作法事典』」 読賣新聞 2008年1月6日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「川内康範『おふくろさんよ』」 読賣新聞 2008年1月21日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「佐藤優『私のマルクス』」 読賣新聞 2008年1月27日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「植村和秀『「日本」への問いをめぐる闘争』」 読賣新聞 2008年2月3日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「河田明久ほか『戦争と美術』」 読賣新聞 2008年2月10日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「稲垣太郎『フリーペーパーの衝撃』」 読賣新聞 2008年2月17日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「石川巧『「国語」入試の近代史』」 読賣新聞 2008年3月2日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「原克『流線形シンドローム』」 読賣新聞 2008年3月16日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「戸ノ下達也『音楽を動員せよ』」 読賣新聞 2008年4月6日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「T・ニッパダイ『ドイツ史を考える』」 読賣新聞 2008年4月21日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「名和小太郎『個人データ保護』」 読賣新聞 2008年4月28日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「竹内洋『社会学の名著30』」 読賣新聞 2008年5月7日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「阪本博志『「平凡」の時代』」 日本経済新聞 2008年5月18日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「潮木守一『フンボルト理念の終焉?』」 読賣新聞 2008年5月18日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「S・フリューシュトック『不安な兵士たち』」 読賣新聞 2008年5月25日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「青木貞茂『文化の力』」 読賣新聞 2008年6月15日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「青木宏一郎『軍国昭和 東京庶民の楽しみ』」 読賣新聞 2008年6月22日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「G・グラス『玉ねぎの皮をむきながら』& 芝健介『武装親衛隊とジェノサイド』」 読賣新聞 2008年7月14日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「有山輝雄『「中立」新聞の形成』」 読賣新聞 2008年7月27日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「朝日新聞「戦争と新聞」取材班『新聞と戦争』& 一ノ瀬俊哉『宣伝謀略ピラで読む、日中・太平洋戦争』& 西尾幹二『GHQ 焚書図書開封』」 読賣新聞 2008年8月3日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「小田嶋隆『テレビ救急箱』」 読賣新聞 2008年8月10日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「松田謙次郎編『国会会議録を使った日本語研究』」 読賣新聞 2008年8月17日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「栗原裕一郎『<盗作>の文学史』」 京都新聞 (共同通信社配信) 2008年8月17日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「D・C・ラージ『ベルリン・オリンピック 1936 ナチの競技』」 読賣新聞 2008年8月24日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「森永卓郎監修『物価の文化史事典』」 読賣新聞 2008年9月14日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「J・エーマー『近代ドイツ人口史』」 読賣新聞 2008年9月29日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「佐藤哲郎『大アジア思想活劇』」 読賣新聞 2008年11月2日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人』」 読賣新聞 2008年11月16日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「竹内洋『学問の下流化』」 産経新聞 2008年11月30日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「ヤング・ブルーエル『なぜアーレントが重要なのか』」 読賣新聞 2008年11月30日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「大島渚『大島渚著作集 2 敗者は影像をもたず』」 読賣新聞 2008年12月14日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2008). 書評「有本章編『変貌する日本の大学教授職』」 読賣新聞 2008年12月21日付朝刊.
- 佐藤卓己 (2009). 書評「メディア史の可能性:『占領期雑誌資料大系』を読む」 図書 (岩波書店), 3月号, 24-27.
- 杉本均 (2009). マレーシアの教育改革. 『アジアに学ぶ教育改革』日本教育新聞社.
- 田中每実 (2008). 書評「技術者の姿—技術立国を支える高専卒業者たち」. IDE, 502, 69-70.
- 田中康裕 (2008). 書評: エドワード・C・ウィットモント他著 (高尾浩幸訳) 「夢分析実践テキストブック」. 箱庭療法学研究, 20(2), 107-109.

辻本雅史 (2008). 書評「真壁仁著『近世後期の学問と政治』」 『日本の教育史学』第51集, pp.150-152.
上杉嘉見 (2008). 書評『カナダのメディア・リテラシー教育』 日本カナダ学会ニューズレター第81号.

9. 講演

足立幾磨 (2008). 社会的概念への比較認知科学的アプローチ—感覚統合的概念を用いて—. 日本心理学会第72回大会小講演, 2008.9.19.

蘆田宏 (2008). 二次運動の知覚と脳内機構. タマチカ研究会 2008年度第2回, 中央大学後楽園キャンパス, 2008.7.31.

*蘆田宏 (2008). fMRI 順応を用いたヒト運動視関連領域の研究. 日本知能情報ファジィ学会 脳と知覚研究部会 第10回研究講演会, 関西大学, 2008.7.24.

藤田和生 (2008). ヒト以外の動物におけるメタ記憶関連研究. 日本心理学会第72回大会ワークショップ「記憶のモニタリングとコントロール」話題提供, 北海道大学文学部, 札幌, 2008年10月19日.

*藤田和生 (2008). フサオマキザルの社会的知性. 日本動物心理学会第68回大会シンポジウム「比較認知の視点から人と動物の比較の意味を問う—鳥類、鯨類、霊長類の研究」話題提供, 常磐大学, 水戸, 2008年9月13日.

藤田和生 (2009). 動物たちのゆたかな心. 日本動物看護学会関西地区第2回例会講演, 千里ライフサイエンスセンター, 豊中, 2009年2月1日.

藤田和生 (2009). 欺き・協力・優しさ・ねたみ—フサオマキザルの社会的知性—. 関西実験動物研究会第101回例会講演, 京大会館, 京都, 2009年3月6日.

*Funahashi, S. (2008). Prefrontal cortex and decision making. 5th European Conference on Complex Systems, Jerusalem, Israel, 2008.9.15-17.

*Funahashi, S. (2008). Neural mechanisms of working memory in the prefrontal cortex. Workshop on "Working Memory", 5th European Conference on Complex Systems, Jerusalem, Israel, 2008.9.18-19.

*船橋新太郎 (2008). 注意欠陥/多動性障害と前頭葉機能. 第3回日本情動研究会, 名古屋市立大学病院ホール, 2008.10.19.

*船橋新太郎 (2008). 注意欠陥/多動性障害 (ADHD) の霊長類モデル. OIST 発達神経生物学ユニット プレ・コンフェレンス, OIST シーサイドハウス, 2008.11.28.

平石界 (2009). 人々は契約をどのように捉えるか: 思考の認知心理学的研究から. 一橋大学国際共同研究センター研究プロジェクト「契約」の複合領域研究総括シンポジウム—多角的な「契約」理解に向けて—, 一橋大学, 2009.2.4.

石井素子 (2008). シンポジウム「ふたつの学生文化研究会合同シンポジウム・学生文化の変容と終焉」コメンテーター, 京都大学, 2008.9.27.

板倉昭二 (2008). 赤ちゃんの心の発達: メタライジングの視点から. 日本学術会議3分科会連携シンポジウム「脳と心の発達」招待講演, 東京.

Itakura, S. (2008). Understanding self and others: Studies from nonhuman primates, robotics, and human children. Invited address at Zhejiang Normal University.

Itakura, S. (2008). Understanding self and others: Studies from nonhuman primates, robotics, and human children. Invited address at Zhejiang University of Sciences.

*板倉昭二 (2008). ロボットから知る心の発達. 第26回日本ロボット学会学術講演会 ロボティック・サイエンス 招待講演, 神戸.

*板倉昭二 (2008). メンタライジングの発達. 日本認知科学会第25回大会 招待講演, 京都.

Itakura, S. (2008). Social transmission: Whom do you trust? Invited Talk at Selective Trust Work Shop. (Kingston, Canada).

Itakura, S. (2009). Development of mentalizing in human infants. Invited lecture in "Emotional animals, Sensible humans" International GCOE symposium of Keio University.

*伊藤良子 (2008). 日本遊戯療法学会第14回大会シンポジウム「遊戯療法における関係性と言葉—子どもの心のエロス、ロゴス、タナトス」.

*伊藤良子 (2008). 日本心理臨床学会第26回大会シンポジウム「心理臨床学の新たな貢献を目指して」.

- *伊藤良子 (2008). 日本箱庭療法学会第 22 回大会シンポジウム「箱庭と愛と知」.
- *伊藤良子 (2008). 日本ユング心理学会第 1 回大会シンポジウム「日本における分析心理学と精神分析」.
- 伊藤良子 (2008). 学習院大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻開設記念シンポジウム「こころの発達を考える」.
- Iwai, H. (2008). Changing patterns of women's life course in the Japanese lost decade. Global COE Kickoff Symposium "Towards Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia." Kyoto University, October 25, 2008.
- 角野善宏 (2008). 指定討論者:「統合失調症者の住居空間構成法 (柳沢和彦発表)」。日本箱庭療法学会第 22 回大会, 愛知教育大学, 2008.10.26.
- 角野善宏 (2008). 講師:「日本箱庭療法学会地区研修会」。京都大学, 2008.5.11.
- 角野善宏 (2008). 講師:「日本箱庭療法学会地区研修会」。大阪府立大学, 2008.11.16.
- *Kaito, A. (2008). The Landscape Montage Technique. The 5th World Congress for Psychotherapy, Beijing, China, October 13, 2008.
- *鎌田東二 (2008). オムニバス講演「いま、なぜ『リクリエイト歩行文化』なのか」。人体科学会第 18 回大会, 関西大学, 2008.11.23.
- 河合俊雄 (2008). 日本における分析心理学. 河合隼雄先生追悼シンポジウム・日本における分析心理学 (日本ユング心理学会主催), 京都, 2008.4.20.
- 河合俊雄 (2008). 甲状腺疾患患者の語り: 病の自己性と他者性. シンポジウム病と臨床一病に生きる人間にみる臨床の知 (大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」・京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」共催), 京都大学, 2008.11.17.
- Kawakami, K., Takai-Kawakami, T., Kawakami, F., & Tomonaga, M. (2008). Development of smiles and laughter in young infants. XVIth International Conference on Infant Studies (ICIS2008), Regular Symposium "Smiling and laughter in infants in developmental and comparative perspectives", Vancouver, Canada, March 27-29, 2008.
- *川崎良孝 (2009). 最近の図書館研究の状況: 批判的図書館 (史) 研究を中心として. 桃山学院大学司書課程年報, 4, 15-30.
- *川崎良孝 (2009). 日米における全域サービスの歴史的展開過程. 上海図書館, 2009.3.12.
- 小森政嗣・長岡千賀 (2008). カウンセラーとクライアントの身体動作の相互影響過程. 日本心理学会第 72 回大会ワークショップ「カウンセリング対話を科学する(2)―言語表現と非言語行動―」(企画: 桑原知子), 2008.9.19.
- 子安増生 (2008). メタファー理解と「心の理論」の発達. 津田塾大学言語文化研究所講演, 津田塾大学, 2008年5月31日.
- 子安増生 (2008). 子どもは「心の理解」をどう発達させていくのか. 文部科学省「子どもの徳育に関する懇談会」(第2回), フロラシオン青山 (東京), 2008年9月10日.
- 子安増生 (2008). 心の理論の発達の研究: 四半世紀の節目を越えて. 発達心理学会認知発達理論分科会第 26 回例会, 京都府立大学, 2008年9月27日.
- 子安増生 (2008). 三つ子の魂、どんな魂?—幼児期の心の発達をさぐる. 甲南女子大学「子ども学」第 61 回講演会, 甲南女子大学, 2008年10月23日.
- 楠見孝 (2008). 批判的思考力を高める. 滋賀県立膳所高等学校, 2008.5.12.
- 楠見孝 (2009). 講演「広告と消費者心理: 単純接触効果による安心感とノスタルジア」「消費者心理を科学する: 認知心理学と行動経済学の接点」。日本基礎心理学会 2008 年度第 2 回フォーラム, 大阪大学, 2009.3.28.
- 桑原知子 (2008). 身近な人のこころを理解するために一家庭で, 学校で (精神保健講演会 講演記録). いしかわ精神保健 第 49 号別冊, pp. 2-17.
- 松下佳代 (2008). 何のための FD?—FD 義務化の時代に一. 獨協大学英語学科, 2008.4.30.
- 松下佳代 (2008). パフォーマンス評価 (PA) —子どもの思考と表現を評価する—. 酒田市教育研究所, 2008.6.25.
- 松下佳代 (2008). PISA リテラシーの意味. 宇都宮大学教育学部附属中学校, 2008.6.26.
- 松下佳代 (2008). 大学教員と FD. 大谷大学, 2008.7.16.

- 松下佳代 (2008). 多層的な FD ネットワーク形成. 京都高等教育研究センター, 2008.7.26.
- 松下佳代 (2008). FD のこれまでとこれから—FD 義務化の時代—. 京滋私立短期大学協会, 2008.9.26.
- Matsuzawa, T. (2008). Chimpanzee mind: a combining effort of fieldwork and laboratory work. Decade of the Mind3, Des Moines, USA, May 7, 2008.
- *Matsuzawa, T. (2008). Comparative cognitive science: trade-off theory of memory and symbolization in humans and chimpanzees. ASSC 12th Annual Meeting, Taipei, Taiwan, June 21, 2008.
- *Matsuzawa, T. (2008). Chimpanzee mind: evolution of human mind viewed from panthropology. XXIX International Congress of Psychology, Berlin, Germany, July 24, 2008.
- *Matsuzawa, T. (2008). Trade-off theory of memory and symbolization in humans and chimpanzees. International primatological society XXII, Edinburgh, UK, August 5, 2008.
- Matsuzawa, T. (2008). Chimpanzee mind: studies in the field and the laboratory. A talk to the Center for Cognitive Sciences at the University of Minnesota, Minneapolis, USA, September 22, 2008.
- *松沢哲郎 (2008). チンパンジーの親子と文化. 第 51 回日本形成外科学会総会・学術集会, 名古屋, 2008.4.10.
- *松沢哲郎 (2008). チンパンジーから見た世界. 大谷学会春期公開講演会, 大谷大学, 2008.5.23.
- 松沢哲郎 (2008). 人間の心と体の進化的基盤. 日本学術会議シンポジウム「心と身体から教育を考える」, 京都大学, 2008.6.1.
- *松沢哲郎 (2008). チンパンジーから見た世界: 比較認知科学のめざすもの. 日本動物心理学会第 68 回大会, 常磐大学, 2008.9.14.
- 松沢哲郎 (2008). チンパンジーの親子と文化. スーパーサイエンスハイスクール (SSH), 福井県立藤島高等学校, 2008.10.31.
- 松沢哲郎 (2008). アフリカの森とチンパンジー研究の未来. チョゴリザ初登頂 50 周年記念シンポジウム「パイオニアワークとしての登山・探検・フィールドサイエンス」, 京都, 2008.11.3.
- *松沢哲郎 (2008). チンパンジーの親子と文化. 医療の質・安全学会第 3 回学術集会, 東京, 2008.11.22.
- 松沢哲郎 (2008). チンパンジーの親子と文化. スーパーサイエンスハイスクール (SSH), 三重県立津西高等学校, 2008.12.6.
- 松沢哲郎 (2008). チンパンジーの親子と文化. 京都文化会議高校生フォーラム, 京都大学, 2008.12.9.
- *Matsuzawa, T. (2009). Chimpanzee mind: a combining effort of fieldwork and laboratory work. 2009 AAAS Annual Meeting, Chicago, USA, February 13, 2009.
- Matsuzawa, T. (2009). Cognitive development in chimpanzees in the wild and in the laboratory. ESF-JSPS Frontier Science Conference Series for Young Researches: Social Cognitive Neuroscience, Maratae, Italy, February 28, 2009.
- 松沢哲郎 (2009). 人間の心の進化的基盤: チンパンジーの研究から. 第 30 回全国大学メンタルヘルス研究会「現代の青年の精神的危機と対応」, 東京, 2009.1.20.
- 松沢哲郎 (2009). チンパンジーの親子と文化. 菊里高等学校文化講演会, 名古屋, 2009.3.17.
- 溝上慎一 (2008). 講演「どのような学習タイプが学生の成長に寄与するか—法制度遵守ではない単位制度の実質化を求めて—」. 創価大学教育・学習活動支援センター, 2008.6.17.
- 溝上慎一 (2008). 講演「大学で何を学のか—現代の大学生の心理と効果的な授業実践—」. 筑波大学大学院人間総合科学研究科, 2008.7.16.
- 溝上慎一 (2008). 講演「現代大学生の人生形成と学び—大学はこれにどう応えようとしているか」. ANA 総合研究所, 2008.9.11.
- 溝上慎一 (2008). 講演「社会との接続をにらんだ学校教育の使命—にらみすぎではできない学生の学び—」. 私学次世代教育研究会, 2008.10.30.
- *溝上慎一 (2008). 講演「対話的自己論—ジェームズ以来の自己論の限界を超えて現代青年期を理解する—」. 日本青年心理学会第 16 回大会, 横浜国立大学, 2008.11.8.
- 溝上慎一 (2008). 講演「京都大学における「新入生向け少人数セミナー (通称ポケットゼミ)」の紹介と今後の課題」. 千葉大学普遍教育センター, 2008.11.14.
- 溝上慎一 (2008). 講演「学校教育を通して学生の何を育てているのか—学校教育と社会・産業界との接続—」. 学研進路指導研究会, 2008.11.22.

- 溝上慎一 (2008). 講演「大学で学ぶことの意味とキャリア形成」. 愛媛県立医療技術大学, 2008.12.16.
- 溝上慎一 (2008). 講演「相互研修型を捨てない FD を求めて」. 愛媛県立医療技術大学, 2008.12.16.
- 溝上慎一 (2008). 講演「大学ならびに大学院教育における FD 活動と大学院生に対する教育方法についての考え方について」. 愛知医科大学看護学部, 2008.12.20.
- 森本洋介 (2008). トロントの初等・中等教育における最近のメディア・リテラシー教育の取り組み. 国語メディア研究会, 川崎市大山街道ふるさと館, 2008.5.24.
- 森本洋介 (2008). スキャニング・テレビジョンを使用したメディア・リテラシー教育の実践. 大阪市地域人権教育委員会, 大阪市立上町中学校, 2008.4.23.
- 森本洋介 (2008). メディア・リテラシー教育における子どものパフォーマンス評価: トロントでの取り組みから. FCT メディア・リテラシー研究所「鈴木みどりメディア・リテラシー研究基金」助成者発表会, 横浜市市民活動支援センター, 2008.6.14.
- 森本洋介・西村寿子 (2008). メディア・リテラシー入門—参加と対話を通してメディアを読み解く. 大阪市教育センター主催人権教育推進教職員研修・実践講座, 大阪市教育センター8 階研修室, 2008.8.7.
- 森本洋介 (2008). メディア・リテラシーと人権. Save the Children Japan キャパビル, 市民国際プラザ, 2008.8.22.
- 森田健一 (2008). 生徒の見立てについて. 桃映中学校校内研修会, 2008.8.1.
- 森田健一 (2009). 教師のメンタルヘルスと生徒への対応. 綾羽高等学校校内研修会, 2009.3.11.
- *明和政子 (2008). サルまねが支えるヒトの文化. ソフィア京都フォーラム 2008 「いま、サルから学ぶこと—子育て・遊び・文化」(京都新聞社主催)(2008年5月17日, 京都, 同志社大寒梅館ハーディーホール). 京都新聞5月16日, 6月15日掲載.
- *Myowa-Yamakoshi, M. (2008) Early social cognition in chimpanzees. The international symposium on “Comparative Cognitive Science 2008, “Primate Origins on Human Mind” (May, 28-30th, 2008, Kyoto University Shiran-kaikan, Kyoto, Japan).
- Myowa-Yamakoshi, M. (2008) Evolutionary Foundation and Development of Imitation. Special lecture, “Life Long Learning”, The 2nd International Workshop on Multi Cultural Studies: Research Collaboration between the University of Vienna and Kyoto University (July 7, 2008, Universitätsstrasse 7, Wien.)
- Myowa-Yamakoshi, M., Tomonaga, M., Tanaka, M., & Matsuzawa, T. (2008). “The two-month revolution” in social cognition in chimpanzees (*Pan troglodytes*). XXII Congress of the International Promatological Society, Symposium “Social cognitive development in monkeys, apes and humans”, Edingburgh, Scotland, UK, August 3-8, 2008. (Abstract: *Primate Eye*, No.96, p.36).
- *明和政子 (2008). 胎児・新生児における知覚—運動マッチング能力とその進化的基盤. 第10回日本進化学会大会 (2008年8月22-24日, 東京, 東京大学総合文化研究科). プログラム・要旨集: 167.
- *明和政子 (2008). “自己認識”の比較研究の今後. 日本動物心理学会第68回大会 (2008年9月13-15日, 茨城, 常磐大学). プログラム:16.
- *明和政子 (2008). こころの誕生と進化—ヒトらしさの起源を探る. 岐阜県白川町合同家庭教育学級講演会 (2008年11月29日, 岐阜県白川町, 白川町町民会館).
- *明和政子 (2008). こころの誕生と進化—人間らしさの起源を探る. 大阪市教育センター幼児教育研修会 (2008年12月12日, 大阪市西区, 大阪市教育センター).
- *明和政子 (2009). 心の誕生と進化—ヒトらしさの起源を探る. 第15回未熟児新生児医療研究会 (2009年2月21日, 京都市南区, 京都テルサ).
- 長岡千賀・渡部幹 (2008). カウンセラーの相槌的表現. 日本心理学会第72回大会ワークショップ「カウンセリング対話を科学する(2)—言語表現と非言語行動—」(企画: 桑原知子), 2008.9.19.
- 西平直 (2008). 『伝書』を書く世阿弥から見た複式夢幻能—「離見の見を手掛かりとして」. 大阪府立大学公開シンポジウム, 2008.11.9.
- 西平直 (2008). 死んでゆく不思議・生まれてくる不思議—「死と誕生」をワンセットに学ぶこと. 山梨県教員研究会, 2008.11.20.
- 西平直 (2008). 子どもの心の中の死. 日本学術会議公開シンポジウム「現代社会と死生観」, 日本学術会

議講堂, 2008.11.29.

西平直 (2008). 教育はカマラを幸せにしたか. 人間主義心理学会, 2008.12.6.

*西岡加名恵 (2008). 学校におけるカリキュラム改善—『逆向き設計』論を踏まえて—. 日本教育方法学会 第44回大会公開シンポジウム, 愛知教育大学, 2008年10月11日.

布柴靖枝 (2008). 人生を振り返る～死と再生のワーク. 日本電話相談学会京都ワークショップ, 京都・関西セミナーハウス, 2008.6.27-29.

布柴靖枝 (2008). 家族療法への誘い. 日本電話相談学会第21回大会, 松島一の坊, 仙台, 2008.9.14.

布柴靖枝 (2008). 患者が‘心の風邪’をひいてしまったら～対応の方法. 日本臨床矯正歯科医会第36回大会, 静岡, 2008.10.14.

*小原優貴 (2009). 変貌する現代インドー社会・文化・教育. 兵庫県播磨高等学校京大知的好奇心学 (遠隔地デジタル授業), 兵庫県播磨高等学校遠隔教室, 2009年2月21日.

*荳阪直行 (2008). Aesthetic Perception Session, Neural aesthetics of beauty: An event-related fMRI study. ICP Berlin, チェアパーソン. 2008.7.25.

*荳阪直行 (2008). 情報処理学会関西支部大会特別講演「色彩記憶の脳内表現」. 京都リサーチパーク, 2008.10.24.

*荳阪直行 (2008). 京都府作業療法学会特別講演「前頭葉の認知心理学」. 京都大学医学部, 2008.10.26.

大塚雄作 (2008). FD 義務化時代を切り拓く「共に創る FD」への挑戦. New Education Expo 2008 in Osaka, 2008.6.19.

大塚雄作 (2008). 授業「改善」と「組織的」FDのあり方 — FD 義務条項をどう捉えるか. IPU 環太平洋大学, 2008.7.8.

大塚雄作 (2008). ミニ講義1 大学授業の現在 京都大学大学院生のための教育実践講座 2008～大学でどう教えるか～. 京都大学, 2008.8.5.

大塚雄作 (2008). FD 義務化と授業改善 — FD 共同体の形成に向けて. 明治薬科大学, 2008.9.1.

大塚雄作 (2008). FD の具体的活動と教育評価について. 藍野大学, 2008.9.17.

大塚雄作 (2008). 大学院の FD と評価 — 新たなる学問共同体の形成に向けて. 同志社大学総合政策科学研究科, 2008.10.20.

大塚雄作 (2008). 共に創る FD への挑戦 — 学問学習共同体の形成に向けて. 奈良教育大学, 2008.10.30.

大塚雄作 (2008). 授業評価から授業改善へ — FD 共同体の形成に向けて. 京都府立大学, 2008.11.5.

大塚雄作 (2008). FD の義務化と大学間ネットワーク (Mandatory FD in Higher Education and Inter-University Network in Japan). NIME 国際シンポジウム 2008 『高等教育における効果的 e ラーニング実施のための長期的戦略ビジョン: Long-Term Strategic Visions of e-Learning Implementations in Higher Education』, 日本科学未来館みらい CAN ホール, 2008.11.7.

大塚雄作 (2008). 対話を根幹とする自学自習の創出 — 新たなる学問共同体の形成に向けて. 京都大学農学部, 2008.11.25.

大塚雄作 (2008). 授業アンケート結果報告 — 2007 後期-2008 前期. 第4回工学部教育シンポジウム, 京都大学工学部, 2008.12.10.

大塚雄作 (2008). 授業評価の解釈と活用 — FD 共同体の形成に向けて. 大阪歯科大学, 2008.12.11.

大塚雄作 (2009). 授業評価に基づく授業改善 — FD 共同体の形成に向けて. 滋賀医科大学, 2009.1.21.

大塚雄作 (2009). FD 推進主体を問う (Who Promotes Faculty Development?) 日本の FD の未来 — Building the Core in Faculty Development. 京都大学, 2009.1.25.

大塚雄作 (2009). 共に創る FD の発想と評価 — 新たなる学問学習共同体の形成に向けて. 兵庫教育大学, 2009.1.28.

大塚雄作 (2009). 共に創る授業改善への発想 — 学びの共同体の形成に向けて. 三重県立看護大学, 2009.2.4.

大塚雄作 (2009). 共に創る FD の発想と評価 — 新たなる学問学習共同体の形成に向けて. 6年制薬学教育広域総合連携, 2009.2.7.

大塚雄作 (2009). 共に創る FD の発想と評価 — 新たなる学問学習共同体の形成に向けて. 四国学院大学, 2009.2.27.

大塚雄作 (2009). 未来を担うプレ FD の創造 — 大学院生大学教員準備研修のあり方と課題. プレ FD 分科会・コーディネーター, 第14回 FD フォーラム, 龍谷大学, 2009.3.1.

- 大塚雄作 (2009). 学士課程教育における質保証と FD. セミナー『高等教育機関の実務教育育成』ACPA & 早稲田大学人間科学学術院共催, 2009.3.12.
- 大塚雄作 (2009). 授業評価から FD 評価へ. 第 2 回関西地区 FD 連絡協議会主催イベント「公開研究会」司会, 京都大学, 2009.3.19.
- 大塚雄作 (2009). 第 15 回大学教育研究フォーラムシンポジウム「FD の学内組織化と大学間連携」司会, 京都大学, 2009.3.20.
- 大山泰宏 (2008). FD 講演「なぜ今 FD なのか?」. 福岡女学院看護大学, 2008.6.21.
- 大山泰宏 (2008). FD 講演「授業評価をめぐる諸問題」. 福岡女学院看護大学, 2008.11.15.
- 大山泰宏 (2008). 学生指導担当職員研修「思春期・青年期の依存行動について」. 福井高専, 2008.7.28.
- 大山泰宏 (2008). 学生相談室シンポジウム「学生理解のための視点: 抑圧モデルから解離モデルへ」. 甲南大学, 2008.7.26.
- 大山泰宏 (2008). 臨地実習指導者会議「看護学生の理解と指導者の関わり: 自己表現を促すためには」. 京都第二日赤十字病院, 2008.12.25.
- *尾崎真奈美 (2008). スピリチュアリティの二つの位相: 聖なるものと全体なるもの. 第 13 回北摂四医師会全人医療研究会, 大阪, 2008.7.12.
- 尾崎真奈美 (2008). 日総研看護学方法論セミナー: 「こころ」の研究手法. 東京, 2008.7.26-27.
- 尾崎真奈美 (2008). 生きる喜びへの回帰: スピリチュアルヘルス教育カリキュラムの紹介. 相模原市市民公開講座, 神奈川, 2008.8.1.
- Sadato, N., Morita, T., Itakura, S. (2008). The role of Neuroimaging in Developmental Social Psychology. IMBES Workshop on "Neuroeducation: New Perspectives in Teaching and Learning" (Erice, Sicily, Italy).
- *Saito, N., & Standish, P. (2008). Transcending borders from within: Cavell and apolitical politics of interpretation. The international colloquium (University of Stockholm, Stockholm, May 21, 2008) (Invited lecture) (English).
- *Saito, N. (2008). Beyond monolingualism: Philosophy as translation and the understanding of *other* cultures. The international colloquium (Malardalen University, Eskilstuna, Sweden, May 16, 2008) (Invited lecture) (English).
- 櫻井芳雄 (2008). ブレインマシン・インタフェースの現状と課題. 松本仁介医学振興基金シンポジウム, 京都, 2008.12.20.
- 櫻井芳雄 (2008). 高齢脳が持つ本当の力～ブレインマシン・インタフェースで探る～. CREST「脳の機能発達と学習メカニズムの解明」第 4 回公開シンポジウム, 東京, 2008.11.29.
- 櫻井芳雄 (2008). ブレインマシン・インタフェースでわかる高齢脳の力. 第 16 回脳の世紀シンポジウム, 東京, 2008.9.4.
- 櫻井芳雄 (2008). ブレインマシン・インタフェースが示す脳の情報コーディング. BICT ワークショップ, 浜松, 2008.5.13.
- 佐藤卓己 (2008). 基調講演「インターネット時代のテレビ的教養」, 西江大学言論文化研究所設立 40 周年記念講演会, 韓国・西江大学言論文化研究所, 2008.6.27.
- 佐藤卓己 (2008). 講演「メディア史から見る輿論と世論」, 読売新聞社メディア研究会, 読売新聞社国際サロン, 2008.10.21.
- 佐藤卓己 (2008). 講演「テレビ的教養をめぐる」, 愛宕山フォーラム, NHK 放送文化研究所, 2008.12.10.
- 佐藤卓己 (2008). 講演「日本におけるテレビ的教養の系譜」, 国際ワークショップ「東アジアにおける視聴覚メディアの相互連関」, 上海社会科学院 113 会議室, 2008.12.28.
- 佐藤弥 (2008). 表情と視線の交互作用: 心理学と神経科学の知見. 特定領域研究「実験社会科学」集団班ワークショップ (2008 年 3 月, 札幌).
- 佐藤弥 (2008). 表情と視線の交互作用: 心理学と神経科学の知見. 第 22 回感情と情動の研究会 (2008 年 8 月, 京都).
- *清家理 (2008). 第 12 回「病院から在宅医療 転換期における戦略」. 第 12 回高齢者介護・医療・看護フォーラム講演, あいち健康プラザホール, 2008.11.15.
- 清水亜紀子 (2008). 筋ジストロフィー患者の生きる体験世界に学ぶ「臨床の知」. シンポジウム「病と臨

- 床一病に生きる人間にみる臨床の知」話題提供, 京都大学, 2008.11.17.
- 荘島幸子 (2008). 発達障害って何? アドレッセンス (世田谷区が助成する思春期問題を抱える任意ボランティア団体) 講演, 世田谷区砦会館.
- *Sugiman, T. (2008). Theory of construction of social representations. The 9th International Conference on Social Representations, Bali, Indonesia, June 30-July 5, 2008.
- *Suzuki, S. (2008). Sein und Werden. Poiesis in Gesten. Sonderforschungsbereich Kulturen des Performativen. Freie Universitaet Berlin, Haus der Kulturen der Welt, Germany 4-6 Dezember 2008.
- 鈴木晶子 (2009). 教養と倫理をつなぐもの—タクトから考える. 京都大学シンポジウム「倫理への問いと大学の使命」, 時計台記念館国際交流ホール, 2009.3.13.
- 高見茂 (2008). これからの学校経営. 京都市教育委員会, 管理職研修, 2008年7月.
- 高見茂 (2008). 学校の危機管理. Eフォーラム研修会, 2008年8月.
- 高見茂 (2008). 高等教育の財務戦略—格付けの意義、英国の事例に学ぶ. 京都大学事務職員研修会, 2008年10月.
- 高瀬泉 (2008). 死体検案書の書き方. WATCH in Shiga (滋賀県医師会主催, 臨床研修医1年目研修), 2008年6月1日.
- 高瀬泉 (2008). 児童虐待・嬰兒死体の視かた. 滋賀県警察本部検視実務専科講義, 滋賀, 2008年7月17日.
- 高瀬泉 (2009). 児童虐待・嬰兒死体のみかた. 滋賀県警法医研修講演, 滋賀県警察本部, 2009.2.25.
- *田中耕治 (2008). 学力調査における質と平等の問題—「真正の評価」論からみえてくるもの—. 世界新教育学会 WEF 国際教育フォーラム, 武庫川女子大学, 2008.6.7.
- 田中耕治 (2008). 質的に高い学力を求めて. 千曲市教育委員会, 千曲市校長会, 2008.8.19.
- 田中耕治 (2008). 学力と評価の新しい地平. 第50回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会, 京都教育大学, 2008.10.24.
- 田中耕治 (2008). 教育現場に生きる教育実践力の構想. 特色GP・専門職GPシンポジウム, 鳴門教育大学, 2008.12.13.
- 田中耕治 (2009). 学力と評価の新しい地平—質の高い学力を求めて—. 香川大学教育学部附属高松小学校初等教育研究発表会, 2009.2.6.
- 田中正之 (2008). 子どもの育ち方、学び方 ~人間とチンパンジーを比べてみると~. ことばのための発達心理学連続研修会, 京都市, 2008.7.13.
- 田中正之 (2008). 幼児期の成長発達 ~チンパンジー研究からのヒント~. 障害児等療育支援事業 療育支援研修会, 半田市, 2008.9.2.
- 田中每実 (2008). 基調講演: 高等教育機関のFD義務化にあたって, 大学コンソーシアム石川, 2008.8.
- 田中每実 (2008). 学士課程教育改革への提言, 愛媛大学, 2008.10.
- 田中每実 (2008). 高等教育機関とFD活動. 福井高専, 2008.11.
- 田中康裕 (2008). 双子と分身: 同一性と差異の結合をめぐる. 日本ユング心理学会 2008年度夏学期セミナー, 東京・総評会館, 2008.9.15.
- *辻本雅史 (2008). 思想史研究における『知の伝達』とメディア—江戸思想を素材として—. 第7回東アジア文化研究会, 法政大学, 2008.10.10.
- 辻本雅史 (2008). 貝原益軒の学問世界—近世の学問と民衆—. 懐徳堂記念会, 誓願寺 (大阪市), 2008.4.5.
- 辻本雅史 (2008). 石田梅岩の思想的地平—町人が生きる根拠を目指して—. 大阪商工会議所, 2008.9.26.
- 辻本雅史 (2008). 日本の大学院教育の現状と課題. 京都大学・北京師範大学学術交流 2008シンポジウム II, 北京師範大学, 2008.12.4.
- Tomonaga, M., & Imura, T. (2008). Pictorial depth perception: From the comparative-developmental perspective. Keio University Global COE program "Center for Advanced Research on Logic and Sensibility", The first general symposium, "Logic of Shadow", Tokyo, January 11, 2008.
- Tomonaga, M., & Bard, K. A. (2008). Introduction to the Regular Symposium "Smiling and laughter in infants in developmental and comparative perspectives". XVIth International Conference on Infant Studies (ICIS2008), Regular Symposium "Smiling and laughter in infants in developmental and comparative perspectives", Vancouver, Canada, March 27-29, 2008.
- Tomonaga, M. (2008). Perceptual bases of social cognition in chimpanzees: Comparative-developmental

- approach. The International Symposium on Comparative Cognitive Science 2008 “Primate Origins of Human Mind”, Kyoto, Japan, 28-31 May, 2008.
- Tomonaga, M. (2008). Looking through the chimpanzee mind: Perspectives from comparative cognitive developmental neuroscience. The 31st Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society (Neuroscience 2008), Symposium “Revolution towards next generation’s primate brain research (霊長類脳研究の次世代への転回)”, July 9-11, 2008, Tokyo. (Abstract: Neuroscience Research, 61 (Supplement 1), S15).
- Tomonaga, M., Mizuno, Y., & Kano, F. (2008). Probing into the Emotional World of Chimpanzees (*Pan troglodytes*). XXII Congress of the International Primatological Society, Symposium “Facial expression in primates: Measurement, meaning and function”, Edinburgh, Scotland, UK, August 3-8, 2008. (Abstract: *Primate Eye*, No.96, p.307).
- Tomonaga, M. (2008). Perceptual bases for social cognition in chimpanzees. International Workshop on Comparative Cognitive Science “Minds in the Forest and Under Water: Comparative Cognitive Science on Chimpanzees and Dolphins”, Port of Nagoya Public Aquarium, September 12, 2008.
- 友永雅己 (2008). こころを読むことの進化—比較認知科学からの示唆—. 日本発達心理学会第 19 回大会シンポジウム『「こころを読む」ことの発達・進化・障害』, 大阪市, 2008 年 3 月 19-21 日. (抄録: 発表論文集, p.120)
- 友永雅己 (2008). チンパンジーに“教育”はあるのか—チンパンジー認知発達研究プロジェクトから—. 慶應義塾大学グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」(後援), シリーズ「教育の進化的基盤をさぐる」第 2 回, 慶応大学, 2008 年 5 月 13 日.
- 友永雅己 (2008). チンパンジーのこころの発達. 京都大学霊長類研究所京都公開講座, 京都大学, 2008 年 5 月 31 日.
- 友永雅己 (2008). チンパンジーにおける視覚認知—社会的刺激の処理を中心に—. 生理学研究所研究会「視覚研究の融合を目指して—生理、心理物理、計算論」, 自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンター, 2009 年 6 月 12-13 日.
- 友永雅己 (2008). 日本の霊長類学 (と日本の心理学の未来). 日本心理学会第 72 回大会シンポジウム S18「輸入学問から創新へ: 日本の心理学の未来」, 北海道大学, 2008 年 9 月 21 日.
- 友永雅己 (2008). 動物の行動を調べる<総論>—特に観察方法を中心に—. 展示動物の行動調査に関する体験型研修会, 名古屋市東山動物園, 2008 年 11 月 7 日.
- 友永雅己 (2008). チンパンジーの視覚認知における社会的刺激の影響—視線の影響を中心に—. 京都大学霊長類研究所 2008 年度共同利用研究会「第 4 回犬山比較社会認知シンポジウム(iCS2-IV)」, 京都大学霊長類研究所, 2008 年 12 月 19-20 日.
- 内田由紀子 (2008). 文化心理学実験の基礎: 「比較」を考える. 実験社会科学サマースクール, 早稲田大学, 2008.9.8.
- 内田由紀子 (2008). パネルディスカッション「普及は心と心をつなぐ」. 普及事業 60 周年記念シンポジウム, 近畿農政局, 2008.10.2.
- 内田由紀子 (2008). 行動科学の文化心理学的パースペクティブ. 京都大学大学院医学研究科平成 20 年度社会健康医学系専攻シンポジウム「公衆衛生、臨床医学と社会科学」, 京都大学医学研究科, 2008.10.25.
- 内田由紀子 (2008). 日本人の心と子どもたちの未来. NPO 法人高槻オレンジの会, 2008.10.26.
- 内田由紀子 (2008). パネルディスカッション「人の心を動かす普及活動とは—過去の成功事例から学ぶ—」. 平成 20 年度滋賀県改良普及職員大会, 滋賀県, 2008.12.23.
- Uchida, Y. (2009). Culture and emotion: Happiness and interpersonal relationships in the United States and Japan. Department of Psychology, University of Washington, the United States. 2 Feb, 2009.
- *Ueno, T., Allen, R. J., Baddeley, A. D., Hitch, G. J., & Saito, S. (2008). When binding of two visual features falls apart in working memory: An approach from the suffix paradigm. An Invited Talk for the 2nd ESRC Seminar on Working Memory and Binding, The Hawthorns in the University of Bristol, UK, 2008.9.1.

- *Watabe, M. & Ban, H. (2008). Trust Information Processing in Human Brain: an fMRI Study. *Center for the Socieliaty of Mind International Conference "Cultural Neuroscience"*, May 24-25 2008. Hokkaido University, Sapporo, Hokkaido, Japan.
- 渡邊洋子 (2008). 成人の教育は何が大切なのか. 日本経営協会第 9 期人材マネジメント研究会講師, 大阪科学技術センター, 2008.6.5.
- 渡邊洋子 (2008). 中堅看護師のキャリアトランジション—生涯学習の観点から—. 学び直し教育プログラム特別講演講師, 東京医科歯科大学, 2008.9.27.
- 渡邊洋子 (2008). 指定討論者から. 日英国際シンポジウム「卒後医学教育の新たな発展をめざして—Work-Based Learning からの提起」, 京都大学芝蘭会館, 2008.11.13.
- やまだようこ (2008). 子どもを見る視点とナラティブ・アプローチ. 京都大学大学院医学研究科, 2008.6.29.
- やまだようこ・野口裕二・木原活信・荻野美佐子・田淵六郎 (2008). ナラティブからなにが見えるか—学際的アプローチの可能性. 上智大学総合人間科学部・学内共同研究グループ, 上智大学, 2008.10.10.
- Yamada, Y. (2008). Linear progressive model and the Ryoko model. Narrative and Self 講演会. 立命館大学, 2008.11.18.
- やまだようこ (2008). ナラティブに基づいた心的世界の研究法. 広島大学教育学研究科, 2008.11.22.
- 山本洋紀 (2009). 脳の研究からみた色彩. 日本色彩学会関西支部第 11 回カラーコーディネーターシンポジウム, 大阪市立大学, 2009.3.28.
- 矢野智司 (2008). 東京芸術大学特別講演「自分の鼓動が世界の鼓動のように感じられるとき—美術教育がなぜ必要か—について逆上がりをとおして考える」. 東京芸術大学, 2008.12.6.
- 矢野智司 (2008). 動物観研究会特別講演「宮澤賢治作『なめとこ山の熊』の熊は何語を喋っていたか—『逆擬人法』という名の擬人法」. 東京農工大学, 2008.12.7.
- 吉川左紀子 (2008). 協同農業普及事業 60 周年記念シンポジウム講演「信頼形成のコミュニケーション」, 2008.10.2.

10. 受賞歴

- Hattori, Y. (2008). International Symposium "Foundations of Human Social Behavior" Travel Award (黒島妃香、藤田和生との共同受賞).
- 隼瀬悠里 (2008). 平成 20 年度京都大学京友会研究助成金受領.
- 木村洋太 (2008). Body Representation Workshop Best Poster Prize (五十嵐由夏, 野村光江, 市原茂, 吉川左紀子との共同受賞).
- 李霞 (2008). 平成 20 年度京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」海外短期留学助成金受領.
- 李霞 (2008). 京都大学教育学部同窓会国際賞受賞.
- 鍋田智広 (2008). 2008 年度日本心理学会優秀論文賞 (目久田純一・神垣彬子・松井剛太・朴信永・山崎晃との共同受賞).
- 中村哲之・渡辺創太・別役透・藤田和生 (2008). 日本基礎心理学会第 27 回大会優秀発表賞受賞 (タイトル: ニワトリにおける非感性的補間知覚の検討. 発表番号: 1P34).
- 齋木潤 (2008). 日本心理学会優秀論文賞「動的な変形に対する視触覚間同時性判断」(高橋康介との共同受賞).
- 佐藤弥 (2009). Inc. Marquis Who's Who "Who's Who in the World 2009" 掲載.
- 田村綾菜 (2008). 平成 20 年度発達科学研究教育奨励賞 (発達科学研究教育センター).
- Ueno, T. (2008). Overseas Research Scholarship of Overseas Research Students Awards Scheme 受賞.
- Ueno, T. (2008). Overseas Study Fellowship of The Nakajima Foundation in Japan 受賞.
- 山本真也 (2008). 第 24 回日本霊長類学会大会優秀口頭発表賞受賞 (2008 年 7 月 5 日).
- 山梨裕美・松沢哲郎 (2008). 第 24 回日本霊長類学会最優秀ポスター発表賞.

11. 社会的貢献等（教員に限定）

- 赤沢真世：京都市立高倉小学校における学力向上のための授業づくりに関する共同研究に参加（英語表現力部に所属）（4月～12月）、寝屋川市立田井小学校における授業研究会に参加（4月～12月）
- 蘆田宏：日本基礎心理学会理事、日本視覚学会幹事
- 藤田和生：日本学術会議連携会員、日本動物心理学会常任理事、動物心理学研究編集委員長、日本心理学会専門別代議員、日本心理学会国際委員、日本心理学会国際賞選考委員会委員長、関西心理学会常任委員、大学院教育改革支援プログラム委員会分野別審査部会専門委員、京都大学野生動物研究センター連携協議員、Primates 編集委員、The Austrian Science Fund (FWF) 査読委員
- 平石界：日本人間行動進化学会運営委員、Human Behavior and Evolution Society 第20回大会（京都大学）実行委員
- 稲垣恭子：日本教育社会学会紀要編集委員、日本学術振興会連携委員、京都府社会福祉審議会委員
- 石川裕之：日本比較教育学会幹事
- 板倉昭二：産経赤ちゃん学講座講師（産経新聞社大阪・東京）
- 伊藤良子：日本遊戯療法学会常任理事、日本遺伝カウンセリング学会評議員
- 岩井八郎：日本教育社会学会理事（2005～06年度、2007～08年度）・会計部長（2007～08年度）、『ソシオロジ』（社会学研究会）編集委員（2006～09年度）、『社会学評論』（日本社会学会）専門委員（2007～09年度）、『家族社会学研究』（日本家族社会学会）専門委員（2004～06年度、07～09年度）、『フォーラム現代社会学』（関西社会学会）専門委員（2007～09年度）／すべて論文査読の担当、社会調査士資格認定機構理事（2003～09年度）・科目認定委員会委員長（2007～09年度）、将来構想委員会委員（2008年度～）、研究研修委員会委員（2007年度～）、文部科学大臣認定・日本版総合的社会調査共同研究拠点・大阪商業大学JGS S研究センター・運営委員会委員（2008年8月～）、「成熟社会の労働哲学研究会」（サントリー文化財団特別研究助成 研究会メンバー 2008年9月～）
- 皆藤章：日本臨床心理士養成大学院協議会事務局長、日本芸術療法学会評議員、京都府臨床心理士会副会長
- 河合俊雄：日本箱庭療法学会常任理事、箱庭療法学研究編集委員長
- 河崎美保：京都市小学校教育心理学研究会講師
- 川崎良孝：日本図書館研究会理事長
- 桑原知子：日本箱庭療法学会常任理事、文部科学省中央教育審議会専門部会委員
- 駒込武：日本教育史学会理事兼書評委員兼事務局、日本台湾学会理事兼機関誌編集委員
- 子安増生：日本発達心理学会理事長、大学基準協会大学評価委員会副委員長、日本学術会議連携会員、よみうり子育て応援団講師（讀賣新聞社大阪本社）
- 楠見孝：日本心理学会代議員、日本認知科学会運営委員、日本教育心理学会常任編集委員、日本認知心理学会理事・編集委員、京都大学 E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修講師、(社団)日本経営協会第9期人材マネジメント研究会講師、京都市研究開発学校運営指導委員会委員
- 松下佳代：日本教育方法学会理事、日本カリキュラム学会理事、教育目標・評価学会理事、大学教育学会理事、京都高等教育研究センター研究員、学校図書算数教科書著作者、2008年度「質の高い大学教育推進プログラム」審査委員
- 松沢哲郎：日本霊長類学会（理事）、日本動物心理学会（理事）、日本赤ちゃん学会（副理事長）、京都大学学士山岳会（理事）、日本学術会議会員（20-21期）、NBRP—情報—運営委員会委員、生物遺伝資源委員会委員、科学技術・学術審議会専門委員
- 溝上慎一：日本青年心理学会『青年心理学研究』編集委員、広島大学高等教育研究開発センター客員研究員、International Conference on the Dialogical Self、Scientific Committee 委員、大学教育学会理事、日本青年心理学会理事、兵庫教育大学教育・社会調査研究センター客員准教授、比治山大学高等教育研究所客員研究員、電通育英会大学生調査プロジェクトアドバイザー、ANA 総合研究所ホスピタリティ産業を支える人材育成における産学連携プログラムに関する委員会委員・ワーキンググループリーダー
- 明和政子：日本動物心理学会編集事務局幹事、日本動物心理学会編集委員、財団法人中山科学振興財団平成20年度選考委員、独立行政法人科学技術振興機構（JST）戦略的創造研究推進事業（ERATO）浅田共創知能システムプロジェクト研究推進委員

永田素彦：日本質的心理学会常任理事、日本グループ・ダイナミクス学会理事

西平直：世田谷市民大学運営委員ほか

西岡加名恵：教育目標・評価学会理事、日本教育方法学会理事

荳阪直行：日本学術会議 20-21 期会員（心理学・教育学委員会「脳と意識」分科会委員長、科学者委員会委員、地区会議代表幹事、近畿地区代表幹事、学術体制分科会委員）、文部科学省（科学技術・学術審議会・脳科学委員会委員、脳科学研究推進懇談会委員、脳科学研究戦略推進プログラム委員）、Frontiers in Human Neuroscience (Review Editorial Board)、日本心理学会専門別代議員、日本学術振興会・科研費第 2 段審査委員、日本ワーキングメモリ学会会長、国際高等研究所・研究プロジェクト（科学技術文化）研究員、関西心理学会顧問

大塚雄作：独立行政法人大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員（教育学系）、独立行政法人大学評価・学位授与機構短期大学機関別評価委員会委員（2004-）、独立行政法人大学評価・学位授与機構大学機関別評価委員会委員（2008-）、特定非営利活動法人実務能力認定機構理事（2003-）、財団法人大学コンソーシアム京都 FD フォーラム企画検討委員会委員（2005-）、最高裁判所家庭裁判所調査官試験委員会臨時委員（2006-）、文部科学省「平成 19 年度先導の大学改革推進委託事業—社会の多様なニーズに対応した産学連携教育手法に関する調査研究」委員会委員（2007-）、ISO/TC232（人材育成と非公式教育サービス）国内審議委員会委員（2007-）

大山泰宏：総合企画委員会委員（日本臨床心理士会）、未来の京都創造研究会委員（京都市）

齋木潤：日本認知科学会常任運営委員、日本基礎心理学会編集委員、奈良県わかりやすい道案内検討委員会委員

櫻井芳雄：産業技術総合研究所脳神経情報研究部門評価委員長、医療機器開発ガイドライン神経刺激装置開発ワーキンググループ委員、高度通信・放送研究開発委託研究評価委員

佐藤卓己：日本マス・コミュニケーション学会理事、国際日本文化研究交流財団・留学生事業審査会委員、同財団 招致・派遣事業審査会委員、読売新聞社読書委員、朝日新聞社紙面審議会委員、放送分野におけるメディア・リテラシー教材の普及・啓発に関する調査研究会委員（総務省）

杉本均：日本国際協力機構（JICA）講師「日本の教育（Education in Japan）」

鈴木晶子：日本学術会議第 21 期会員（第一部）、日本学術会議心理学・教育学委員会・心と身体から教育を考える分科会委員長、日本学術会議・科学と社会委員会・科学力増進分科会副委員長、日本学術会議・リスク分科会委員、日本学術会議・医学教育分科会委員、教育思想史学会理事、教育哲学会理事、日独文化研究所評議員、文字文化研究所理事、科学技術の智プロジェクト評議員

高見茂：日本教育行政学会理事、関西教育行政学会会長、京都府教育委員会「まなび教育推進プラン」政策立案委員会委員、京都府教育委員会「学校の組織運営の在り方研究会」委員

田中耕治：尼崎市立教育総合センター教育研究顧問講師、奈良女子大学学校園共同研究員、滋賀県立膳所高等学校 SSH 共同研究顧問、京都市立高倉小学校共同研究委員

田中正之：京都市美術館ワークショップ「動物の色を探る」講師（京都市, 2008.7.27.）、京都市動物園講演会「アフリカのおはなし—タンザニアの野生動物たち—」講師（京都市, 2008.11.3.）、京都府立洛北高校 SSH 2 年生校外学習 講師（京都市, 2008.10.1.）、京都府立洛北高校 SSH 1 年生校外実習 講師（京都市, 2008.11.11-12.）、京都新聞「かがくのじかん」（2008.5.18.）、読売新聞「ズームアップ」ズーッと勉強でござる（2008.5.28.）、朝日新聞「パソコンで実験中：京都市動物園マンドリルとテナガザル」（2008.5.31.）、朝日小学生新聞「動物園×大学 研究で協力 京都大学と京都市動物園」（2008.8.21.）、京都新聞「はい応答室」（2008.9.7.）、朝日新聞「生き生き動物写真 市動物園と京大連携」（2008.9.18.）、毎日新聞「マンドリル意外と賢い」（2008.10.25.）、京都新聞「アフリカの動物生態知って 京大准教授が視察体験講演」（2008.11.4.）、朝日新聞「マンドリルも「1」「2」識別」（2008.11.15.）、朝日新聞「青鉛筆」（2008.11.16.）、読売新聞「関西トピックス」日本の霊長類学 60 年」（2008.11.21.）、京都新聞「市動物園で知性実験 多様な霊長類に着目」（2008.11.24.）、KBS 京都「京のまち」冬の動物園の楽しみ方！（2008.12.7.）

田中每実：教育哲学会常任理事・機関誌編集委員長、教育思想史学会理事、大学教育学会常任理事、日本学術会議連携会員、文部科学省中央教育審議会大学分科会専門委員、大阪大学 大学教育実践センター外部評価委員、関西地区 FD 連絡協議会代表幹事校・代表

田中康裕：日本箱庭療法学会理事（事務局長・編集委員）、日本ユング心理学会常任理事（書記・訓練委員・編集委員・選考委員）、財団法人日本臨床心理士資格認定協会評議員（教育研修委員）

辻本雅史：日本思想史学会会長、教育史学会事務局長、関西教育学会会長、日本学術会議連携会員、(社)心学明誠舎理事・学術専門委員

渡邊洋子：日本社会教育学会年報編集委員、日本学習社会学会紀要編集委員、日本医学教育学会マスター検討委員会委員、京都府生涯学習審議会委員、滋賀県人権施策推進審議会委員、京都市ユースサービス協会理事、新潟県教育総合研究センター研究委員、北京師範大学教育学院客座教授

やまだようこ：日本質的心理学会常任理事、質的心理学研究常任編集委員、日本発達心理学会理事、日本心理学会議員、日本学術会議連携会員

矢野智司：教育思想史学会会長、関西教育学会副会長、日本教育学会理事、教育哲学会理事

資 料

ロゴマークについて



本拠点のテーマである、有能感・達成感・生命感が合わさって幸福感（心が活きる状態）が生まれる様子を、3つの色が重なり合い中心に白い空間が生まれることで表現しています。

このデザインは、京都大学学術情報メディアセンター客員教授奥村昭夫先生によるものです。奥村昭夫先生は、ロート製薬・ディアモール大阪シンボルマーク、グリコのCI、グリコ・月桂冠・田辺製薬・牛乳石鹸・近鉄百貨店のパッケージデザインなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。

<http://www.okumura-akio.com/>

About Our Logo



The white part of our COE project logo indicates how a sense of happiness or revitalizing conditions for hearts and minds is formed when three themes of our project, a sense of competence (capability), a sense of accomplishment, and a vital sense of life overlap.

This design was created by a visiting professor, Akio Okumura, Academic Center for Computing and Media Studies, Kyoto University. Prof. Okumura is a well-known graphic designer who created a number of designs such as symbol marks for Rohto Pharmaceutical Co., Ltd., and Diamor Osaka, CI Mark of Glico, and various package designs for Glico, Gekkeikan, Tanabe Seiyaku Co., Ltd., Gyunyu Sekken, and Kintestu Department Store.

For further information on Prof. Okumura, please refer to <http://www.okumura-akio.com/>

グローバルCOEニュース



研究開発コロキアムを開講します。
講演・シンポジウム・ワークショップも続々開催。

◆マルタ・ヒル＝ラクルス先生を囲む会

日時: 2008年4月11日(金)午後3時～5時
場所: 教育学部2階中央装置室(215室)
講師: Prof. Marta Gil Lacruz (University of Zaragoza, Spain)
趣旨: 京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」では幸福感の国際比較研究を主要課題とし、アメリカ、イギリス、ドイツ、スペインなどの研究者と共同研究体制を構築中です。スペインとの共同研究のカウンターパートがヒル＝ラクルス教授で、この目的のためグローバルCOEで教授を招聘しました。2008年3月14日～4月29日まで日本に滞在されます。心理学に関心のある人だけでなく、幸福感の研究、現代スペイン事情などに関心がある方にも是非おいていただければと思います。使用言語は英語です。

○研究開発コロキアム: グローバルCOEからは15の授業を開講

赤上 裕幸: 情報化社会における文化政策とメディア教育
藤浦 真仁: 関与の「質」、記述の「質」、理論の「質」を問う—事象のアクチュアリティに迫る質的研究を目指して—
菊澤 聖子: 教育における「幸福」をめぐる語りの創出にかかわる萌芽的研究
木戸 彩恵: 他者との対話を通して生成される文化のナラティブ: 文化・メディア・教育を通した日常的行為へのアプローチ
桐村 豪文: 実践を支える教育行財政制度の可能性と限界
小宮 あすか: 注意の制御スタイルに文化が及ぼす影響—実験心理学的アプローチを用いて—
鮎島 輝美: 介護における「負担」観から新たな価値観の創造に向けて—家族による看取りの語りから学ぶ—
荘島 幸子: 関係性(家族間・世代間)としての生涯発達—ナラティブ・アプローチからその変化プロセス捉える
高橋 洋一: 医学教育における共感性と他者理解を深める学習についての実践的研究
中村 哲之: 遊び行動と認知的機能の関係性についての比較認知的科学的・比較認知発達科学的的研究
森木 奈美子: (告白)の現代
廣瀬 智士: 他者意図理解における視覚意識の役割
樋浦 郷子: 近代ナショナリズムをめぐる理論的思索と実証的研究—日本の植民地統治を中心に—
前原 由喜木: 協同課題の解決における前頭葉機能に関する研究—人のこころを思うとき・機械のココロに出会うとき—
本島 優子: 家族と子どもの社会情緒的発達: 縦断的デザインによる検討

※シラバスなど、詳細は4月14日以後教務窓口にて

グローバルCOEニュース



5月と6月の行事
講演・シンポジウム等開催予定

◆ Bergen教授講演会・セミナー

日時: 2008年5月8日(火) 13:30～17:30
場所: 京都大学百周年時計台記念館2F 会議室III
タイトル: 言語理解におけるメンタルシミュレーション
発表者: ベンジャミン・バーゲン(ハワイ大学准教授)

◆ Higgins教授講演会・セミナー

日時: 2008年5月22日(木) 13:30～17:30
場所: 京都大学百周年時計台記念館2F 会議室IV
タイトル: 文化とパーソナリティ再考
発表者: トーリー・ヒギンズ(コロンビア大学教授)

◆「人間とは何か」: 霊長類研究所・野生動物研究センター連続講義

日時: 2008年5月28日(水)～31日(土)
場所: 京都大学(吉田泉殿、芝蘭会館、時計台百周年記念館)
主催: 京都大学霊長類研究所・京都大学野生動物研究センター
共催: グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」他
後援: 日本学術振興会・在日フランス大使館

◆第20回国際人間行動進化学会

日時: 2008年6月4日(水)～8日(日)
場所: 京都大学時計台百周年記念館
主催: 国際人間行動進化学会
共催: グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」他

◆シンポジウム「人生と病いの語り」(日本質的心理学会行事)

日時: 2008年6月8日(日) 13:30～16:30
場所: 京都大学総合人間学部棟1102 (先着100人・非会員1000円)
タイトル: 人生と病いの語り
話題提供: やまだようこ・支木クレイグ・滋子・江口重幸
コメンテータ: 岸本寛史・山口智子 (司会: 永田素彦)

グローバルCOEニュース



これからの行事
講演・シンポジウム等開催予定

◆ユニットC主催: 「映像ナラティブ・ワークショップ」

(第3回グローバルCOE主催ワークショップ)
日時: 2008年6月25日(水) 13時00分～18時00分
場所: 京都大学 芝蘭会館 研修室
タイトル: 映像ナラティブ・ワークショップ
発表者: 高橋正実(ノースイースタン イリノイ大学・准教授)

◆ユニットC主催: 「スピリチュアリティに関する講演会」

(第10回グローバルCOE主催講演会)
日時: 2008年6月26日(木) 15時00分～17時00分
場所: 京都大学 芝蘭会館 研修室
タイトル: スピリチュアリティに関する心理学的考察
発表者: 高橋正実(ノースイースタン イリノイ大学・准教授)

◆ユニットC共催: 第2回多文化研究の国際ワークショップ

(第3回グローバルCOE共催ワークショップ)
日時: 2008年7月10日(木) 14時00分～18時15分
場所: ウィーン大学 心理学部
タイトル: The 2nd International Workshop on Multi Cultural Studies: Research Collaboration between the University of Vienna and Kyoto University
企画者: Christiane Spiel, Dagmar Stromeier (ウィーン大学)
発表者: 明和政子(京都大学)・Sheri Bauman(アリゾナ大学)・やまだようこ(京都大学)・戸田有一(大阪教育大学)および京都大学とウィーン大学の若手研究者・大学院生

グローバルCOE: <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>

グローバルCOEニュース



これからの行事
講演・シンポジウム等開催予定

◆「批判的思考講演会」

(第15回グローバルCOE共催講演会: ユニットB)
日時: 2008年7月27日(日) 15時00分～16時30分
場所: 京都大学百周年時計台記念館2階 会議室III
タイトル: 共同作業としての批判的思考と「思いやりの原理」
発表者: 伊勢田哲治(京都大学大学院文学研究科准教授)

◆「社会脳2008」

(第2回グローバルCOE共催シンポジウム: ユニットA)
日時: 2008年8月2日(土) 13時00分～17時00分
場所: 京都大学文学部第3講義室
タイトル: 「社会脳2008」
話題提供: 「はじめに」学阪直行(京都大学・文); 「駆け引きする脳」村井俊哉(京都大学・医); 「うそをつく脳」藤井俊勝(東北大学・医); 「だまされる心」仁平義明(東北大学・文)

◆「大学院修了後キャリア形成プログラム講演会」

日時: 2008年9月26日(金) 13時00分～15時00分
場所: 京都大学百周年時計台記念館2階 国際交流ホール I
講演者: 惣脇 宏(そうわき ひろし)・国立教育政策研究所次長
http://www.nier.go.jp/07_kenkyusha/0102.htm

グローバルCOE: <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>

グローバルCOEニュース

これからの行事:9月

講演・ワークショップ等開催予定

◆「森の心、海の心:チンパンジーとイルカの比較認知科学」
(グローバルCOE後援国際ワークショップ)

日時:2008年9月12日(金)10時00分~17時30分

場所:名古屋港水族館 北館レクチャールーム

主催:京都大学霊長類研究所、野生動物研究センター

◆国際ワークショップ:「比較認知発達神経科学の挑戦」
(第4回グローバルCOE主催ワークショップ:ユニットA)

日時:2008年9月17日(水)13時00分~15時30分

場所:京都大学芝蘭会館 別館 Annex 2F

タイトル:比較認知発達神経科学の挑戦

発表者:Okamoto-Birth Sanae、菊水健史、森口佑介、
Teresa Farroni、川田学、赤木和重

◆大学院修了後キャリア形成プログラム講演会
(第11回グローバルCOE主催講演会)

日時:2008年9月26日(金)13時00分~15時00分

場所:京都大学百周年時計台記念館・国際交流ホール I

タイトル:教育研究と政策をつなぐ

—国立教育政策研究所の役割—

講演者:惣脇宏(文部科学省生涯学習政策局生涯学習総括官、
前国立教育政策研究所次長)

グローバルCOE: <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>

グローバルCOEニュース

COE助教(教育学分野)を公募します。

講演・シンポジウム・ワークショップも続々開催。

・COE助教の全国公募

分野:教育学

公募期間:2008年10月1日~2008年10月31日書留郵便必着

採用期間:2009年1月1日~2012年3月31日(最長3年3か月)

※詳細はホームページに掲載する募集要項を参照

・慶應義塾大学とのGCOE合同シンポジウム(2)

テーマ:「心、病、文化」(仮題)

日時:2009年1月11日(日)午後1時~5時

場所:時計台記念館国際交流ホール I 通訳あり

講演者:マーガレット・ロック(カナダ・マギル大学名誉教授)

カール・ベッカー(こころの未来研究センター教授)ほか

・第3回グローバルCOE共催国際シンポジウム(ユニットD)

テーマ:「日本のFDの未来

—Building the core in faculty development—

日時:2009年1月24日(土)~25日(日)

場所:京都大学 芝蘭会館

主催:京都大学高等教育研究開発推進センター

・EXラボ(実施速報)

今年度は、5プログラムを実施。参加者51名(M1は41名)

参加者アンケートを実施しますのでご協力ください

<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>

グローバルCOEニュース

11月の行事案内

講演・シンポジウム・ワークショップ続々開催。

◆ワークショップ:「撮るものと撮られるものの関係性—
事実と物語の生成的関係をめぐって」

(第5回グローバルCOE主催ワークショップ:ユニットC)

日時:2008年11月5日(水)13時00分~18時00分

場所:京都大学芝蘭会館 研修室

タイトル:撮るものと撮られるものの関係性

—事実と物語の生成的関係をめぐって

企画:やまだようこ(京都大学)

発表者:新井一寛(京都大学)・大石高典(京都大学)

お問合せ:参加無料。参加希望者は要予約

◆グローバルCOE共催シンポジウム

「病と臨床—病に生きる人間にみる臨床の知」

(第4回グローバルCOE共催シンポジウム:ユニットC)

日時:2008年11月17日(月)13時00分~16時00分

場所:京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール

タイトル:「病と臨床—病に生きる人間にみる臨床の知」

企画:皆藤章(京都大学)・河合俊雄(京都大学)

司会:皆藤章(京都大学)

話題提供:河合俊雄(京都大学)・清水亜紀子(京都大学)・

Alan Jacobson(Joslin糖尿病センター副所長)

指定討論:西平直(京都大学)・野間俊一(京都大学)

参加費等:無料・事前申し込み不要、通訳あり

<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>

グローバルCOEニュース

ドイツからCOE助教が着任

講演・シンポジウム・ワークショップ続々開催

◆グローバルCOE助教[国際公募]着任

ドイツから、ループレヒト・マッティグ(Ruprecht Mattig)先生
が11月1日付けて着任。専門は教育哲学。

◆「わかる」をたどる (第16回GCOE共催講演会:ユニットC)

日時:2008年11月12日(水)13時00分~16時30分

場所:京都大学教育学部本館 第3演習室(302室)

タイトル:「わかる」をたどる

企画:やまだようこ・明和政子(京都大学 教育学研究科)

発表者:高田明(京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科)

◆「病と臨床—病に生きる人間にみる臨床の知」

(第4回グローバルCOE共催シンポジウム:ユニットC)

日時:2008年11月17日(月)13時00分~16時00分

場所:京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール

タイトル:病と臨床—病に生きる人間にみる臨床の知

発表者:河合俊雄(京都大学)・清水亜紀子(京都大学)・

Alan Jacobson(Joslin糖尿病センター副所長) ※通訳あり

◆ワークショップ:「民意のリテラシー:「世論」民主主義と「輿論」
の可能性」(第6回GCOE主催ワークショップ:ユニットC)

日時:2008年12月5日(金)15時00分~18時00分

場所:京都大学教育学部本館 1階会議室

タイトル:民意のリテラシー:「世論」民主主義と「輿論」の可能性

企画・発表者:佐藤卓己(京都大学) ※事前連絡が必要

発表者:稲葉哲郎(一橋大学)・柿崎明二(共同通信社)

<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>

グローバルCOEニュース

教育学系新助教が決定(1月から)
講演・シンポジウム・ワークショップ続々開催

- ◆グローバルCOE助教(教育学)公募結果
元教育学研究科助教の小野文生氏に決定。
専門は教育哲学。採用は、2009年1月1日付。
- ◆京都大学・慶應義塾大学COE合同シンポジウム
「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」
日時:2009年1月11日(日)午前12時30分~16時30分
場所:京都大学時計台記念館2階 国際交流ホール I
講演者:マーガレット・ロック(カナダ・マックギル大学)
カール・ベッカー(京都大学)
通訳:北中淳子(慶應義塾大学)
討論者:鈴木晶子(京都大学)
宮坂敬造(慶應義塾大学)
- ◆第3回グローバルCOE共催国際シンポジウム
日本のFDの未来—Building the core in faculty development—
日時:2009年1月24日(土)~25日(日)
場所:京都大学 芝蘭会館
主催:高等教育研究開発推進センター
<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>



グローバルCOEニュース

謹賀新年(2009年 元旦)
講演・シンポジウム・ワークショップ続々開催

- ◆京都大学・慶應義塾大学GCOE合同シンポジウム
「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」
日時:2009年1月11日(日)午前12時30分~16時30分
場所:京都大学時計台記念館2階 国際交流ホール I
講演者:マーガレット・ロック(カナダ・マックギル大学)
カール・ベッカー(京都大学)
- ◆ヤロウ・ダナム博士講演会
「彼我の心理学:潜在的集団間態度の起源」
日時:2009年1月13日(火)16時00分~18時00分
場所:教育学部2階 中央装置室(215室)
講演者:ヤロウ・ダナム(米カリフォルニア大学マーセド校)
指定討論:エマニュエル・マナロ(NZ オークランド大学)
- ◆「ロンドン大学の医療と教育」講演会
日時:2009年1月19日(月)13時00分~15時00分
場所:京都大学芝蘭会館研修室
講演者:内藤 亮(英ロンドン大学)
- ◆第3回GCOE共催国際シンポジウム
日本のFDの未来—Building the core in faculty development—
日時:2009年1月24日(土)~25日(日)
場所:京都大学芝蘭会館
主催:高等教育研究開発推進センター



グローバルCOEニュース

院生対象説明会(21年度公募)
講演・シンポジウム・ワークショップ続々開催

- ◆グローバルCOE
院生対象説明会
日時:2009年2月5日(木)
午後5時~6時
場所:教育学部第一講義室
(総合研究2号館1階)
内容:平成21年度院生対象
各種公募の説明ほか
対象:拠点の博士課程院生
(進学見込の者を含む)
- ◆第2回京大-ロンドン大(IoE)合同シンポジウム
テーマ: The self, the other and language II:
Dialogue between philosophy and psychology
日時:2009年2月28日(土)~3月1日(日)
場所:京大会館(左京区吉田河原町15-9)
内容:昨年に引き続き、ロンドン大学教育研究所
(Institute of Education)の Paul Standish
教授、Jan Derry 博士、大学院生数名
が参加し、合同シンポジウムを開催

拠点の院生支援事業
研究開発プロジェクト
競争的研究費
外国留学支援
外国学会発表支援
英語論文作成支援
キャリア開発支援 など

グローバルCOEニュース

講演・シンポジウム・ワークショップ続々開催
<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/symposium>

- ◆21年度大学院生対象公募締切
2009年2月27日(金)午後4時(郵送必着)
公募の詳細は、GCOE学内専用ページ参照
<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/internal/>
- ◆第2回京大-ロンドン大(IoE)合同シンポジウム
テーマ: The self, the other and language II:
Dialogue between philosophy and psychology
日時:2009年2月28日(土)~3月1日(日)
場所:京大会館(左京区吉田河原町15-9)
発表: Paul Standish 教授、Jan Derry 博士ほか
- ◆ロギー教授講演会(ユニットA共催)
日時:2009年3月7日(土)15時30分~17時00分
場所:京都大学文学部新館 第三講義室
講演者: Prof. Robert H. Logie (Univ. of Edinburgh)
演題: Domain specificity in the mental workspace
- ◆大学院生養成経費成果発表会
日時:2009年3月27日(金)10時00分~15時30分
場所:教育学部 第一講義室&第二講義室
(総合研究2号館1階)

平成20年度活動報告書「心が生きる教育のための国際的拠点」

発行者：子安 増生（グローバル COE 拠点リーダー）

刊行年月：平成21年7月

印刷会社：株式会社 北斗プリント社

連絡先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科・子安 増生

電話・ファックス 075-753-3063

電子メール HGB03675@nifty.com
